

廣生

文翰

卷一



800430

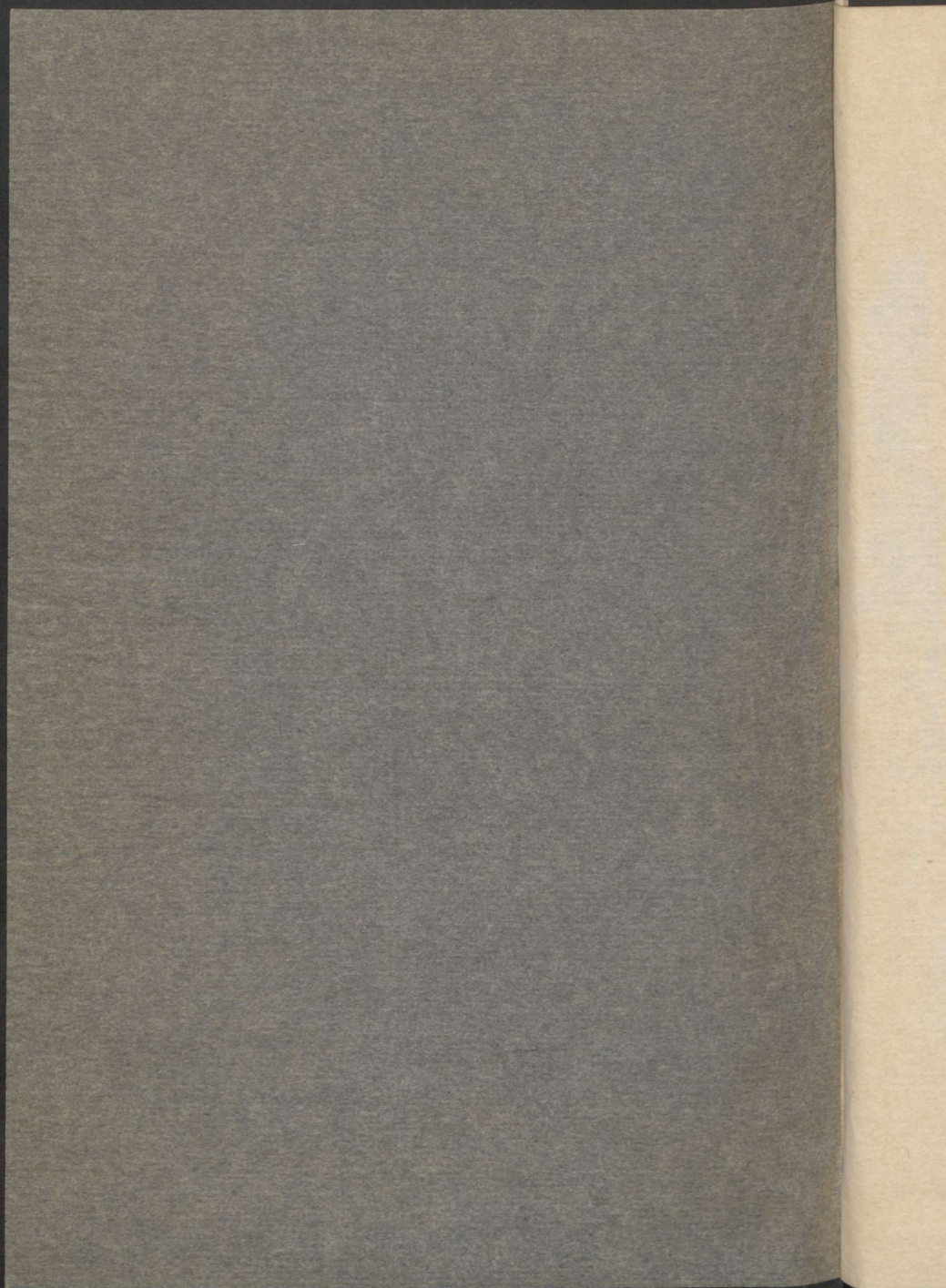




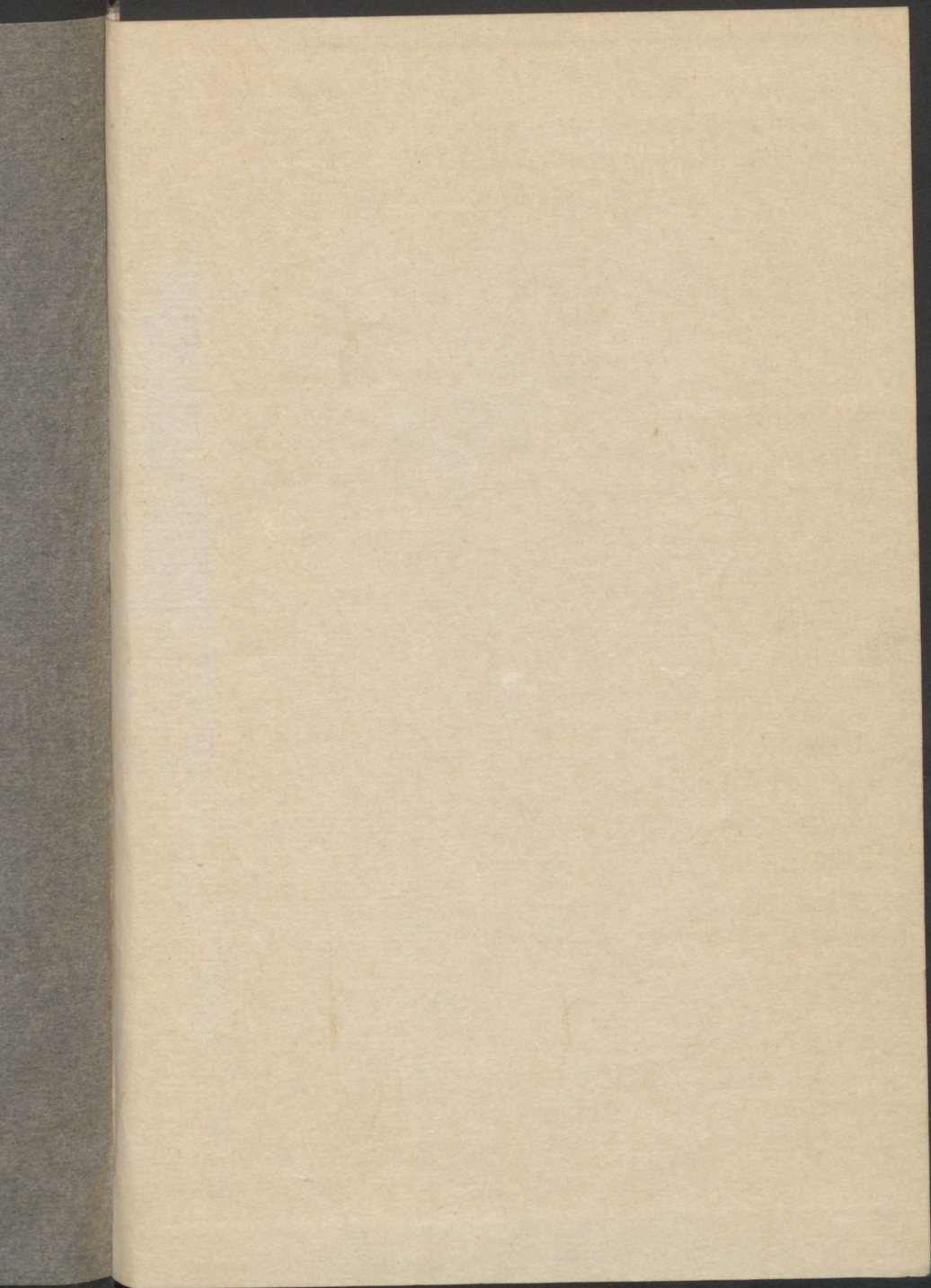






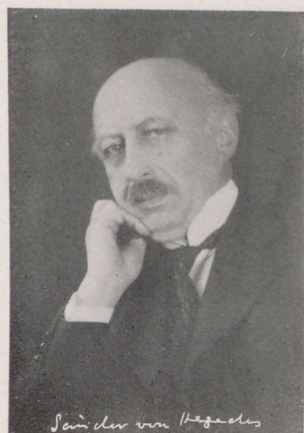








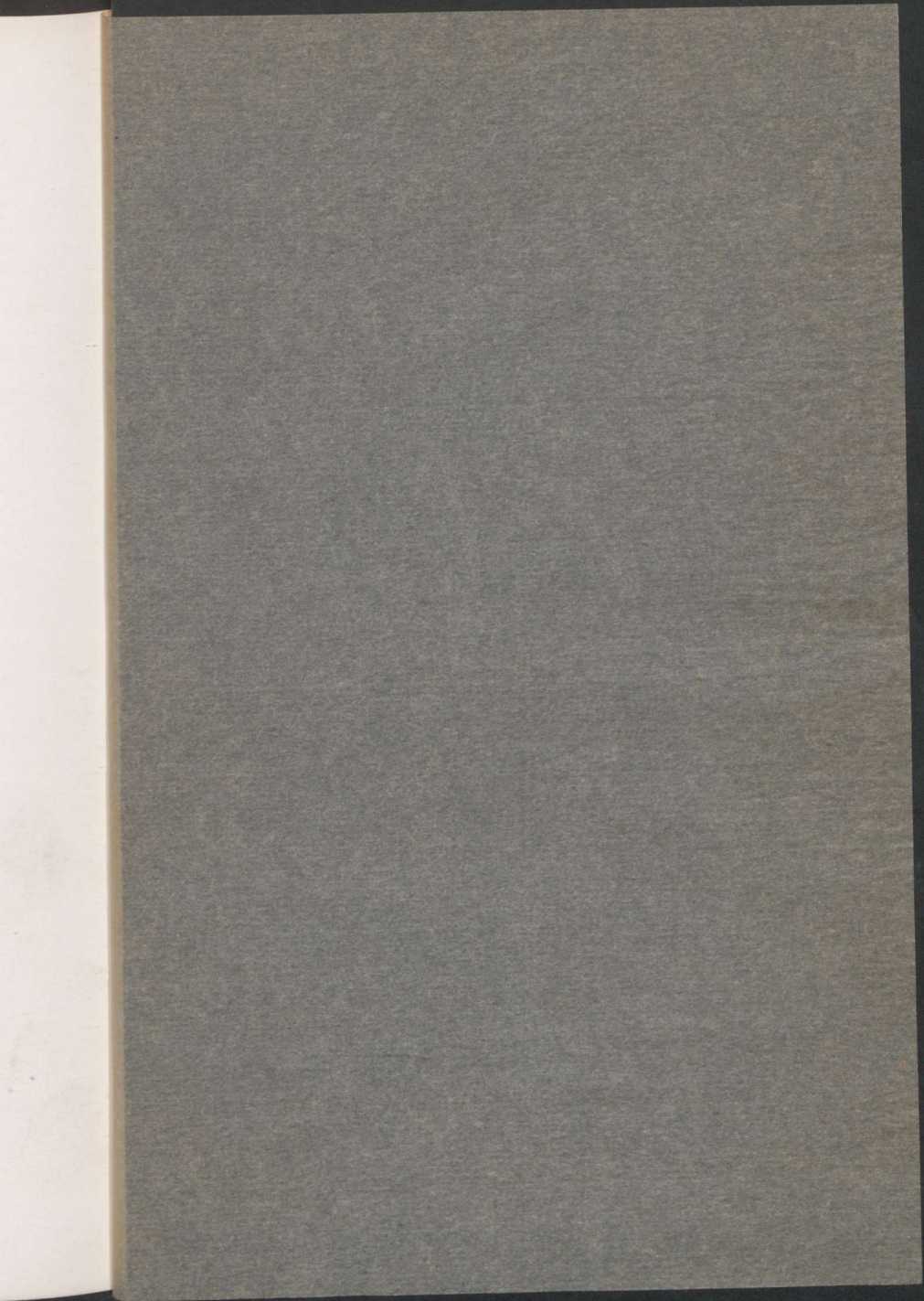
著  
者  
ヘ  
ゲ  
デ  
ユ  
ス



譯  
者  
角  
岡  
知  
良









# 殺 人 犯

作 ス ュ デ ゲ ヘ  
譯 良 知 岡 角



行發 房 書 海 言 京東

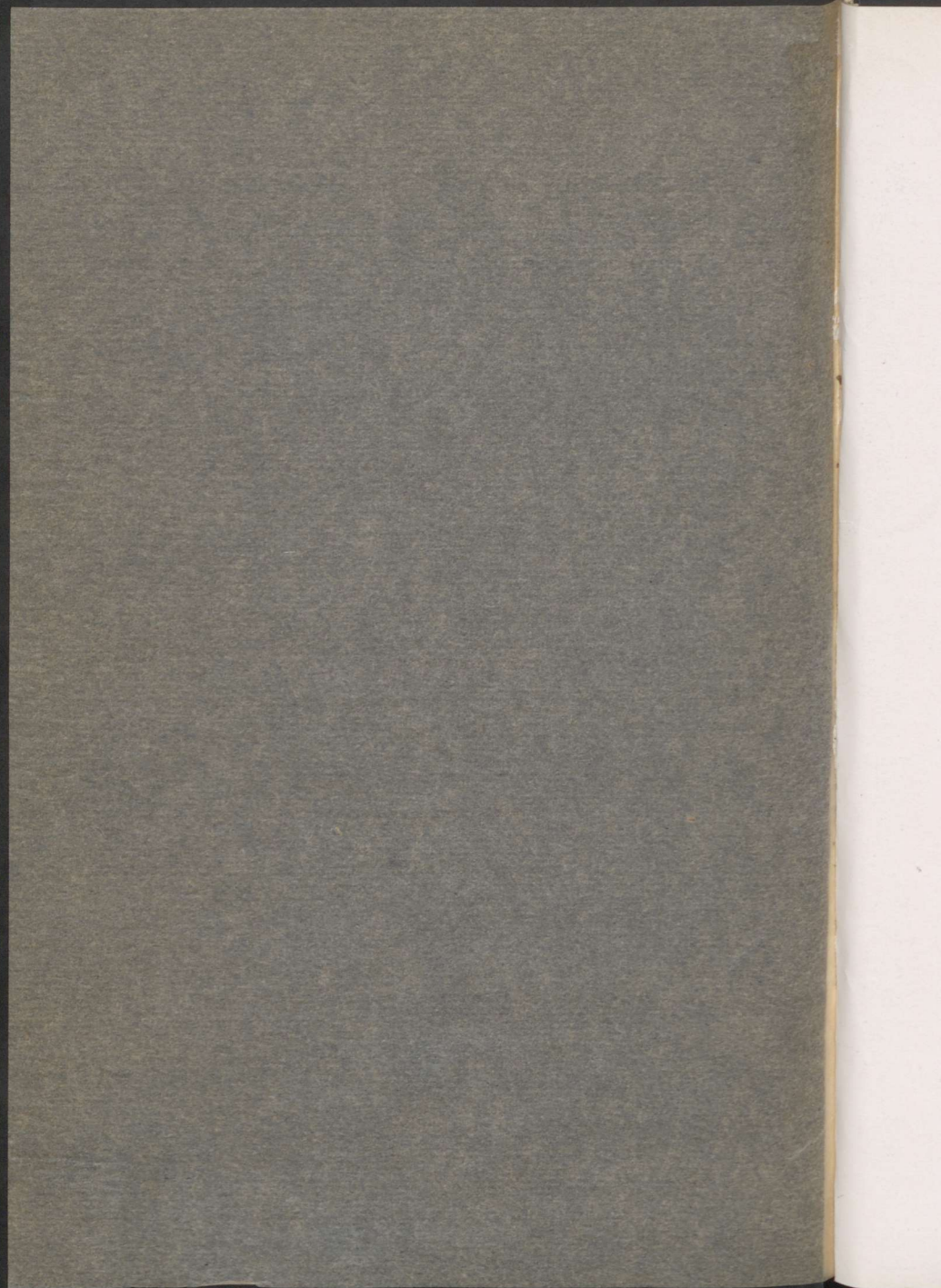




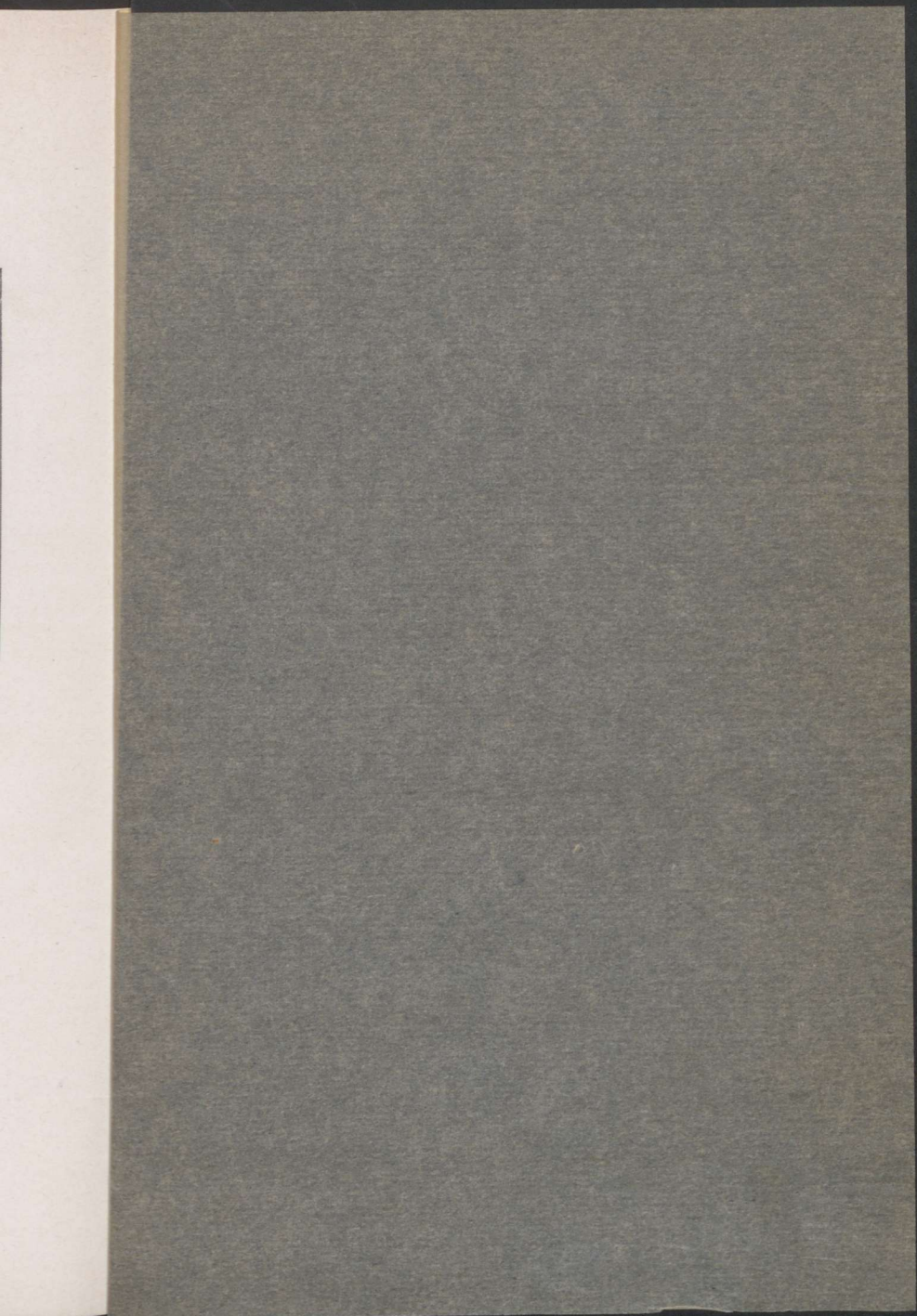
800430













## 譯 者 序

私は五年前から、わが日本民族と民族的血縁關係にあるハンガリー——ハンガリー人自らはマジャアルと稱し、其の國名をマジャアル・オルテークと呼ぶ——に呼び掛けて民族的親善運動に手を染めた。これが機關として月刊雜誌『大道』を發刊した。足掛四年貳拾八號に到り、私が聊か健康を害したのと、本職の法曹事務が忙がしくなつたため、一時休刊するの止むなきに至つた。だが、この小さな月刊雜誌はハンガリーでは豫想外にもてた。『大道』が着いた日を、お祭りのやうな騒ぎだ、とハンガリー人の同志から知らしてくれた。勿論、私は紙面の一隅に獨逸語欄を設け、評論や、通信や又は日本文化の紹介に努力することを忘れなかつた。この試みのう



ちで、日本詩歌の散文的獨逸語譯——例へば、和歌、俳句、民謠或は漢詩の『蒙古來』や『白虎隊』等々——は可成、興味を惹いたやうで、ハンガリーの或る中學校の先生から、日本精神を説明する教材にするから、既刊の『大道』の殘部ありつたけを郵送して呉れと申し込んで來た。

また、千九百三十一年二月には、當時のハンガリー文部大臣クノウ・クレベスベルヒ伯爵から『大道』の記事は有益にして興味に富むとの讃辭を忝うした。

二つの民族間の親善融和を求むるには、相互の民族精神を理解し合ふことが肝要である。それには民族精神の反映であり産兒である文藝詩歌の相互的翻譯紹介——即ち、ある意味の文化交流が、効果的な一方法たるを失はない。私の試みも、ここを狙つたのである。所が、そこを又狙つて、ハンガリーの詩人ヘゲデユス君から夥しい小品ものと、其の傑作たる戯曲『殺人犯』の獨逸語譯レクラム版を私の許へ送つ



てきて、これを日本語に翻譯して呉れ、而して民族的に血のつながつてゐる懐しい日本人諸君に自分の作品を紹介して呉れ、と申し込んできた。

そしてハンガリー製のおいしいチョコレートや土俗的な玩具や端麗な婦人用上衣や又は世界で一番おいしいと云はれてゐるトカイ産の葡萄酒等々を贈つて呉れた。天真爛漫なる詩人的性格が、これ等の贈物に象徴されてゐる。

ヘゲデユス君の友人なるブダペスト市、國民劇場の同人諸君からも、日本名譽領事のエドムンド・ホルロース氏からも、右の戯曲『殺人犯』の邦譯と、能ふ可くんば上演とを熱心に依頼して來た。そこで恩師菅虎雄先生を煩はし令息博雄君及び今成豊吉、鰐川龍之助三君の協力を求めて、右の翻譯を完成した。尙蘆谷瑞世君によつて翻譯された小説の中四篇及び散文詩『ロクサン』もこれを機會に收録した次第である。ハンガリーでは『日本を見て死ぬ』との諺が出來たさうだ。『日光を見ずに結構と



言ふな』と同意義である。富士<sup>そび</sup>聳え、櫻咲く、輝<sup>かがや</sup>かしき日本で、ヘゲデウス君の代表的作品が翻譯刊行されたと聞けば、無邪氣な同君は、どんなに喜ぶことだらう。而してヘゲデウス君の喜びは又實に私の喜びであらねばならぬ。更に日本及び洪牙利の理解ある人々がこの喜びに共に與つてくれれば、譯者の幸これにこした事はない。

昭和八年八月

ブダペスト市、「ツラン協會」名誉會員  
ブダペスト市、「日洪協會」名誉會員  
東京市「大道社」代表

角岡知良

Tomoyoshi Sumioka

Präsident der „Daido“ Gesellschaft in Tokio.

Ehrenmitglied der „Turan“ Gesellschaft in Budapest.

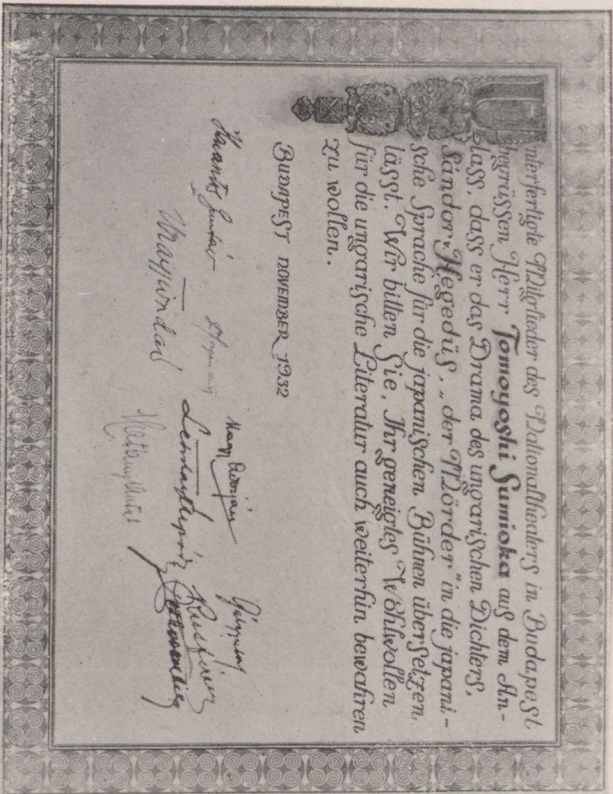
Ehrenmitglied der „Magyar Nippon“ Gesellschaft in Budapest.





フダベスト市國民劇場同人より譯者宛書簡

人  
フダベスト市に於ける國民劇場の左記同人等は我が流牙利の詩  
人シェン・ヘンデル・ハムに鑑み、角岡知良氏に敬意を表します。尚われ等は  
翻譯せらるるに鑑み、



流牙利文學に對する貴下の好意が、將來に亘りても渝らざらんと  
 を希うて止まざるものであります。

千九百三十二年十二月

フダベスト市

國民劇場同人署名



## 海外代表翻譯者

- 北米合衆國及カナダ、ハンス・バルチ(U.S.A) 紐育ブロードウェイ一五四七、ガイエティ・シアター・ビルディング)
- 塊太利、O.F、アイリヒ博士(ウイン市II、ブラーター街三八)
- 洪牙利、マキシミリアン・ヤルトン博士(ブダペスト、リボツト・ケルト一六)
- ロシヤ及ポーランド、P・ネルトナー(リガ市、書籍及樂譜商)
- スウェーデン及フィンランド、オスカー、ヴィーカンドー(ストックホルム市、國立劇揚舞臺監督)
- デンマーク及ノールウェイ、フオルマー・ハンセン(コペンハーゲン市、國立音樂學校、フェスター通り三六)
- フエリツクス・プロツホ後繼者(店主、アドルフ・スリヴィンスキー及エルンスト・プロツホ)

原著者の權利代表者(伯林、西北、6、ルイセ街二一)



在洪牙利日本名譽領事エドムンド・ホルロース氏より譯者宛書簡

角 岡 知 良 様

敬愛する貴下よ！

貴下の御懇親を忝うするシャンドル・フォン・ヘゲデウス氏は、當地に於て好評噴々たる詩人であり、且つ著作家でありますが、今般同氏より、貴國にて同氏の作品刊行の交渉が、貴下との間に具體化したる旨、日本帝國領事たる小生宛に報告がありました。

因て小生は未だ拜顔を得ざれども、貴國の領事として、フォン・ヘゲデウス宛の最近の貴翰に對し、二三卑見を申添へることの御許容を得たいと存じます。

申す迄もなく、我が畏友、フォン・ヘゲデウス氏の作品が、洪牙利の有識階級者間に普くもてはやされ、且つ愛讀されて居ることは敢て贅言を要しませぬ。又同氏の戯曲は當地では、すばらしい人氣を博し、その作風に、生粹の洪牙利調、所謂ヨーカイ(Yokai)風が表現されるや



うになつて以來は、斯道の専門家は勿論、一般大衆からも到る處で喝采を以て迎へられるに至りました。

このヨークイと申しますのは、洪牙利が前世紀に生んだ偉大なる小説家であり、又實に、フオン・ヘゲデユス氏の伯父に當ります。而してその天才は確に、其の後繼者にして血縁者たる氏に遺傳したやうに見受けられます。尙、貴翰中、將來引續き同氏の作品を御公表これある趣拜見いたし、小生等は大いに喜ばしく存じてゐる次第です。若し同氏の戯曲が實地に上演されることとなれば、洪牙利に於ては、全く並々ならぬ滿悦を喚起いたす可く、且つ貴地の上演も當地に於けると同じく、必ずや成功を收むべきものと確信いたします。

以上卑見を申述べたることを以て、殊更、小生が血族關係ある日洪兩民族間の形而上、形而下の紐帶を強化するを榮譽とし且つ義務と感ずる日本領事たる職責に由來するものとのみ御考へ下さらないことを望みます。それに付いても將來に至り貴下が愈倍々御盡力を賜らば、前掲小生の使命に付き非常なる後援と相成る可く、右に對し豫め、衷心よりの感謝を披瀝いたしま



す。これと同時に、御用の節は何時たりとも微力を貢献いたします故御下命を賜りたいと存じます。敬具

一九三二年十一月二十二日

アダベスト市日本領事館内

領事 エドムンド・ホルロース

Edmund Hollors

名譽領事書簡



## 紹介

ハンガリーは歐洲第一の親日國である。それには次の如き理由がある。第一ハンガリー人は、日本人とは同じツラン民族として血の繋がりがあると思つてゐる。第二ハンガリーは、わが國と同様、スラヴ民族とは利害を異にする。だから、日露の役に日本の快捷をわがことのように喜んだのはマジヤール人であつた。第三マジヤール族は、ヨーロッパに於て民族的に孤立し、しかも大國間に介在するため悲惨な歴史的經驗をもつ。第四ハンガリーは、大戦後の所謂民族自決主義による平和條約によつて、領土の三分の二、人口の過半數を失つたので、西歐白人によるこの無慈悲な強制條約は、アジア民族に對する繼子扱ひであるといふ反感を抱いてゐる。その他大戦中の友邦オーストリアまでが、平和條約に依りハンガリー領土の一部を奪つたこ



とが、特にハンガリー人の異民族に對する反感を昂めた。それに反し、日本はシベリヤ出兵の際ハンガリーの捕虜を同僚として好遇したことが、彼等の間にいゝ評判をなして居る。のみならず、トリアノン平和條約實施委員會において、日本委員はハンガリーに味方したといふ噂も相當に擴つてゐる。その他、一九一九年の洪國共產政府の主腦者の大部分が異人種ユダヤ人であつた關係上、他人に裏切られたやうな感を懷かしめ、ツランの同族、就中その盟主と仰いでゐる日本に對する憧憬となつて現はれたものと思はれる。

○

このハンガリー人の殊勝な親日振りにいたく感激された角岡知良氏は豫て、日洪親善促進の爲、尠からず盡力されつゝある。先年洪國攝政ホルテに來國俊の古刀を献上し、首相ゲンベスに日本刀を、農相マイエルに櫻の苗木を贈呈し、日本人と



して眞に相應しい好意を示された。本書の上梓も亦氏の同じような趣旨から拂はれた寡からざる犠牲の賜物たるに外ならぬと推察する。國民外交の功勞者として陰に敬意を表してゐる次第である。

○

ハンガリー國民文學の黄金時代は十九世紀の半ばから後半紀にかけ、即ちマジャール民族の建國一千年目にあたる一八九六年の頃をもつてその絶頂に達したものの、如くに思はれる。この時代の主なる文人の名を二三擧げれば、ハンガリー最大の抒情詩人ペテュフィ・シャンドル（一八二三—一八四九年）、國民的詩人アラニ・ヤーノシュ（一八一七—一八八二年）、わが近松門左衛門に相當する小説家ヨイカイ・モール（一八二五—一九〇四年）、ハンガリーの「ファウスト」と稱へられてゐる「人間の悲劇」の作者マダーチ・イムレ（一八二九—一八六四年）、等々輩出してマジャール民族の



絢爛の華はこゝに咲き亂れた。それ以降ハンガリー文學はヨーロッパの他の國々に於ける如く幾分癢癢期に入つたかの感がある。本ドラマの著者ヘゲデシュ・シヤンドルは、此の期における作家の一人にして、その構想は夢想的幽玄を追求して止まぬかの傾向を懷く劇作兼短篇小説家である。

○

ヘゲデシュ・シヤンドルは一八七五年ブダペスト市に生れ、初め技師として商務省に勤めてゐたが、三年ののち感ずる所あつて官を辭し、身を文藝に委ね、歐米の天地を氣儘に飛び歩き、旅のつれづれに物したものを世に問ふたのが、彼の文學的生活の初めであつたようだ。彼の主なる作物を年代順に列記すれば、『巨人の世界』（アメリカ旅行記、一八九八年）、『雲霧朦朧の中にある人々』（小説、一八九九年）、『南のフィヨルド』（旅行記、一九〇〇年）、『アメリカの色』（一九〇一年）、『語る夜々』



(一九〇二年)、『アメリカ』(劇、一九〇三年)、『サルタンの帝國』(一九〇三年)、『生き乍らの埋葬』(一幕物、一九〇三年)、『失はれた民謡』、『イカロス』(劇、一九〇五年)、『敗戦』(小説、一九〇六年)、『捕虜』(劇、一九〇五年)、『亡ぼされた國々』(劇)、『冒険家』(劇、一九一二年)、『喇叭手の帽子』、『生活の火』、『東洋の童話』、『金陽の祖國』、『レージュマサグの人』、等々で、彼の作物は、その題目によつても窺はるゝ如く、風變りな、奇矯突飛な、異國情調の豊かなところを多分にもつ、詰り、エクセントリックにしてエグゾーテックだ。で、この戯曲も亦その表題の示す如くこの範疇に入るものゝようだ。

○

彼の父は彼と同姓同名で、評論家にして財政通で、商相を勤めたこともある。彼の兄はヘゲデュシユ。ローラントで、予も知己を得てゐる。彼は一九二〇年から一九



二一年にかけ藏相をやつたこともある。現在はブダペスト大學の名譽教授といふ肩書を有し、又貯蓄銀行協會の總裁として實業界に活躍する傍ら、評論家として自由主義論壇に、主として日刊新聞「ペシュテ・ヒルラプ」に獨特の麗筆を揮つて居る。

昭和十年七月

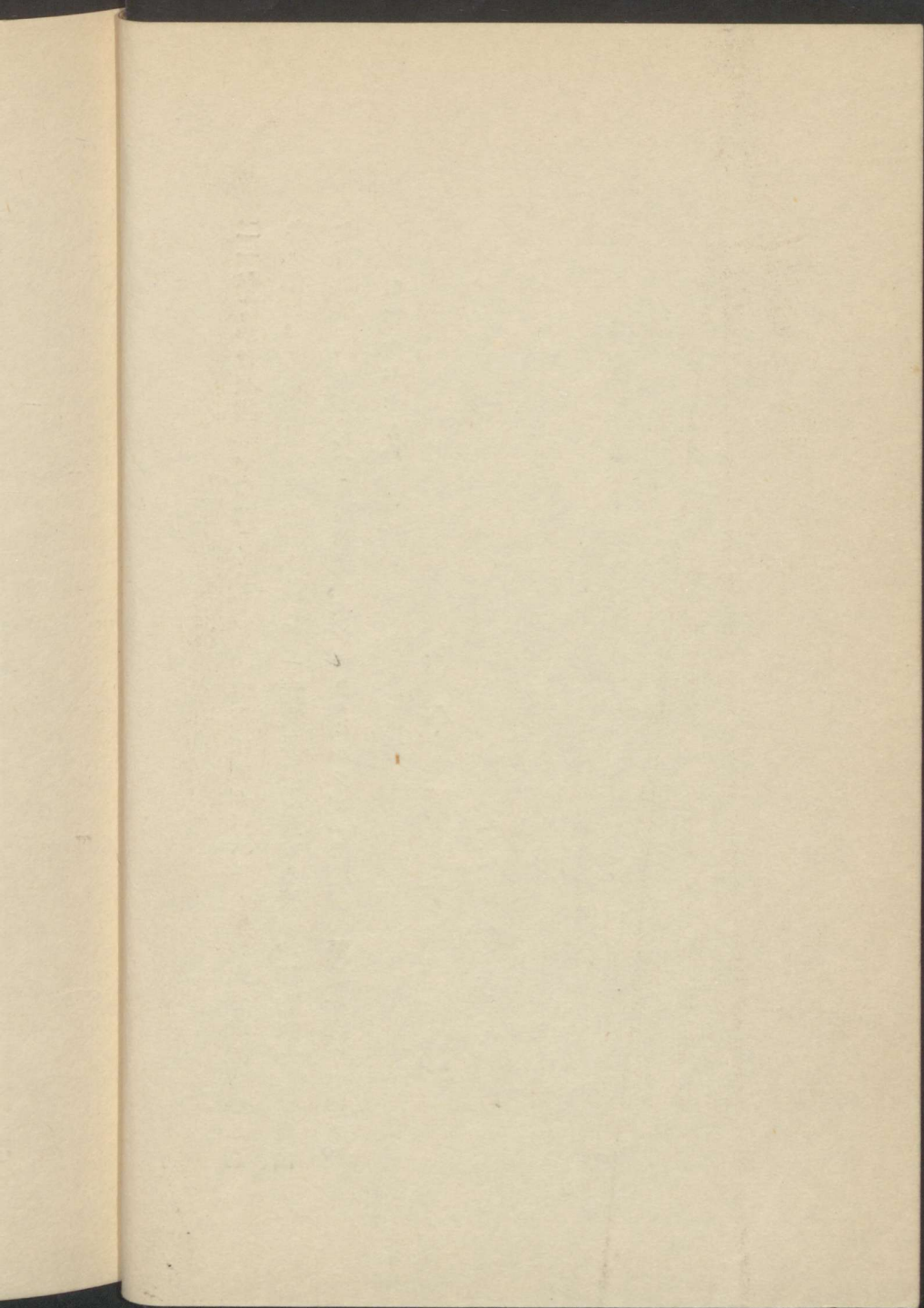
## 今 岡 十 一 郎

Juichiro Imaoka

紹

介







# 目次

譯者序	角岡知良
ホルローヌ名譽領事書翰	.....
紹介	今岡十一郎
殺人犯(戯曲)	角岡知良譯 一
説	蘆谷瑞世譯 一五
小 説	お母さんの手紙 一七
	ごろつきちいさん 一八
	殺人者の相續財産 二九
	魔の車輪 三九
ロ	
ク	
サ	
ン(散文詩)	蘆谷瑞世譯 三三
(獨文)	蘆谷瑞世

目次



## Inhalt

Vorwort: Tomoyoshi Sumioka

Zur Einfuehrung: Edmünd Hollós

Juichiro Imaoka

DER MOERDER, ein Drama.....1

uebertragen von Tomoyoshi Sumioka

Novellen .....163

Der Brief der Mutter .....165

Der alte Vagabund .....175

Die Erbschaft des Moerders .....187

Der Teufelsrad .....217

uebertragen von Mizuyo Ashiya

Roxan, ein Gedicht in Prosa .....229

uebertragen von Mizuyo Ashiya

Nachwort: Mizuyo Ashiya



# Der Moerder

殺

人

犯

(夢幻劇三幕)

作スユデゲヘ・ンオフ・ルードンヤシ

譯 良 知 岡 角



人物

ゲオルク・セルバン	企業家
テオドル・ライナー	銀行家
クラリツセ	その妻
ドクトル・ダニエーリ	狂博士
ブランダー、支配人	
ハウゼ、祕書	セルバンに仕ふ
セルバンの召使	
看護人	
第一の番人	サナトリウム内
第二の番人	
醫長	
探偵	一人
話聲	(幕の後から)

場所

第一幕 セルバン事務所内  
第二幕 セルバンの居間  
第三幕 或るサナトリウム内

時

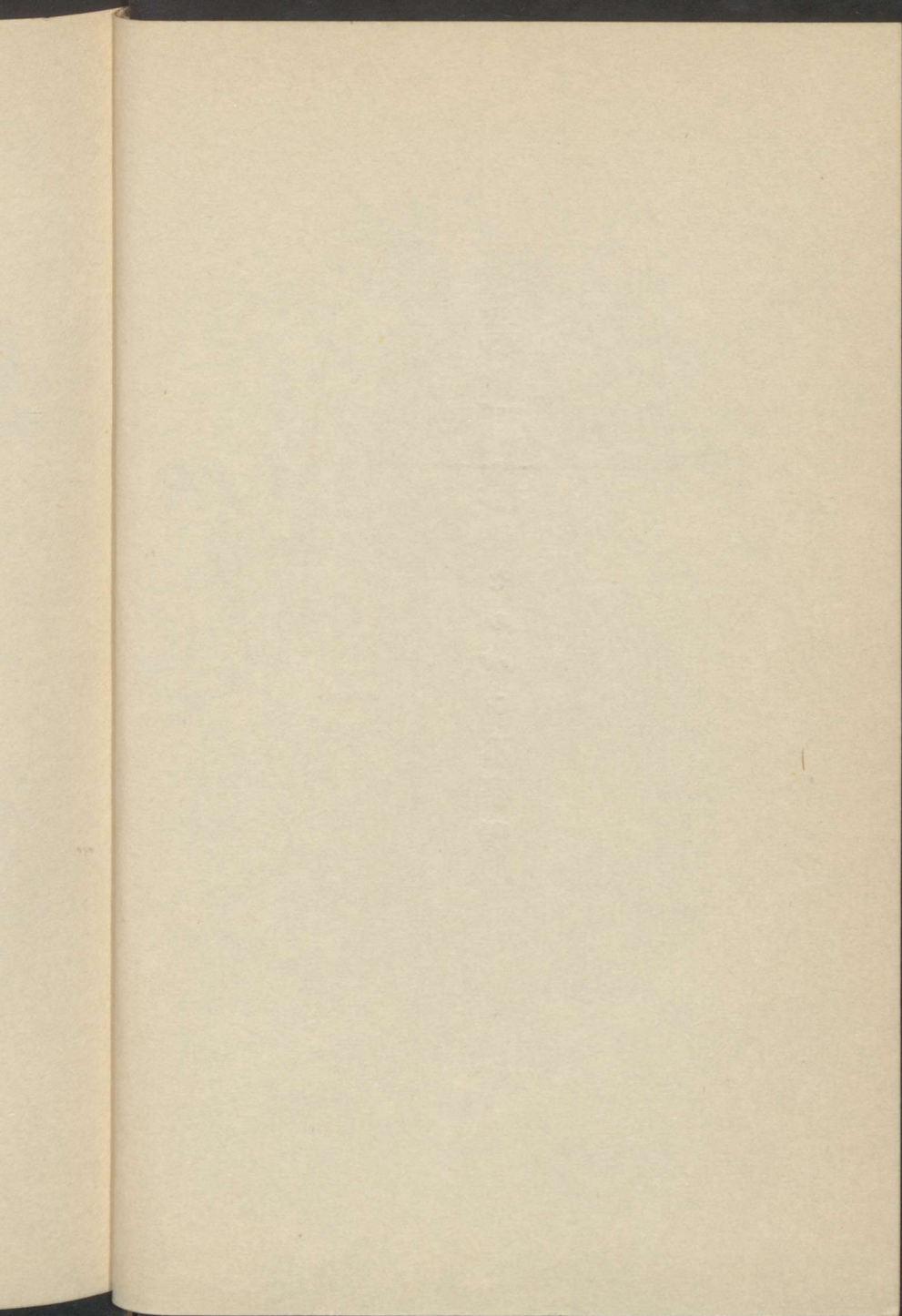
現代 ある大都會に於ける出來事  
右及左は觀客席より見たるものとす



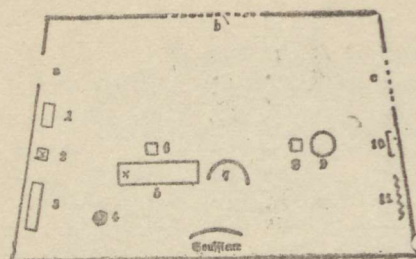
# 第一幕

セルバン事務所









a 一般出入口

b バルコニーへ通ずる大扉

c 事務室へ通ずる扉

1 金庫、2 電話、3 長椅子、4 葉巻を置いた

小卓、5 文机、6 椅子、7 臂掛椅子、8 椅子、

9 小卓子、10 立つて使ふ高机、11 地圖

大きな文机の上に書類、書籍等が一杯のせて在る、  
電話機一ヶ、秘書用小卓一ヶ、英國製革の家具、モダ  
ン型の大金庫、詰め物をした扉、シャन्दリアをつ  
るし、各卓子の上に縁の小ランブーケ宛を置く



## 第一場

支配人ブランダー、秘書ハウゼ

秘書は机に向ひタイプライターを叩いて居る。折々、書類を覗きこむ。——ブランダー、手に一束の手紙と書類を持つて登場。

ブランダー 親父は居ないのかい？

ハウゼ 今、出掛けた所ですよ。

ブランダー 何處へ？



ハウゼ 知りません——言ひ置いて行きませんでしたから。

ブランドー ふうん、何か言つてつた？

ハウゼ 「直ぐ歸るから」ツてだけです。

ブランドー 君は一體、何をしてゐるんだね。

ハウゼ 五通許り手紙を書取らされたので今打直してゐんです。

ブランドー (一通を取上げる)「ハンブルク、ライデマン商會」(注意深く讀終る)成程なあ——親父の狡猾と來たらまさに惡魔的だな。

ハウゼ アルメニア人はだしですね。

ブランドー チエツ——横着至極な奴だ——我々ユダヤ仲間も大いに彼に學ぶべしだ。

ハウゼ 學ぶは恥に非ずですからね。



ブランドー ホ、ウ、ハウゼ君、今日は君、馬鹿に頭が良いぢやないか。

ハウゼ エ、僕にとつちや今日は良い日なんできてね。

ブランドー 君に良い日は僕には悪い日だよ。さうぢやないかね？

ハウゼ まあそんなわけです。(暫くの間)

ブランドー 今日は親父、大分御機嫌と見えるな――

ハウゼ あの――シヤロツク・ホルムスのことですか？

ブランドー 秘書の様子で分るよ――一目で。

ハウゼ さうです、逆も御機嫌でしたよ――なにしろシガレットをきばつたんですからね。

ブランドー 君がシガレットを頂戴したとくりや、大抵の商賣人仲間にはピンとくるね――



ハウゼ それぢやあなたも——？

ブランドー さうともさ、そんな時にやことさら狡るい事を企むからな。

ハウゼ さうかなあ……私には親父さんは偉すぎますね——

ブランドー 私は確かにさうだと思ふ。

ハウゼ 全くはづかしい次第ですが、實の所僕にはあの人がさつぱり分りませんね  
幾千といふ計畫を一時に編出す、そして……

ブランドー さうく——奴さんが仕事を一つづつ、つゝましくかたづけてくれれば、大變助かる男もゐるんだがな。

ハウゼ 種々雑多な事を考へ乍ら、仕事の色々な糸目が相互に結び合へば結び合ふ  
ほど嬉しがつてゐるんですよ。

ブランドー 仕事の糸目を互ひに結び合はす？——花模様よろしく。君は詩人だ。



ハウゼ この譬喩がお解りにならなけりや——一つ説明致しませうか——

ブランドー お願だからそれだけは御免かうむらう——親父に關した事なら、どんな譬喩だつて分つてら。(電話のベル鳴る。)

ハウゼ (電話口で) モシ／＼、此方はセルバンですが——何方? ア、ライナ

ーさんですか——今日は……イ、エ、主人は今出た所ですが……ハイ、ハイ、

どうぞ、もどります、直ぐ歸るからつて判然言ひ置いて行きましたから……御

用件は——何か御傳言でも? ア、さうですか、貴方様が直々に此方へ御出向

きになるといふ事を。ハイ、ハイ——イエ、イエ、忘れは致しません。ハイ、

ハイ、確かに申傳へます。サヨナラ。(自分の机に戻つて、覺書をする)

ブランドー ライナーツて——ちびのライナーかね。

ハウゼ エ、あの人です。



ブランドー 分らんね。親父はなぜあんなつまらない者と仲良くしてるんだらう？

ハウゼ ヘエ、なぜ仲良くしちゃいけないんです？——あの人は逆も友情の厚い人ですよ……

ブランドー 友情の厚い——友情の厚いと——それだけでは充分ぢやない。

ハウゼ 何故ですネ？

ブランドー 否<sup>いや</sup>さ、君も頭が鈍いね。あのライナーといふ男は友情の厚い男だ。よろしい。だが結局あれだけの人間さ——何と言つたら良いか——まあ子供らしい頭の持主だ……丁度、家の親父とはまるで正反對にね。

ハウゼ だからこそ、親父さんにしてもやつて行けるんでせう。「兩極端は一致する」つて事御存知でせう。

ブランドー ヘエ、一致する——格言など拂ひ下げにしてもらひたいね。そんな



ものは脳髓の儉約まで人に信じさせやうと云ふからくりさ

ハウゼ　ホウ、こりや卓見ですね——一つ僕も書留めておかう。

ブランドー　御世辭云つたつて何も出ないよ——

ハウゼ　僕はほんとに眞面目でさう思つてゐるんですよ。

ブランドー　わしもさ。(暫時、間)　處で、どうだね、親父がニューヨークの株式

で大分ばうい金を手に入れたつてのは本當かね。

ハウゼ　儲けた事はたしかですがね、どの位といふ所は存じませんが。

ブランドー　奇妙な頭腦だよ、アメリカの株式取引の變動を算出して、鞘で

アメリカ人を叩きつけるんだからな——

ハウゼ　その活躍ぶりつたら、すばらしいもんですよ。

ブランドー　だが人生を享樂しない所なぞ馬鹿の骨頂だね。

ハウゼ　どういたしまして。お金の山を積むのがあの人の享樂でさ。



たか人生を享樂しない所なぞ馬鹿の骨頂だね。

ハウゼ どういたしまして。お金の山を積むのがあの人の享樂でさ。

ブランドー それが一體何になる？ 千といふ數をこくめに幾つも積上げ、百萬といふ數をいくつも搔集める——然も一生かゝつてね——さて、遂におめでたい死と云ふ奴が訪れてくる——それでおしまひだ……そして何百萬といふ金は依然として金色燦爛たり矣。

ハウゼ 金貨はすぐに新しい持主を見つけますよ。

ブランドー フフ——そこに現れて來るのは碌に知りもしない、たゞ偶然に親戚だと云ふ男だ——そいつが財産をしたい様にしてたのしむ——そいつは結局……だからさ、君、家の大將はおどろくべき頭腦をもつてゐる、まあ天才的な頭腦あたまをもつてゐるかも知れんさ、さうだらうともさ——だが賢明であるとは言へないよ。



ハウゼ　でもあの人は自分が欲しいと思ふものを能く知つてますよ。

ブランドー　欲しいと思ふものを？　一體何が欲しいんだ？　金が欲しい——そし

てもつともつと金がほしい。そして又金さ——世界中を金に出来るんだつたら、やつて見るだらうよ。丁度これと同じ男が、あのムンローだね——

ハウゼ　二千萬長者のムンローですか？

ブランドー　ア、左様。奴さん二千萬圓の財産だつた。その外にまだ——妙な意見を持つてたんだが——これが不運だつたのさ。

ハウゼ　もつとはつきり、ブランドーさん、はつきりおつしやつて下さい。

ブランドー　待てしばし君よだ——詰りムンローといふ男は、財産とは先づ一億以上の場合を云ふものだと頑強に主張してゐたんだ。前にはわしもあの男といふんな事を一緒にやつて居たので、よく奴を知つてゐるがね——



んな事を一緒にやつて居たので、よく奴を知つてゐるがね——

ハウゼ　それで——

ブランドー　ウン——この男の稼ぎ振りといふのがおやぢさんをつくりでね。それにやつぱり逆上性の、途徹もなくやかましい人間だつた。だから自分は稼がなけりやならん、と口癖のやうに言つてたが、本人にとつては御無理御尤もさ。いはゞ、奴は金乞食さ。

ハウゼ　あはれなもんですなあ。

ブランドー　さうさ、パク／＼口を動かして、一億の金を必死になつて追廻して——  
到頭或日、自分の理性をまとめてゆくことができなくなつちまつた——氣狂でも狂暴症と云ふのになつちまつた。

ハウゼ　えゝ？　本當ですか？

ブランドー　本當だとも、流石の奴さんも監禁されちやつてね——今は去る病院に



おいでになるんだが……そこでも相も變らず、一億圓を追廻してござると云ふわけだ……

ハウゼ イヤ、大した大詰ですね……

ブランドー ウン——神經といふ奴はさう玩具にできるもんぢやない。人間はやつぱり人間にすぎないんだからな——一億圓を追ひまはすなんて仕事をすれば頭腦が駄目になつちまふのは當然だ……

ハウゼ さうですとも。それなら何故あなたは親父さんにさうと忠告してやらないんです？

ブランドー ヘー何故つて？——わしだつて食つてかなきやならないからな。

ハウゼ でもあなたは本當にさう信じてるんでせう？

ブランドー だと云つて、自分の地位まで賭ける氣はないからな——それにだ、

あゝいふ人間には忠告なんか効きやしないのだ。あゝいふのを稱して天才と言



ブランドー だと云つて、自分の地位まで賭ける氣はないからな——それにだ、

あゝいふ人間には忠告なんか効きやしないのだ。あゝいふのを稱して天才と言ふ——だが賢明ではない。賢明といふのは、まるで別のものだ。いゝかね、わしは自分を決して非凡な天賦の才ある人間とは思つてない——だがわしは賢明だよ。ほんの僅かな金を持つて居ても、それを享樂する事が出来るんだ——如何なる樂みでも、又氣樂な休息でも、わしは決して拒む事をしないのだ——

ハウゼ エ、エ、——それはさうでせうとも——

ブランドー わしは金の奴隷ぢやない——金こそわしの奴隷で、わしの爲にほしいものは何でも用立てゝくれる——わしはこれといふ不自由なしに暮らして居られやそれで嬉しい——だから現在、わしは幸福なんだ。

ハウゼ それは確かに満足です。

ブランドー さう、たしかにそれでいゝ。所で君も、老いたりと雖もこのブランドー



「が實は非常に賢明な男である事が分つたらう。まあき、給へ——」

ハウセ　えゝ、えゝ、あの、承りませう——

ブランドー　家の大將が何百萬圓もつてゐた所で、ほんの少しの金を握つたわしの方が幸せだと言へるね。わかるかい、南米のダイヤモンド鑛山はわしにとつては魅力はない。濠洲の煙草投資がどうなつたつてわしの知つたことぢやなかつたし、カナダ太平洋鐵道と來た日にはそれこそヒヤリとする位のものだ……わしは一日の自分の事務を終る、後は自由の身だ。奴隷ぢやないぞ——金の奴隷でもなければ、仕事の奴隷でもなく、貪慾不平の奴隷でもないのさ。金だ、仕事だ、貪慾だ、そんなものは意味ないよ。

ハウセ　御説の通り！

ブランドー　一體人間は二切れの腰肉を一度に喰べられるものぢやない。たとへ大

金を懷にしてゐたつてさ。さうぢやないか？——それに疲れたりいら／＼して



ブランドー 一體人間は二切れの腰肉を一度に喰べられるものぢやない。たとへ大

金を懐にしてゐたつてさ。さうぢやないか？——それに疲れたりいら／＼してゐる者には最上の食事も口に合はないもんだよ……

ハウゼ 疲れすぎてゐるからこそ神経質になるんですよ。

ブランドー 素敵、素敵、實に巧い事を言ふね君は。どうだ、ひとつお醫者さんと話し合つたら——だが、わしはそんな理窟なぞ眞平だぜ。

ハウゼ エ、エ、それで結構、ブランドーさん、又機智縦横になり始めましたなア。ですが僕も失禮させて載いて仕事をやつちまひたいんですが……

ブランドー それ見給へ——結局わしが君の邪魔をした事が分つたらう。

ハウゼ お願ひです、ブランドーさん！

ブランドー いゝとも／＼、精々手紙でも電報でも、アフリカなり、印度なり、親父の言ひ付け通りに書いて置くさ。それからお尻の文句はかうするんだ、いゝ



かい。「金よ、金よ、汝善良にして、優雅なる金よ。急げ／＼、セルバン氏の許へ。あはれな彼氏は飢えてゐるのだから」とね。

ハウゼ お上手ですね——併しこの二つの手紙だけは、親父の歸るまでにすましてしまはなきやならないんですから……

ブランドー ア、分つた、分つた、さあさあどし／＼やり給へ——労働は屈辱に非ず……

ハウゼ どうして／＼——労働こそ人間に箔をつけますよ。(書續ける)

ブランドー さう／＼、逆も怪しげな箔をね。(大きな壁掛地圖の前へ行つて、しらべる——ほんの短い間)

セルバン (登場、裏毛皮の外套と帽子を冠る)



## 第二場

前場の人々、セルバン

セルバン (部屋へ這入つて來ると、他の二人がお辭儀する) さて變つた事はないか

ね? 手紙は——?

ハウゼ まだ出來上りませんが……

セルバン おれが一寸でも姿をかくすと鼠奴すぐにおどり出しやがる。氣をつけろ

……

ハウゼ 何とも相済みません……

セルバン事務所



セルバン そんな事は言はずに、仕事の方をどし／＼やれ。物事は萬事きちんと片付けてゐるのに越した事はない。さうすれば、別に相すみませんなど、言はなくてもすむんだ。

ブランドー 實に御尤もで！

セルバン おや、お前さんはわしの言葉に合槌を打つためにやつて來たんだね。

ブランドー 相すみませんが……

セルバン 相すみませんはやめてくれ給へ。必要な事だけ言へば澤山だ。(上衣を取らうとする)

ハウゼ (それに手を貸さうとする)

セルバン 要らん——有難う——こんなケチな親切はわしは好かん——今度から止めにしてくれ給へ。何かあつたかね。(自分の机の前に腰を下ろす)



めにしてくれ給へ。何かあつたかね。(自分の机の前に腰を下ろす)

ハウゼ はい、何も御座いません。

セルバン 電話もかゝらなかつたか!

ハウゼ アツ、さうく、ライナーさんから。

セルバン それ、わしが聞かなきや忘れてしまふ所だつたね。一體今まで何して居たんだ。君を他の掛りへ換へつちまふぜ。こんな秘書なんか、何の役にも立たん。横着者! ぢや一つライナー君の用件といふのをきかして貰ひたいな——何を愚圖々々してる。

ハウゼ ライナーさん御自身此方へ御いでになるさうです。

セルバン よく云つておいただらう——覺えられない事だつたら書止めておけつて

——勿論實行しては居まい——何を云つても馬の耳に念佛だ!

ハウゼ 書いておきました——どうぞ——



セルバン さうか——それでも忘れてたんだね。まあ君は明日から他の事務に廻つてくれ。誰か代りを探すから。もう行つてよろしい——残りの半紙二通は片付けちやつてくれ。

ハウセ ハイ。(退場)

セルバン 何といふ奴だらう。處で何の用です。ブランドー君さつさと願ひたいな。  
ブランドー 今日の郵便です。

ブランドー ア、さう。(手紙に目を通す、一通を側へ放り出す)こいつの返事はまだ早いと——放つておけ、ズタバタするがい、……(他の一通を読み乍ら)これア絞るくやる必要があるぞ——ぢやもう五百マルク儲けなけりやならん。勿論君はこんな事には氣を使ふまいがね。(第三番目の手紙を見る)なんだつて?あの森を買ふ氣がないと君は書いてるね、一體何故だね? 何?



ブランドー 材木を運び出すのは到底不可能です。今まで扱った中で一番高値につく材木の様に存じます。

セルバン そうかね？ 不可能だつて？ ウン、君は材木運搬の必要なしと君の友達のはジュシカに言つてやつたらいいぢやないか。そうすれば今度は森の方がずつと高値になると言ふものだ。だが奴が一件を七千マルク程安く手放すんだつたら、君の言ふ不可能な賣買契約をだ、君はわしにすゝめて結ばせる事がヒヨツとしたらできるんぢやないかな。この手紙を君が巧く書きさへすれば、この件でもう五百マルク許り儲かるんだよ。

ブランドー エ、ですが、木材の方をどうなさる御積りですか？ どうやつて丸木を持下ろしますか？

セルバン 僕に委せておき給へ。



ブランドー すみません、輕卒な事をしたくないと思つたものですから。

セルバン それは御苦勞さん……コーヒーの方はどうだ？

ブランドー 包みが微臭いんです。

セルバン 明日荷揚げさせてくれ給へ。さもないと、餘計臭くなつちまふから。今ならすつといゝ値にうれるだらう。お客さん方は何にも知つちや居まいて。

ブランドー 分りかねますが……

セルバン イヤ、高價な品を市場へ並べておけば、こんなエキストラでも結構賣れて行かうと云ふものさ——お次は。

ブランドー あの馬鹿者が又もや期日を延ばしてくれつて言つて來ました——もう五度目ですよ。餘り人を喰つた遣方ぢやありませんか。

セルバン オイ、ブランドー君、さうむごくするものぢやないよ。奴が見込



があるといふんだつたら、時間とチャンス位、くれてやつたつてかまはないぢやないか。

ブランドー エ、ですが、もう五度目の事ですし――

セルバン だから四度まで奴は失敗つたのさ。多分五度目、或は六度目には巧く行くだらうよ。人を絞め殺しちやいけない。共存共榮だ。

ブランドー 萬事それでございませう。

セルバン それで、よろしよろし――手紙は出来るだけ早く署名出来る様に願ひたいな。

ブランドー (御辭儀して退場)



## 第三場

### セルバン 獨り

セルバン (内線電話をかける) モシ、モシ——ヴェニングル君——決算報告は何處にある? ——「すみません——すみません!」誰彼もが仕事をキチンとさへすれば、この永久の「すみません」をきかないでもすむんだ——所でいくつだつて、あゝ——エ、? 七二八六九——七二〇〇〇——もし判然喋舌はつきりつてくれないかな——そんな鼻聲でなく——すまんがね、エ? 決算報告を約束通り持たしてよこしてくれといたら、そんな事をせずとすむに。残高現金? 一四



六二二、五〇……イヤ、置いて、良いよ……銀行へ持つてゆかなくともい、——（大型電話のベル鳴る）何だ？ 全くひまがないな。（受話機をかけて、大型電話機を手近かに引寄せる）モシ——セルバンです、そちらは？  
ハイ、私がセルバンです——何某？<sup>どなた</sup> アッ何んだ——お前か、そらキツスをおくるよ——お前の聲がわからないなんて今日はどうかしてるよ——風邪？ 氣をつけなければいけない……で、それから……どうするかね？ エ、？ ア、君の良人がくる——もう出掛けたのだね？ さう？ 勿論さ！ わしの同意しない事を泣きつくつて手はないな……わしはあの男を喜ばす爲にするんぢやない。みんなお前のためにさ、お前の爲だからこそさ。イヤ、イヤ、イヤ——なにそんなにクヨクヨすることはないさ——取るに足らんことだ——勇敢な若者さ——だがまだ一人前ぢやない。逆もあの男はセンシブルだよ——だから奴



に冗談を言つても些つとも面白かあないのさ……向ふもそれを知つてゐるのさ、

——だからわしも時偶嫌な顔もして見せるんだが——これも彼奴に惡意があつての事ぢやないんだ——わしとしても奴がいつか他人の手を借りずに仕事をやるやうにならなけりや不可んと思つてゐるのさ——ほんの子供だね——全くさ

——鬚のある子供だよ……アツ、コリヤ、彼奴の事を餘り惡く言つちまつたが、まあ、氣を惡くするんぢやないよ——吠える丈けで噛みつきやしないから——

何時會へるかしら？ 君達は今日オペラへ行くつて？ ヨーシ、わしも屹度行くよ。ア、で晩飯は——？ 所がね——わしは今日迎も素晴らしい機嫌なのさ

——エ、？（大聲で笑ひ乍ら）さうく、その通り——今も皆にどなりちらした所さ——ア、君は——それに連中はひどくまじめにとつてさ——全く笑止千萬だよ。ヂヤア、テオドルにわしには出來んと言つておくよ。わしはしない



とね。すると奴さん、すごすごと家にかへつて御機嫌がわるい。それから腹をたて、怒鳴りちらすとね……さうしたら言つてやり給へ、わしからも電話がかゝつてきて萬事承知だつて——わしが電話をかけた時、丁度あんたが居合はして、わしがあんたに「萬事承知した。テオドルは安心してよい。」と云つたとね。萬事承知——萬事——分つたね。さあキスをするよ——わしのフラッツよ。

（電話の中へキスをする、大聲で笑ふ）アバヨ。（受話機をおく——短い間）



## 第四場

ハウゼ、セルバン、召使、ライナー、

ハウゼ（手紙を持つて来る）御手紙でございます。

セルバン（急にまじめになつて）さうか——（急いで手紙を受取り目を通す）オイ何だい、又こんな字を書いて——？

ハウゼ アツ、存じませんでした。手先きが少しふるへましたもので……

セルバン なぜなんだい一體……こりやラブレターぢやないぜ。商用文なんだ。ナンバー三のタイプライターはどうしたんだ——いつになつたら直るんだね——



だらしないな——もういゝよ。さよなら。

ハウゼ（お辭儀して行く——セルバン署名する——扉を叩く音）

セルバン　ハイ。

召使　ライナーさんが御いんです。

セルバン　御通ししてくれ。

召使（退場）

ライナー（登場、上衣を着、帽子をかぶつてゐる）今晚は。

セルバン（立上つて出迎へる）イヨウ今晚は。（相手に手を貸して上衣を脱がす）

ライナー　ア、いゝんだよ——放つといてくれ給へ。

セルバン　マアくかけたまへ。大分暫らくだつたな。

ライナー　アア——何しろ暇がなくつてね……それに邪魔するのも何だと思つたん



で。

セルバン 何を詰らんことを云ふんだ。邪魔をするといけないなんて。まあ煙草でもやれよ——サア——（シガーを差出す）

ライナー 有難う——

セルバン （マツチをすつてやる、自分も一つ取つて吸ふ、兩人腰をかける）

ライナー （一服してから）有難う——

セルバン サア、これでユツトリした気分になると云ふものだ。でどうだね、近頃は？

ライナー 有難う——まあまあ、どうにかかうにか。

セルバン 何か變つた事でもあるかい。

ライナー まあなささうだね……



セルバン（ほゝえみ乍ら）何を言つてるんだ、君だつてほんとのところ一寸遊びにやつて來たとおれに思はせたかアないんだらう？

ライナー（一寸困つて）さう言やア——さうだが……

セルバン イヤ——君がわしの所へ來た以上、何か理由があるよ。

ライナー 君は僕の唯一の友だ——

セルバン その唯一の友を用がなけりやたづねてくれないんだから——

ライナー ウン、だが何と切りだしたら良いかなあ……

セルバン 何を云つてるんだ——何か厄介な事があることは僕にもわかつとるよ。

さア言つて見ろよ。

ライナー 察してくれたまへ、言ひにくいんだよ……

セルバン オイ、そんな言ひ方をするなよ、テオドル！



ライナー　デヤ、言ふよ、僕は今困つてゐるんだ。

セルバン　ブラボオ、それでこそ立派な言葉だ。君が今こまつてるとは、おれもとうからさう思つてたよ。

ライナー　笑ふなよ——まじめな話なんだ。

セルバン　まじめな事だからこそ腹一ぱい笑へるんだ。

ライナー　僕も失脚したといへば、君だつて餘りいゝ氣持もしまいが。

セルバン　何？　どうしたつて？

ライナー　（鈍く）駄目になつちやつたんだ。（短い間）

セルバン　フム、フム、フム、で——一體何だつてそんな事を仕出來したんだね？

ライナー　僕は南方の鑛山株の買収に大分身を入れてゐたんだが……

セルバン　さうか——おれは君に言つておいただらう——あれに手を出しちやい



けないつて。

ライナー あの株にや長い間手を焼いてね――

セルバン 冗談ぢやないよ。あれに手をやいたつて。僕は君に一切合財詳しく説明してハツキリ言つておいたぢやないか――あれは手をふれずに放つておけつて。で一體、だれの爲にそんな目に會つたんだ。

ライナー 代理人さ――

セルバン ひでエ奴だ。ヂャ君はどうしようつてんだい？

ライナー ア、――それなんだがね――分らないんだよ。

セルバン 所でおれはどうしたもんかね？（間）さてそこでおれはどうすればいい、と言ふんだね？

ライナー いやだ、いやだ！僕にはほんとに分らん……（短い間）



セルバン　どの位たらないんだ。

ライナー　十三萬マルク。(短い間)

セルバン　いくら？

ライナー　十三萬マルク。

セルバン　餘りばかげてるなア——それで明日、満期かね？

ライナー　明日の正午十二時さ。

セルバン　で君の持金は？

ライナー　三萬マルク。

セルバン　恐れ入つた人だな——君は……だがまあいゝや——で——そしてこの事件をどうしようと言ふんだね？

ライナー　ウン——分らないのさ——



セルバン　ホホウ、こりや至極結構だ——僕には分らないつてね……馬鹿げてゐるよ。なんでこんな事をしたんだい。

ライナー　僕は追ひこまれちやつたんだ。みんなはさう言つてるよ——

セルバン　さうかなア——君は奴等におひこまれたんだな？——デヤア今度は奴等には君をそこからひき戻す義務がある譯だ。(極めて短い間)

ライナー　(かすかに)僕を苦めてくれるな。

セルバン　おれは君に言つといた筈だ。一切合財細かに説明しておいたんだ——細かに。そ奴は詐欺だ。立派な山師だ。あんな所に石炭なぞ出つことはないんだ。

二三の手合ひがやつぱりそいつで手をやいた事があるんだが——今ぢや慘めなもんさ。鑛脈は枯れてるんだし。おれは自分の喋舌つてる事をよく知つてるよ  
インチキ奴等め！(短い間)



ライナー 僕は駄目だ。(問)

セルバン それとも示談?

ライナー いかん。僕は駄目だ。

セルバン やつて見たのか?

ライナー ウン、だが――

セルバン 君に示談なんぞ出来て堪るもんか。自分で自分を破滅につきおとしてゐるんだ。(短い間)

ライナー 萬事休す。

セルバン あの山師共とかけ合ひなぞしなけりやよかつたになあ。彼等をおれの所へよこしてくれたら良かつたつんだ。おれが奴等を相手にすつかり解決しちまつたんだが。



ライナー　ア、僕は知らなかつたんだ——何てこつた——

セルバン　人間て奴は、始めてびつくりした時にや、友達のところへ出かけて行くが、敵の所へは行かないもんだ。(間)所で差當り、どうする積りなんだい。

ライナー　自分でも分らないんだ。

セルバン　現金を三萬マルク持つてゐるんだつたね。

ライナー　ウン。

セルバン　で、そいつは君の自由になる金か。

ライナー　ウン。

セルバン　未拂の所はないんだな？

ライナー　銀行に預けてあるんだ。すぐにでも引きだせるよ。

セルバン　ちや、明日の午前中にその金を引出して氣樂に旅行でもするさ。



ライナー そりやいかん。

セルバン 何故いかん？

ライナー 何故つて僕は紳商だ！

セルバン よくよくだなあ——馬鹿もいい加減にしろよ。ごろつき相手に紳商だなんて言つてた日にやお終ひだぜ。

ライナー 相手の事ぢやない。僕自身のためさ。

セルバン 良くも言つたり。その調子で十萬マルク拂ふんだね。

ライナー もう駄目なんだよ。

セルバン さうさうその「もう駄目なんだよ」がたまらなくいゝね。——君は自分で自分を締木にかける様にしちまつたんだ。だから今、頭を働かして、頑強にふんばつて、自力でその締木からぬけ出すんだね。（短い間）



ライナー どうしたら切抜けられるかわからないんだ。

セルバン アハ、、、一番簡単な解決を言へば、おれがこゝで君に十萬マルク投  
げ出す事だらうさ。十萬マルクを君の手にのせて人のよささうにニツコリして、  
「又、近い中にお目にかゝるよ、又もや君がこんな馬かげた事をでかしたらね。  
つてね。エ、どうだい？」

ライナー 僕は君に無心なぞしてはゐらないよ。

セルバン 成程、だがそれにも係らず、その用件でおれの所へ來たんぢやないか  
——君の胸ん中をわつて見りやアね。さうして貰ひたくつて堪らないんだ。

ライナー もう何にもほしくないよ。

セルバン だが人生は戦だぜ、君。いゝかい、戦ふんだ。十遍叩きのめされたら、  
十遍立上つてやりなほす。さうしてこそ、始めて人生に價值が生ずると云ふも



んだ。

ライナー 人間することなすこと、うまく行かないと、死にたくもなるよ。

セルバン 死ぬのは容易い事さ——だが生きて行くのは少々計り難しいな。(間)

ライナー ウン、それぢや……僕は……(立上る)

セルバン おれとしたつて十萬マルクの金を君に用立てたいのは山々だが、今の所ではそんな大金は、おれにもオイそれと自由にならないんでね。(間)

ライナー うん、うん——これも僕の悪いめぐり合はせだ。(間) だけど——ねえ、

ゲオルク、もし君が僕の保證をしてくれるんだつたら……

セルバン おれにはおれの忠告を無にしたり、おれの手引きと反對の事をする人を保證する義務があるといふのかい——？——君はまさか本氣で言つてゐるんぢや

あるまいね……(間)



ライナー（低く） 怒るな、ゲオルク、僕がこの件で君をわづらはしたからつて……  
セルバン 君には氣を悪くしてる。と言ふのはだ、君が僕を信用しないで他所のペ  
テン師などにひつか、つたからだ。

ライナー 怒るな、ゲオルク、僕はもう二度と君に迷惑はかけない積りだ……

セルバン その哀れつばい調子はやめてくれ。おれはさういふ變り方が大嫌ひなん  
だ。全く無用な言葉だよ。（短い間）

ライナー 御機嫌よう。

セルバン これから何處へ行くね？

ライナー 事務所へ。

セルバン 妻君は君の憐れな状態を知つてゐるのかね？

ライナー（しみじみと）可哀想なクラリツセ——！實の所、何にも言つてないんだ。



僕のなみなみならぬ様子には氣づいてるが、そして君の所へ來た事は知つてゐんだ……だが僕が破産した事は言つてないんだよ。

セルバン ソリヤ利口なやり方だ。こんな事は女の知つた事ぢやないからな。ヂヤア、元氣を出して——きつとおれにも何か考へつくだらう——何か君を助ける良い方法が。人間は希望を捨てちやアいけないんだ……最後のどたん場まで！氣樂にして家へ歸り給へ——多分今日の中にも君を尋ねるかも知れない。何うしたんだい。——なんだつてそんなにおれの顔ばつかり見詰めてるんだい？

(短い間)

ライナー 有難う、ゲオルク、親切だね君は。僕はいつも心の中では、君に手を合はせてゐるんだ。僕のこの氣持を忘れないで居てくれ給へ。

セルバン (相手に外套を着せてやり乍ら) オイ——そりや何の事だい？ 何だつて



君はそんなに感動してゐるんだね……

ライナー（セルバンを抱いて接吻する）僕は何時も君を愛して居たんだよ。

セルバン　へー、こりや驚いた、どうしたと云ふんだ！　まるで恐ろしく遠い所へでも行つてしまふ時の様ぢやないか——？

ライナー　ウン、ウン、僕は長い旅に出ようと思つてゐるよ——

セルバン　おれは……駄目だなア！　だが君はそれでも正氣なのかね？——旅行といふのは一體何處へ？——言つても良いものならきかしてくれ給へ。

ライナー　まだ分つてないんだ——とにかく遠くだ——ウンと遠い所だよ。

セルバン　さうか——ぢや是非とも今晚中に逢つて——色々相談しておかなければならんね。ヂャアかうしたら一番よからう——今はともかく家へ歸つて晩は妻君と一緒に何處か人目につく所に居るのさ——たとへばオペラの様な——ど



うだい、君の現在の立場にあり乍ら——逃げもかくれもせぬ——どうだ分つたかね？　ヂャア、オペラへ行き給へ——おれも後から出かけて行く。エ、？　元氣を出して、まだ脈はあるんだぜ。

ライナー　左様なら、ゲオルク。

セルバン　サヨーナラ、失敬——今夜はオペラだ——たゞ勇ましく邁進する事さ。(ライナーについて部屋を出る。戻つてきて電話へ急ぐ) モシ——エ、二二——〇七、エ、〇七——ア、——有難う、——ア、モシ——セルバンですが——クラリツセかい？　それ——、今言はうと思つてたのさ——彼、たつた今歸つた所だ、用件かい？　何アに、ほんの詰らぬ親切氣でね、言ふ程の事ないよ——さういつてるぢやないか。特別な事ぢやないつて。ともかく大した事ぢやないよ。何だつて？　眞剣な顔付きで僕の所へ出かけたからつて？　ア、



そりや奴のいつもの癖さ。ヂャア、マア、言ふがね——奴がまたもや、一寸した馬鹿げた事を仕出来かしたんでね、少しからかつてやつたんだよ——ア、それさ。あの當時も随分忠告してやつたんだが——奴さん言ふ事をきかなかつたのさ——で又もや金が要るつていふ譯よ。ウ、ン、違ふよ、ほんの僅かさ、ウ、ン、たゞ奴さん目下手許にもつてないだけの事さ——金額は——で言つてやつたよ。僕の所にもないつて——で、いゝかね。(語を強めて) 奴さんが歸つたらすぐに言つておいてくれ給へ、僕が電話をかけて、もし今夜これッきりで逢へない場合には、明日の朝、十一時に僕の事務所へ來てくれつて言つてたと。さうすりや金をわたすからつて——萬事引受けた! ア、屹度だよ、今夜はオベラだよ——ヂャア、サヨナラ——アバヨ!(受話機をかけて、小さい電話機を鳴らす) ヴェニンデル君、一寸書止めてくれ給へ、明日の朝、正十時に十萬



マルクを現金で事務所の僕の所へ届けさせてくれ給へ、分つたかね？ エ、？  
忘れないでね。アハ、餘りたよりにならん連中だからね。(受話機をおく。暫くして伸びをする。作り笑ひをして、窓際へ行つて通りを見乍ら、口笛を吹いて居る)

(すると音もなく扉<sup>とびら</sup>があいて、年の頃も解せないヒヨロ長い、青い顔をした長い黒髪の男が、手にシルクハットをもち腕に長い黒のオーバーをかゝへて、忍び込む。身體にキツチリと合つに奇抜なフロツクを着、メリヤスのズボンを穿いて居る。これがドクトル・ダニエーリと云はれる人間である。後の扉をしめて、室内をキヨロ／＼見廻して窓際のセルバンを見つける。机の方へソツと歩みよつて帽子をおく。外套を開いて、大きな凭椅子の中に蹲る。細い青白い手から手袋を抜取つて、帽子の中へ投げ込む。それから頭を前に下げて、顎を兩手に支



へて、鋭く、つき徹す様に、セルバンを見詰める。セルバンは二三秒の後、相手の氣配を感じてふりかへる。そして相手を發見する。）

## 第五場

セルバン、ダニエーリ

セルバン（ハツと驚いて）ホウ、一體何御用です？ あなたは？

ダニエーリ（さも親し氣に）まあ席につきたまへ——まあ。（机の傍の椅子を指す）  
我輩はドクトル・ダニエーリだ。

セルバン 存じませんな。何御用です？

セルルン事務所



ダニエーリ それは今に納得がゆくであらうが、我輩は下を通り乍ら、あんたが窓際に居るのを見て上つて來たと言ふわけです。

セルバン そりや何の爲にです？

ダニエーリ そこでぢや——あんたを一目見たいと思ひましてな。

セルバン 馬鹿／＼しい。お前さんはわしの事務所へコツソリ這入つて來て、わしの掛ける所に腰を下ろして——

ダニエーリ それではあんたは憤慨してゐるのか。自分の慣性にそんなにこだわつたり、形式にへばりついてゐたりするんですかな。

セルバン お前さんのあはれな機智の閃きで私と話さうと思つてやつてきたんですね。

ダニエーリ エ、その爲にです——あんたは、だがそんなに神経質になつちやい



けません——全く。

セルバン お前さんは一體全體何者なんだ？

ダニエーリ エ、まあ、お掛けなさいよ。私達はすぐに理解し合ふ事ができようと思ふ。

（相手を鋭く見つめて傍の椅子を指す、セルバンかける）

セルバン ダニエーリ博士？ どうもさういふお名前は想出せませんね。

ダニエーリ そりや、蓋し御尤でせうよ。

セルバン 一體何の博士なんです？

ダニエーリ 我輩は心靈學博士です。

セルバン は、ん、そりや一體何ういふもんです？

ダニエーリ エヘン——簡単に説明するのは困難ですなア。我輩一人の特殊な學問



でしてな——所で我輩はあんたの魂に甚だ興味を持つてゐるので、あんたを實は探してたと言ふわけです。

セルバン（哄笑）わしの魂がお前さんに何の關係があるんです。

ダニエーリ　我輩にとつては、どの人間の魂にも何等かの關係がある。こりやあな  
た、實の所打明けて言ひますが、我輩は萬人の魂を監督しとるです。

セルバン　變つた御商賣ですなア。

ダニエーリ　處が素晴らしい學問ですよ——とにかく古今獨歩の——勿論一般大衆  
には全然知られて居らんですがね。

セルバン　どうして／＼、わし等はよく知つてますとも。尤も違つた名前だが、そ  
の方がその價值や特徴を比較的よく表はして居ますよ。

ダニエーリ　他の名前？　我輩は知らんな。



セルバン これは——お前さんの様な大學者がまだ御聞きになつた事もないんですつて？……なあにさ。魔術ツて奴ですよ。

ダニエーリ なんと——なんと——君はからかつてゐますな。

セルバン どう致しまして——わしもお前さんの學問をやつてますよ。

ダニエーリ 君など何も知つちやゐない。

セルバン だが知りたいんですよ——實の所、憧れてゐんです。

ダニエーリ ではこの話もあんたの興味もひきおこすし、あんたをほゝえましくする事になつてきましたな——これが後になると、眞理になり、且つ怖ろしい程、まじめなものになるんです……

セルバン さうですかなア——で、その眞理といふのは一體どこから？  
ダニエーリ 良心の法則です。



セルバン イヤ、結構——一つその一節を碎いて説明して載けませんかア。

ダニエーリ 大して重大なものぢやないです。丁度あんたの皮肉がくだらないのと

同様ですな——たゞ一つ主眼があります——

セルバン でそれは？

ダニエーリ あんたに對する我輩の報告ですが、法廷はその本務を執行する事です

——魂の法廷がね。

セルバン（呆れて、一寸相手を見詰める）ハア、そりやアいゝ、どうも有難う。

だが忘れちア困りますよ、わしはねつかから商人だし、實際の事しか分らないし、お前さんの形而上學に對する興味は、生憎餘分に持ち合はしませんでね。

ダニエーリ 大いに御尤も。よく分つてますよ。あんたは企業家のゲオルク・セルバンです。天才的な商賣人、自ら商業史上に一章を劃する人です。



セルバン 馬鹿に口が巧いなア、ぢやアお前さんはそんなにわしを知つてゐるんだから、今日の御訪問の本當の目的を打明けてくれませんか。

ダニエーリ さう急ぐ必要はなささうですな。

セルバン 何かわしにいゝ話でも持つて來てくれたんですか？（愉快げに）魂でも買はせようつてんですか。

ダニエーリ 魂を買ふのは今までもやつてゐるではないですか。

セルバン そんな事はない、絶對に！

ダニエーリ ある、絶對に。君は君の使用人と、その思考の種類及勞働を買込んだ——自分と商業上の關係を結んだ人間を君は買ひ入れてゐる。その連中の魂を通じて君は儲けもする。又君の中にある大エネルギイで幾多の弱い魂共を征服したりしてゐるのです。



セルバン 逆もそりやア氣持のいゝ、びりつとしたもんですよ——で、それがどうしたと云ふのですか。

ダニエーリ 我輩はあんたの魂を相手にしたいのだ。

セルバン さうですかい——？　ぢや、お前さんは今さつき、わしの商人的資格を素晴らしく賞めちぎつたんだから——かう言つても別に驚きはすまいが、一體こんな事がわしの役に立つ事があるかしらね？

ダニエーリ 確かに一つの利得がある。それは今迄よりは、ずつと自分を知る様になると言ふ事だ。

セルバン は、ん、こりや確かに少々面白さうだ。

ダニエーリ それは結構。所で——在來の君の行爲や仕事から觀察すると、君は苦悶に苦悶を重ねた良心をもつてゐる事がわかる。



セルバン ヘエ、どういふ意味です。そりヤア——？

ダニエーリ 怒つてはいけない。我輩は君が善良な人間であることはよく分つてゐる。屢々驚くべく寛大でもあつたし、自分の趣味に反する者を喜んで救けたりした事もある——而り、我輩はすべてそれらを知悉してゐる。

セルバン 御親切な御言葉で感謝に堪へんです。

ダニエーリ だが、營利勘定を以て利慾心にかくれて善行をした事もよくあつた——どうぢや——さうではないかな？

セルバン オヤツ——デヤあんたはもう——？

ダニエーリ チヤンと知つてゐるとも。君が惡企みをもつた人間を恩人とする様な地位や機會はよく起きてくるものだ。

セルバン デヤア、先生、あんたはこのわしが心からの感謝といふものに確信をも



つてゐるとは思つてゐなさらなかつたんですか。

ダニエーリ 君は確かに信じてをらない。君は他人に感謝を強ひてゐる。

セルバン そいつは素晴らしい性格描寫だ。

ダニエーリ そうだ。それが又、君の性格の強い所だ。後になつて、役立てよう爲に君は他人と良く交際する。何かする毎に、君は相應のものを儲けてゐる。

セルバン えゝ、——善行には報酬が伴ふのは良いこつちやないですか——

ダニエーリ 言葉は頗だ美しい——だが横道へ外れるのは止めにしよう。とにかく君の利得といふのは、常に金と限つた譯ぢやないよ——

セルバン ぢや一體——

ダニエーリ 君は時々、恩義のある人達相手に慘酷な賭博をしたり、無慈悲な惡戯をしたりする。



セルバン さうか——すると、詰り、わしはハッキリ云へば、ふとゞきな奴！ツてに  
なるな。

ダエーリ 然り。

セルバン さう——感謝しますよ。(短い間)だが、呼ばれもせぬお前さんが、わし  
の所へ来て、奇妙な眞理でわしをいづくり廻すてのは、少々滑稽に思ひません  
かい。

ダニエーリ イ、ヤ——決してそんなことはない。どの人間の生活に於ても——或  
は含蓄のある個性と言はうか——さう言つた人の生涯には、誰か全く意味のな  
い人間、つまりなんでもない人間がその人の前に現れて、かうした思想を言葉  
に表現する機會がある。だが當の御本人はどんな事があつても決して白狀しや  
うとはしないのだ。



セルバン はゝん——では、お前さんは今——

ダニエーリ 勿論。わしは今、君を裁く頑固な裁判官さ——君の良心だ。

セルバン わしの良心は、そんな格好をしてるんかなア——コリヤ滑稽千萬だ。

ダニエーリ あんた自身、御承認下すつて甚だ有難い。思ふに（相手を凝視する）

今日の中にも一つ、あんたは面白い事に逢ひますぞ——ひどく面白い事に。

セルバン 脅迫するんですか？

ダニエーリ イヤ、——とんでもない——

セルバン まあ、つまらんことに氣をつかはない様に御注意申上げませう——

ダニエーリ ア、分つてるとも。だが決して驚く君ではない。

セルバン 實際、驚くつて才能を持ち合せないのでね。

ダニエーリ 君の様に、物に動じない人が、これで度々ビツクリする事があるので



すぞ——さうした結果は良くない。——

セルバン（輕蔑した様に）さうですかア——？

ダニエーリ 迎も信じられぬ程氣の強い人間が、驚愕する時がよくあるもんです。

——その驚愕は頗だ悲慘な結果をひきおこす。

セルバン ハ、ア、わしはこんなお伽噺をよく覺えてる。ある若者がふるへる事を學ぶために家を出たといふのを——

ダニエーリ さう云へば勇猛心を一時になくした人々のお伽噺を我輩は知つてゐる。

セルバン オヤ、迎も巧い事を云ひますねエ。

ダニエーリ すると？ 我輩が氣に入りましたかな？ そりや結構です。我輩をお忘れないやうに希望します。



セルバン お前さんを忘れちまふのは一寸難しいでせうよ。それにも一度御逢ひしたいもんですなア。

ダニエーリ 勿論、我輩が裁判官の席に座つた時、君はその前に立たねばなるまいセルセル 何時頃、御迎へに來て戴けるんでせう？

ダニエーリ 適當の時に。

セルバン でも一體おほよそ何時頃なのか教へて戴けませんかなア？

ダニエーリ 期限が切れたら、我々は君の件を扱ふために開延する。そこで君の生活の繪卷物をくり擴げて、一つ一つの行爲を判定して、良心の法則に従つて正當な判決を下す。この法網は何人たりとも潜る事の出來ぬものだ。人間の造つた法律よりも完全にできてをるし、もつと高尚な所に源泉があるのだ。宣告に對して控訴は許されない。情狀酌量などと云ふ事もない——秤は正確でなけれ



ばならんし、罪障は贖罪によつて消滅させられねばならぬ。

セルバン 色々、説明して下さつて有難う。ア、——それから何だつたつけ——お前さんは誰にでもかう親切なんでせうか。それとも特にわしを御最屑にわざ／＼御いで下さつて説明して戴けた譯なんでせうか？

ダニエリ 前にも言つた様に、我輩は全ての魂を支配してゐるです。我輩には皆が皆平等です。一つの例外もない——どれもこれも人間ですからな。我輩は良心の法則によつて、正確に嚴格に裁判を行ふのです。

セルバン も一つ御き、したいですが、それだけの事をなすつて、あんたはどんな報給、どんな謝禮をもらふのですか。

ダニエリ（おちついて笑ひ乍ら）我輩は追跡されてゐるのです。  
セルバン 追跡ですつて？



ダニエーリ 一步々々。

セルバン そりやア、面白い事ぢやない……

ダニエーリ 馴れてしまふので……

召使（とび込んでくる）

## 第六場

召使、セルバン、ダニエーリ

召使（セルバンの側へ行き、小聲で）御免下さいまし、旦那様——  
セルバン 何の用だ？



召使 どなたか御いになつて、すぐにもお部屋へ入れてくれと仰言つて居りま

すが――

セルバン 今は暇がなくて駄目だ。來客中だよ！

召使 あのう、何で御座いますか、旦那様――刑事なんです――

ダニエーリ ア、――分つてゐる――そりやア我輩のことだ。(とび上つて帽子と外套を取つて小さい扉の方へ急ぐ)

セルバン まつた――まつた――そつちは駄目、狭い廊下で突當りだ。わしの住宅だから……

探偵(扉の所へ現はれる)



## 第七場

探偵、セルバン、ダニエーリ

探偵 御免……

セルバン えッ、何御用です？

探偵 恐縮ですが、セルバンさん……ここに居る、この人は精神病院から逃げだして來たんです。こちらへ伺つたのを見た者がゐたもんですから……

セルバン（笑ひ乍ら）さうですか——？ ダニエーリ博士？ 大學者？ 良心法廷の裁判長？



探偵（ダニエーリに）さあ行きませう、博士……

ダニエーリ（セルバンに）我輩は行かなけりやなりません——又何れ際會致すでしょう。

セルバン（笑ひ乍ら）きつとですよ、お前さんの法廷でね。

ダニエーリ（立去り乍ら）さうだ、法廷で。

探偵（ダニエーリを連れて行く）

召使（共に退場）

セルバン（ダニエーリに向つて後ろから呼びかける）デヤア、サヨナラ！（扉を閉めて窓際に立つて外を見る。まるでダニエーリが後ろに來たのを感じた時の様に突然ふりむく。それから片手で額を撫でブツブツ獨言を云ふ）馬鹿々々しい！（机の前へ行つて腰を下ろす）



## 第八場

ブランダー、セルバン

ブランダー（夕刊數枚を手にして來る）夕刊を御讀みでした？　セルバン様？

セルバン、まだだよ。

ブランダー　大分面白い事がありますよ。

セルバン　一體何だ。

ブランダー　狂人が又逃げ出したさうです——狂人病院にも愉快なことがあるもんですなあ……

セルバン　一體そんなことを何故心配するんだね？



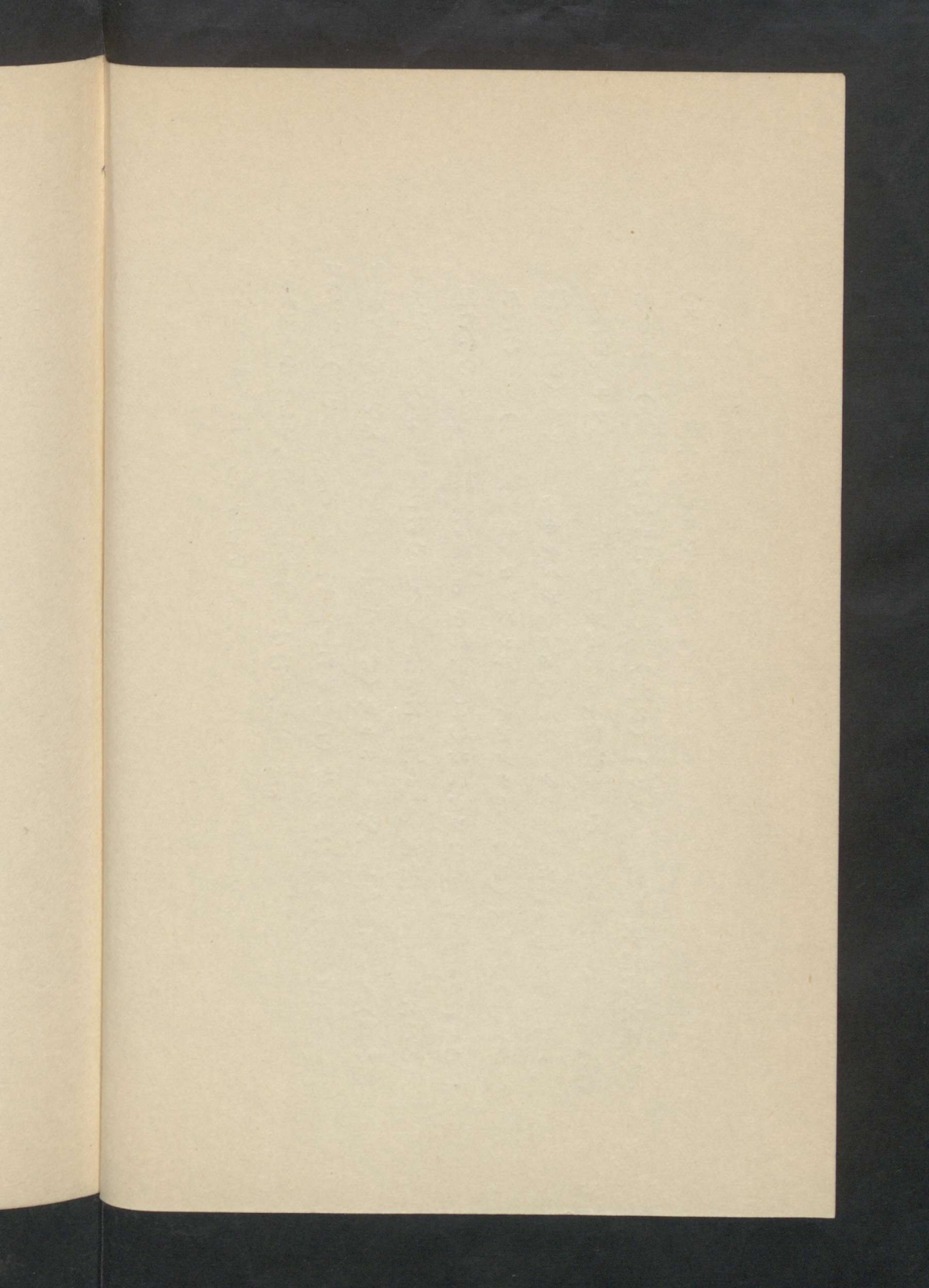
ブランドー でも面白いぢやないですか。

セルバン それよか、相場表でも讀んでた方がましだ。

ブランドー（氣を悪くして、新聞を机上において）お休みなさい。（退場）

セルバン お休み。（新聞をとり上げて讀む）ダニエーリか、ふびんになア。（讀み續ける）さうだ、馬鹿になつてるのも飽きたんだらう。だからその反對になつて見たいのさ……可哀想な奴だ。それで、このおれをゾツとさせ様としたかつたんだな……（電話機鳴る。セルバン身體をピクツとさせる）何だらう？（受話機を取る）モシ、セルバンです。なんだ、クラリツセぢやないか。ア、何だね。エツ?! ——ライナーがピストル自殺!? そんな馬鹿なツ! すぐに行くよ!（受話機をおいて、扉の方へ走る）ハンス……自動車だ、大至急!（ステッキと帽子とをとつて馳去る）



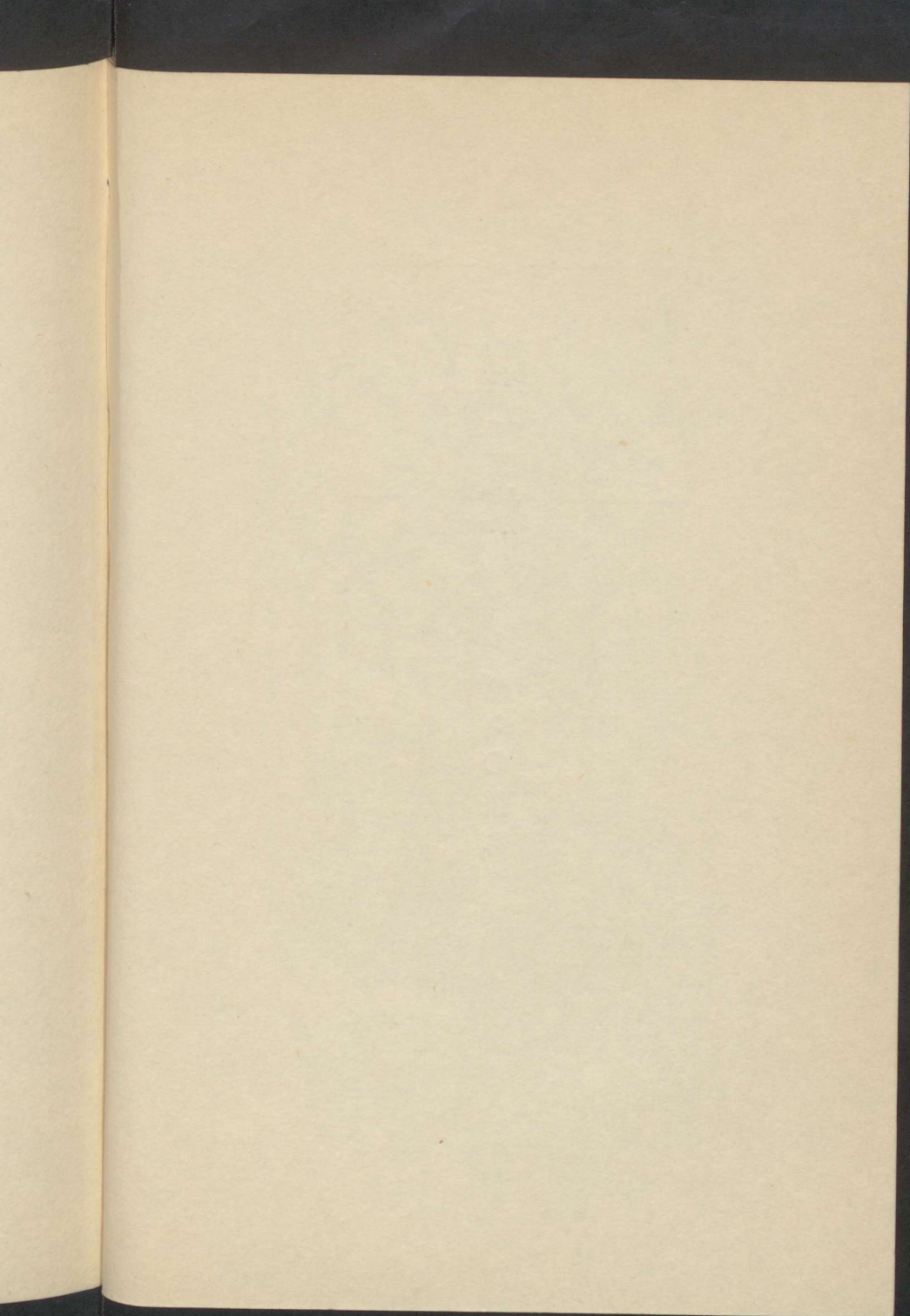




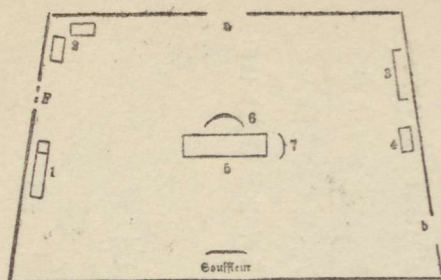
# 第二幕

セルバンの居間









# F 窓

a 一般出入口

b 寢室への扉

1 長椅子、2、と3 書棚、4 壁付煖爐、5 大机、

6 極大臂掛椅子、7、臂掛椅子

華美な、氣持よき、高雅に設備されたる居間、中央に机一ヶ、椅子數ヶ、俱樂部式の臂掛椅子、左手の壁の前に幅廣の革ソファ、右手に美しき壁付煖爐、右手前方に扉、ソファの傍に小机一ヶ、上に電燈一つ、左手に窓一ヶ、所々、壁に畫、華美なシャンデリア



## 第一場

### 召使ひとり

召使（部屋の中で働いて居る。大机の上に水の這入った玻璃壺と、コップの載つた銀の盆を置く、煖爐の火を吹起す、ソファの上の枕を正しい位置に直す、外でベルの音——出て行く。ごく短い間）

セルパン及び召使（這入つて来る）



## 第二場

セルバン、召使

セルバン（眞青な顔色、昂奮して居る、毛皮外套を脱ぐ）

召使（手を借して、外套をソファの上に置く）

セルバン 用意はいゝか？

召使 ハイ、旦那様。

セルバン ベットを作つてくれ。

召使 みんなもう出来上つて居ります。（極く短い間）

セルバンの居間



セルバン 水を一杯くれ！（昂奮して臂掛椅子へ身をなげる）

召使（コップを渡す）ハイ――

セルバン（急いで飲む――短い間）又焚き様が遅いな！

召使 どう致しまして、旦那様、今日もカッキリ九時に焚きまして御座います。

セルバン プルプルするよ。

召使（溫度計のある壁へ急ぎよつて）十九度――いつもと同じで御座います。旦那様。（短い間）

セルバン 誰か來なかつたか？

召使 まゐりませんでした。

セルバン（とび起きて、不安氣に歩廻る）怖ろしい！（兩手で頭をしめつける）

ア、頭がズキンズキンする！



召使（小聲で）アノウ、冷い壓定布あてめいふでも差上げませうか。

セルバン 要らん——要らん——すぐよくなるんだ——ア、——（立つた儘、前方を見詰める）何であんな事をしたんだらう？

召使 何か御用で？

セルバン ウ、シ、いゝんだ——

召使（扉の傍に立つ）

セルバン オイ、何をまご／＼してる！ 出てつとくれ！

召使（お辭儀して行く——出たと思ふと呼聲）

セルバン オイ——ハンス！

召使（すぐ扉の所へ現れる）何か御用で？

セルバン 何故行つちまふんだ？——何故、わしをおいてきぼりにするんだ？



召使（主人の常と變つた態度に全く狼狽して）アノウ——アノウ……御免下さいまし……旦那様が行け、と仰言いましたので。

セルバン さうか？ 出て行けッてわしが言つたんだね——本當か——駄目だ——え、おれがと、思ひ出せない……頭が逆も痛い——痛くて、痛くて、馬鹿になつちまふ！

召使（同情深げに）あてめめん 壓定布は如何で——

セルバン 靜かに——大きい聲をしちやいかん！ お前の聲で、俺の頭がズタズタになりさうだ。（短い間）

召使 アノウ、何か……

セルバン 要らん……俺にや何にも効かんだ——

召使 サウ——旦那様はまだ御病氣になつた事がないので、ひどくへこたれ



ておしまひになるのです。

セルバン ウン——おれは、病氣なんぞした事はない……

召使（小聲で）デヤ——急に御頭痛が……

セルバン（性急に）静かに！

召使（ごく小聲に）多分御風邪でも……

セルバン（嘲笑的に、にがにがしく）風邪——ウン——

召使 アノウ……如何で御座いませう……（間）

セルバン ウン、何だ——そのさきを何故言はん？

召使 あのう、何でしたら——ひとつ試しに……

セルバン 何をゴチャ／＼云つとる……何だと云ふんだ。

召使 御醫者でも……

セルバンの居間



セルバン（憤激する）オイ、止めてくれ——醫者だと？ 呆れた奴だ。馬鹿野郎！

分つたよ、それつきりしきや奴等にや出來ないんだな。能なし奴！ 突立つたまゝ、で何にも出來やせん。何一つ言ふ事も出來んぢやないか。血が人間の身體から細い管になつて、<sup>とび</sup>逃出して行くんだ。人間の生命もそれと一緒に失くなつて行くのが見えないんか——それでも奴等にや、何一つ手助けも出來んのだ！……醫者だと？ 馬鹿々々しい……（行つたり來たりする……兩膝が肘にカチ合ふ……短い間）彼奴のベットも血だらけだつた！……イヤだ、イヤだ、俺はベットへは寝ないぞ！……（立止る）可愛想な奴だ！——一體何であんな馬鹿げた事をやりあがつたんだらう——いつだつて出來る事なのに！……（兩手で首を締めつける）——オイ、ハンス、俺はソファに寝るから——ア、——（横になつて毛皮外套を被る）小さい燈りをつけて此方へ寄せてくれ——サ



ア、よし、何か本を一つくれ——是ぢやない——他のだ。シャンデリアは消して良い——ア、——笠を立て、くれ——顔がやけつちまふ。　サア——よし——もう行つて良いよ。

召使　お休みなさいまし、旦那様！（お辭儀して行く）

セルバン　オイ、ハンス、さう急ぐなよ——

召使　（スグ立止る）　何か御用で？——

セルバン　ア、——もつと聞きたい事がある………忘れた………病人の事だから少し氣をつけておくれ………違ふ、違ふ、馬鹿ッ！　俺は病人ぢやない——この痛いのも直き止んぢまふだらう………明日——よく眠つちまへば——ね？

召使　さうで御座いますとも、旦那様！

セルバン　何を馬鹿丁寧に仰々しいんだ——その返事は………あてにはならんがな



……お前はおれが嫌ひか？

召使（氣を悪くして）何で旦那様は……何故私は旦那様をお嫌ひだと言へませう——一つも理由が御座いません——六年間私は旦那様に御奉公申上げまして——

セルバン ヨシ／＼……なあに、急にそんな事を考へたもんだから——勿論こんな事を聞くのがどうかしてゐる……勘辨してくれ……で——誰も來なかつたかい  
今夜——今は——誰も——？

召使 エ、どなたも御見えになりませんでした。旦那様。

セルバン 誰か俺を探してなかつたかね。

召使 イ、エ、別に。

セルバン 本當に大丈夫かね？



召使 ハイ、旦那様、間違ひ御座いません。

セルバン ヨシ／＼……間違ひないとな……でもそんな氣がする……俺だけの氣持だが……ちや誰も來なかつたんだね……

召使 ハイ、どなたも。

セルバン 怪しい、黒い奴が……エ？

召使 警官が引張つて行きました。

セルバン アー、サウ／＼——よし……行つてよい。用があつたら呼ぶから——

サウ／＼連れて行かれちやつたんだ——忘れる事ができればいゝんだが……フム……お休み……お休み、ハンス。

召使 お休みなさいまし、旦那様。(退場)



### 第三場

セルバン

セルバン（本を讀まうとする、昂奮して居る——神經質に本を側へ投げる）

アツ、この頭が……この頭が……彼奴のベットは血の海だつた！……（深く息をする。兩手を振りしぼる。この時小電燈のコンタクトをカプセルからひつばる——眞暗になる。セルバン呻く——眠る。暫くしてものにおびへてベットで轉々として寢返りをうつ）



## 第四場

セルバン、ダニエーリ、クラリツセ、ライナー

(陰鬱な黒い影、夢幻の人物現る。ダニエーリ、ライナー、クラリツセ……の幻像足音もなく近寄る。クラリツセはセルバンの頭に近く腰を下ろす。ダニエーリは机に向つて座る。その右にライナー立つ——次第に月光が一つきりの窓からさしこんで来る。暖爐の火がもえ上る——二條の光が、水呑みのガラス壺で相會ふ——そして幻像を照らす)



セルバン（ソファで寝返りをうつ）違ふ——違ふ——夢ぢやない！——どうしたつて夢ぢやない！

ダニエーリ（低くしかし鋭い聲で）被告は静かにせねばならん。——原告！ それからどうした！

（光がパット閃いてライナーの顔を照らす。死人の様に青ざめて、頭に繻帶して居る）

セルバン（驚く）テオドル！

ダニエーリ 落着いて。

ライナー（幽霊らしい聲音）私は企業家ゲオルク・セルバンを相手どり、彼がその友達の生命を嘘偽を吐く事によつて汚した事に就て訴訟を提起します。

セルバン 違ふ——……



ライナー 嘘偽、我慾、偽善、慘酷の化身、ゲオルク・セルバンを訴へます。容易に救助が可能なりしにも拘はらず、死に垂なんなんとする者に對して冷淡な心と、輕蔑的な感情を以て傍觀して居た男を告訴致します。

セルバン だけど僕はみんな……

ライナー 人間のつくつた法律によつては罰する事のできぬかゝる犯罪について、私は彼を訴へます。

セルバン 僕は決して犯罪人……

ライナー (聲を上げて) 私は最高法廷に、彼の有りのまゝの魂を御目にかけます。

——公正なる裁判所が、言語道斷な犯罪に正當なる判決を下されん事を願ひます。

セルバン 僕は決して……

セルバンの居間



ライナー 若年の頃から、ゲオルク・セルバンはテオドル・ライナーと友人關係にありました。この二人の中で、まさに天才的なおどろくべく才氣喚發だったのはゲオルク・セルバンでした。さうです、彼は天才的でした——天才的な商人でした。テオドル・ライナーは彼のお蔭で金銭上にも不自由なく、後には家庭の幸福にまで援助を受けてゐたのです。セルバンは彼に一人の若い可愛い、娘を紹介しました。そして二人は結婚したのです。彼は娘の心からの愛情を聞かされた時にも友を信じて、その女が正直で無慾で才能を誇らぬテオドル・ライナーを愛して居る事を確く信じて居たのです。そしてこの結婚こそ、彼には同時に誠實無私にして友誼篤き愛情の一つの新しい素晴らしい啓示となりました。私はこれを義務と思つて確言致しますが、テオドル・ライナーは、その妻がセルバンの情人である事に少しでも氣付いて居たら、彼はかうした世話を



受入れなかつたでせうに。所が彼は知らなかつたのです。

セルバン ウン——僕は……

ライナー（容赦なく）併しセルバンは最後に彼に對して、下劣な惡戯をして、その救助を斷つたのです。非道く愚弄された相手の男は歸宅してから、頭へピストルを打込んだのです。この男の生命に對して、私はゲオルク・セルバンが責任あるものと思ひます。

セルバン 違ふ——そりやあ……

ライナー この場合に於ても、お先真闇、手さぐりの偶然と云ふものが、馬鹿らしい役目を演じた事を否定致しません——それにもかゝはらず私はキツパリ主張します。假令、故意でなかつたにせよ、ゲオルク・セルバンが輕卒にも一人の人間を殺してしまつたのです。



セルバン 僕は無罪だ！

クラリツセ 神様……あ、神様！

ダニエーリ 落着いて！

ライナー 私は、友人テオドル・ライナーをその慘酷な興味の中に殺害したものと  
してゲオルク・セルバンを訴へます。彼はその外に、もつと大きな犯罪を友達  
に對して犯して居ます——彼は彼の友人の家庭生活を賭けて下等な賭博をやつ  
てゐたのです——そして本事件に關して私は、クラリツセ・ライナーを證人と  
してお調べ願ひたいのです。

セルバン（起上る）違ふ——違ふ——それだけは違ふ！——

クラリツセ マア、非道い！

ダニエーリ 黙りなさい！——わしが尋ねたら喋舌りなさい！（命令的な素振りを



する)

セルバン (ソファにうつむけに倒れる)

ライナー ゲオルク・セルバンはこの非道い賭博を友達相手に打つたのであります  
が、その輕卒な心は罰せらるべきであります。——私はこゝにテオドル・ライ  
ナーを殺害したる件に關し彼を訴へるものです。——何卒、彼に對し極刑を御  
選擇あらん事をお願ひします。(革の臂掛椅子に身を沈める)

セルバン 僕は無罪だ!

ダニエーリ 裁判官はクラリツセ・ライナーを證人として審問する。

セルバン (身を起こす) 不可ん——不可ん!

ダニエーリ (素振りと共に) 落着いて!

セルバン (ソファに沈む)

セルバンの居間



ダニエーリ クラリツセ・クレメント・テオドル・ライナー未亡人起ちなさい——これからわしに正直に有りのまゝをお答へなさい。

クラリツセ (前に進む)

ダニエーリ 結婚して幾年になりますか？

クラリツセ 八年になります——

ダニエーリ 何才でしたか——あなたが結婚した時は。

クラリツセ 十八でございました。

ダニエーリ 自分の自由意志でこの重大な事を決心したのですか？

クラリツセ (黙る)

セルバン 何故、君達は彼女おれを弄めるんだ！

ダニエーリ お答へなさい、自分の意志で結婚したのですか？



クラリツセ 妾……妾……（詰まる）

ダニエーリ 正直に、有りのまゝにお答へなさい——私はそれをのぞみます。

クラリツセ 妾……妾、あの方の意志に従つて、テオドル・ライナーの妻となりました。

ダニエーリ 誰の意志です、あなたを強制したのは？

クラリツセ （極めてのろ／＼と）ゲオルク・セルバンの意志でございました。

ダニエーリ 結婚前、よほど前から、セルバンと知合ひだったのですか？——お答へなさい！

クラリツセ 一年前から——

ダニエーリ 娘の頃、ゲオルク・セルバンと関係があつたのですか？——答へねばなりません——サア？



クラリツセ 妾はあの人を愛しました。

ダニエーリ にも拘らず、他人の妻となるのを承諾したのですね。

クラリツセ どうも仕様なかつたのです——あの方がさうのぞんだのですから。

ダニエーリ であなたは相變らず、自分をこの不名譽な状態に陥れた男を愛して居

たんですね——未だにゲオルク・セルバンを愛してゐますか？

セルバン 何故君達はこの憐れな婦人を虐めるんだ。君達がわしと話を附け様と言

ふなら、わしはこゝに居る！ だが、もう我慢が出来ない——

ダニエーリ 落着いて！（命令的に蠟の様な青い手を差出す）

セルバン（ソファにうつむけに倒れる）

ダニエーリ（クラリツセに）まだあの男を愛してゐるのですね？

クラリツセ エ、エ、——愛して居ります。



ダニエーリ　であなたは——良人に反抗出来たのか？　あなたの魂の中のこの恐ろしい事實を良人から讀取られる不安さを感じなかつたのですか？

クラリツセ　私と一緒に居てテオドル・ライナーに不服はありませんでした——それに妾としても、何う仕様もなかつたのものである。

ライナー（啜泣き乍ら）クラリツセ、クラリツセ、お前は何をしたと云ふんだ！  
セルバン　泣け、泣きやがれ、うすぼんやりした幽霊奴。

クラリツセ（ライナーに）許して……許して……（彼の臂掛椅子の傍に身を沈める——消え失せる）

セルバン（益々昂奮してソファの上で身動きする——暫くしてやつとこさと身を起し、毛皮外套を投げすてて立上る——夢遊病者の様な足取りで幻像——ダニエーリ——の所へゆく）何だつてんだ？——誰がおれの邪魔をして良いと云つた



んだ？ 出て行け！ 貴様達は見るとも嫌だ！

ダニエーリ ゲオルク・セルバン！

セルバン さうさく——おれがゲオルク・セルバンだ——意力と権力——をもつてゐてそれを押し通す男だ——ビツクリする事のない男さ！ 俺は自分のした事に就てはビクともせずに責任をもつ——

ダニエーリ ゲオルク・セルバン——お前は友達を殺したのだ！

セルバン 違ふ——違ふ——そりや違ふ——奴は自分の腐甲斐なさを自覺して自殺したんだ……もう生きる権利がないと思込んだからだ！

ダニエーリ ゲオルク・セルバン——汝が友人を殺害したのだ！

セルバン 嘘つけ——青白い幽霊め。

ダニエーリ（手でさし招く）



セルバン（ヂット立止まる）

ダニエーリ わしの質問に答へなければいけない。汝の友人が財産を失くしたのを  
知つてゐるであらうな？ それからもつと多くの事も。

セルバン ア、知つてるとも！

ダニエーリ で汝は彼を愚弄したのだ！

セルバン ありやア自業自得と云ふものだ！

ダニエーリ 人を救けた人間を裁く權利はない——いや裁いてはならないのだ！

セルバン（憤怒して）下らないお喋舌だ。そんな道徳は何處にもないぞ！

ダニエーリ もう救ふ手段もない……

セルバン 奴は盲目だつた。知つて、自分で身を滅したんだ……（聲高に叫んで）

苦しみやア良いとおれも思つたのさ。そりや否定しない。良くきけよ。奴の馬



鹿さ加減を自分で償へば良いと思つたんだ。

ダニエーリ 立派な友人、善良な友人だ！

セルバン さうだ——おれはさうだとも！

ダニエーリ 汝が彼に加へた悪戯は慘酷なものだつた。汝は彼をそんなに非道く虐めてはいけなかつた。

セルバン ヘッ、おれはいつだつて良すぎるほど奴の爲を思つてやつたんだ——  
だのに奴はおれを慘酷に欺いたんだ！ 思ひもよらない事だ。

ダニエーリ ぢや一體知らんといふのかね——彼の頭の中に起つた事を。

セルバン 分る筈などないぢやないか——そんな意氣地なしだとは思つてなかつた  
もの。

ダニエーリ てんで汝は彼を知つてないんだな？——汝がさ——彼の友達がさ。



セルバン ア、おれは奴の友人だった！

ダニエーリ 仲々變つた友人だ！ 汝は一人の娘を愛して居た——その愛人を彼に妻として與へた。何故そんな事をしたのだ？（間、嚴に）何故そんな事をしたか？

セルバン クラリツセの將來を心配しなければならなかつたんだ。

ダニエーリ 汝はあの娘を愛してたのか？

セルバン 愛してたとも。

ダニエーリ 何故汝の妻にならなかつたのだ。何故さうしようとしなかつたのだ。

セルバン ハ、ア、貴様は何でも知つてゐる積りなんだな。イヤア——俺が夫として役に立たないと思つたからさ。おれには家庭は不用なんだ。おれは家庭を持つちやいけないんだ。家庭の團欒だんらんの中に身を熔かし込むのがいやだつたんだ……



おれは世帯持ちになつて色々な事を空想する男になぞなる事は許されなかつたのだ……おれは！ 金銭の王様のおれは——今日から明日へと俺は大きな目的に到達せねばならないんだ！ 縛られちやア不可なかつたんだ。おれには秀れた才能がある——それに獨身で暮らす權利もおれにある。だからおれは強いんだ！ 有象無象より強いんだ！ 誰にもおれは喙を入れさせてはならなかつた——おれの力が消磨する虞があるから。今日から明日へとおれはどえらい事を敢行せねばならなかつた——そしてそれにいつも全財産を投出したのだ——この驚嘆無比の計畫の成功を誰が請合へよう——？ でもおれにはさうせずに居られなかつた。勿論、一夜あければ乞食になるかも知れない事を知つては居たが、へまな偶然で奴は何時になつたつて失くなりつこはないからな。

ダニエーリ

汝は自分の投機の爲に、他のすべての感情を犠牲にして來た——どう



だ？

セルバン おれの投機はおれには商賣だ。おれの感情だつて？ —— 一人の婦人を

愛し、一人の友人を持つ……人間二人……これで充分だ！

ダニエーリ 片方の人間は、汝には餘計だつたのだ！——そして君は戀人を友人の

妻にして……しかも關係を續けて居たのだ——美しい友情だ——美しい戀愛  
だ！

セルバン お前達にや到底おれといふものは分りつこないよ。

ダニエーリ どうして／＼、分つてゐるとも——汝は惡人だ！

セルバン 何んてまあ簡單に片づけやがるんだ！ さうかい？ ぢやいゝ、大抵の

人間は家庭の甘く熟れた空氣の中で生活する爲に生きてゐるんだ。この空氣の中  
で彼等の幸福が榮え、その香りの中に彼等は喜びの心に酔ふんだ。おれの友人



といふのは、かうした人間なのだ。だからおれは奴に幸福をもたらしやつたんだ。これが虚偽だと云ふのか？ この虚偽を今迄奴は知らなかつたし、感じても居なかつたんだ。奴には平和な、温かい、静かな住居があつたんだ。

ダニエーリ　悪い、覆面した罪惡の住居だ！

セルバン　お前は何てまあ血も涙もない廣告屋だらう！ 奴だつて自分の妻の側に居て自分の弱い魂を素晴らしく満足させたものを感じて居たぢやないか。そこに悪い、覆面した罪惡がひそんで居たと言ふのか——それが虚偽だとしても言ふのか——エ、？　で今でもおれは信じてゐる。もしおれが奴を一人ぼちでいとも毅然としてゐる男同様に取扱つて居たのなら、奴が後生大事にして居たクラリツセなんぞに奴はお目にもかゝる事ができなかつたらうよ。これが浮世の虚偽と云ふもんぢやないかな……



ダニエーリ　ごまかしは不可ん。

セルバン　おれのために花が咲いた様なキスを、クラリツセは奴からは求めなかつたんだ……これはこのおれが目覺ましてやつたんだ。熱く燃え上る熱情から生まれたもの、それは、おれのものだつた……あのいとも可愛想な若僧はこうした氣持はちつとも解してゐない。おれの方はもつと強い——權利はおれのものだ！

ダニエーリ　極道者の関の聲をきくがよい。

セルバン　脅かされた良心の関の聲をきけか。ハッハア！　血の通はない道德や、せせつこましく捏つち上げた規範なんかぢやア大きく脉打つ人生を征服出來つこはありやアしない。だからおれはこの創造的な人生の中を先端に立つて進んで、ライナーの生活を創造してやつたのだ——奴の望んで居る通りの生活を。



彼奴等の生存上のつながりは、みんなおれの生活に従属してゐるんだ。その爲にこそおれは働いてゐたんだ。で、そこにおれは他のどんな人間からも得られない喜びを求めて居たんだ。

ダニエーリ　汝は我慾の御先棒だ——利己主義こそ、汝の持つてゐる最大の感情なんだ。

セルパン　人生の闘争に於て、おれは決して無分別な相手ぢやなかつた。

ダニエーリ　多くの人間を汝は慘酷にも塵こみの中へ叩き込んでしまつた。それなのに汝を驅つて何十萬といふ財産をかき集めさせたのは執念深い利己主義だつた。

セルパン　さういふ批難は、財産をつくりあげる術を知つてゐる程の者はみんな、忍ばなきやアならないんだ。

ダニエーリ　汝の慘忍な投機を汝は仕事だと言ふのか？



セルバン 勿論——仕事だとも。創造的空想の繪畫を實生活に移し變へる事だ。これがすべての支配者の考へなんだ。おれ達は高い所に立つて居る——すると段々視野が展開して行く——すると大きな目的が完全に表はれてくる。さうするとやがて下らぬ犠牲者共が縮まつちまふのだ。さうだ、おれは随分と有象無象を塵の中へけり込んだものだ……だがおれの友人だけは決して瞞した事はない奴のもの塵一つだつて取つたといふんぢやないからな。

ダニエーリ あの男はそれで死んだんだよ……

セルバン 自殺したのさ——卑怯だつたから。死ぬ事の外にや何にも出来なかつたのさ——生きて行くつて事を理解してなかつたのさ。で奴が幸福だつたとすれやア、それはみんな俺のお蔭なんだ——その幸福が僞りに依存してゐたにせよ——幸福にはかはりありやしない。兎に角おれが奴を幸福にしてやつたんだ。



(短い間)

ダニエーリ　汝は虚偽を眞理といふ王者のマントにくるんで居るのではないか。この道徳が冷酷きわまりなき熟慮を以て汝の理性を良心の獄屋と化せしめてしまつたのだ。

セルパン　おれの道徳――

ダニエーリ　(相手を遮つて) わしは汝の道徳の礎石を粉碎して、汝の魂に觸れてくれるぞ！　考へるのはやめろ、汝は追憶の苦痛を感じるだらう。否、我輩は汝がその苦痛を身にこたへる事を欲するのだ。

セルパン　貴様にやおれを支配する力なぞあるものか。おれは大きな事がやりたかつたのはよく知つてゐる――それにおれは奴には良い忠實な友人だつたんだ――

ダニエーリ　ホ、――かうした氣持――そりやア花崗岩の様に堅い切石の集つた



汝の生活の中では、一個の蠟にすぎないんだ。それこそ汝の建物の中で、煉瓦一つの役にも立ちません。この弱い場所を崩して、假令どんなにすばらしい切石だらうが、わしは汝の魂へ這入り込んで行つてやるぞ！ 防ぐ事などは汝には出来ないのだ——わしは汝の魂に觸つてやるぞ！

セルバン (この間によりめき乍らソファに戻る、偕て身を沈め乍ら呻く) ア、ツ……ア、ツ……

ダニエーリ 汝は自分の戀人を友人の妻にした——何と云ふ不倫な遺方だ。それに汝は友人をひどく愚弄した——そして又々汝は非人間的な事をしてゐる。彼を救けないといふ仕方だ、テオドル・ライナーを殺したのだ。そしてもしも彼がその結婚の秘密を悟つたら、やはり汝は彼を殺して居たに違ひなからう。結局汝は友殺しの犯人たるをまぬかれない。そして汝は自分の汚ららしい罪を贖



はなければならぬのだ。これで法廷を閉ぢる。

(舞臺眞闇になる、幻像消える)

セルバン (熱に浮かされて) クラリツセ……救けておくれ……何故お前達はこれおれを信用しないのか——おれは無罪だ！ おれは奴を好いても居たんだ——テオドル！ さう言つてやつてくれ、クラリツセ！ だのに、お前達はおれに判決を下さうとする——一體どんな權利があつてだ！……良心！——馬鹿げた子供でした……(間)

ダニエーリ (現れる)……右の條々に關し、我々は司法權により、ゲオルク・セルバンを有罪と宣告す——そして彼を至高の主の良心の名において、獨房檻禁に處す。彼はそこに一生を終はるべきものなり——獨りぼつちでだ！(暗くなる——幻像消える)



セルバン（ソファの上で苦悶）違ふ、違ふ——おれは無罪だ……何の権利で……テ  
オドル……お前の眼がおれの脳髓を突刺す様だ！……助けてくれ……おれの頭  
助けて、助けて！

## 第五場

召使、セルバン

召使（急ぎ登場、スキツチを捻る）こりやあ大變……どうしたんだらう一體？

セルバン（起上る）貴様もう來たか？！

召使 何か御用で御座いますか、旦那様。

セルバンの居間



セルバン 裁判官を……裁判官を！ おれは判決を否認する！

召使 一體どうしたら……

セルバン そこだ——ホラ——裁判官だ！（躍上る）早く捕へろ——あそこだ……  
（ダニエーリの座つて居た椅子を指す）

召使 あすこにはどなたも——

セルバン （召使に躍掛る、引張つて倒す）そこだ——そこだ——裁判官を——

召使（驚愕して）誰か！ 誰か來て！



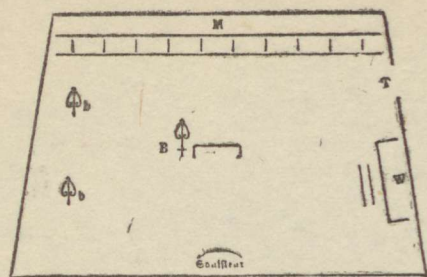
# 第三幕

サナトリウム庭園内









T、大入口、

M、壁、

b、樹木、

B、大木その下にベンチ一ケ、

W、番小屋、

大木一本、花が咲きむれてゐる、下にベンチ一ケ、  
背景を庭園の圍壁が限る、麗しい春の日の午後——  
幕進む中に黄昏になる。



## 第一場

ペーターとミヒエルの兩番人、ベンチにかけて居る。

ペーター　なあ、おい——何てたつて金の中だなあ！

ミヒエル　ウンニヤ、こゝにや、例外は幾らもあるぜ？

ペーター　さうかな——ウン——實際はおめえの方が本當だな。

ミヒエル　あたりめえよ。(間)

ペーター　奴、何してるんだい？

ミヒエル　誰よ？



ペーター お前の所の百萬長者よ。

ミヒエル 紙提灯を作つてらあな——今ぢや——さうだ今頃は庭を散歩する頃だら

う。

ペーター 可愛想な奴ぢや！

ミヒエル さうだなあ——ところで百萬圓は何うでい？

ペーター 何んもなりやしねえ。

ミヒエル そんな事ねえさ——もうおたからの效目もあらはれたと言ふものだ。看

護の遣方が違ふと言つた様な。

ペーター そりやさうだが——だが正氣にやなりつこねえぜ。

ミヒエル そりやア分つてらあな——正氣になんぞなりつこねえや。

ペーター でもまあ馬鹿げた話よ——ひでえものにとつつかれやがつたんだつて



ね——

ミヒエル さうよ——囚人服を着せてよ、部屋ん中ぢゆう牢屋の様にしなきゃならねエ——さうでもしなきゃア御本人が落ちつけねエんだ——

ペーター だが今ぢやおとなしいだらう！

ミヒエル ウン——今ぢや落ついてるがね。(長い間)

ペーター フム——手前<sup>てめえ</sup>が友達を殺しちまつたつて、今だに考へてるのかい——

ミヒエル さうよ——だがその話は當人とやつちやアいけねエんだ——醫長が禁じ  
たのよ。

ペーター それに宣告を受けたと言つてゐるんだつてぢやねえか——

ミヒエル ウン——で奴さんの罪障を入獄して贖ふんだと——てんで奇體な話よ！

ペーター まるで奴の顔色つたらないぜ。可哀想な金持だなあ——



ミヒエル いい筈はあるめえとも——てんで飯も食はうとしないんだからな——

ペーター——いくら言つても駄目なんけエ——エ、？

ミヒエル 誰の言ふ事だつて聞くもんけエ——こんな風にブラ／＼歩廻つちや、かうやつて腰を下ろして——まるで何處かで話聲でもするのを聞いてると云つた恰好よ——何だぜ、おいらのお喋舌りにしてからが奴さんにや分らねエらしいぜ——

ペーター——手前<sup>てめえ</sup>に金がふんだんにあるつてのが分つてんのか？——

ミヒエル ウンニヤ——知るめいよ。

ペーター——フム……そんな事まで忘れつちまふもんかなア！

ミヒエル さうよ仲間、みんなさう云つたもんよ！（間）

ペーター——オイ、用心！ 親父が來たぜ！



兩人 (とび上る)

兩人 (喪服のクラリツセをつれて登場)

## 第二場

クラリツセ、醫長、番人達

クラリツセ まあ美しいこと。

醫長 エ、庭は迎もいゝんですよ。

クラリツセ これが悲しい場所であると言ふ事を知らなければねえ……

醫長 (番人達へ) 行つてよろしい！



番人達 (退場)

醫長 おかけ下さい、奥さん……この片隅があの人好んで来る場所なんです……

兩人 (腰を下ろす)

クラリツセ マア大變怖い思をいたしました。まるで思ひがけなく、突然……

醫長 エ、御尤もですとも、でも奥さん、あまり昂奮なさらない様に……

クラリツセ ……夫と、それに一番のお友達を失くしてしまふなんて！

醫長 さう昂奮なすつては……神經が逆も疲れておいで、すね……

クラリツセ 怖ろしう御座いますわ……(シャクリ上げる)

醫長 靜かに、チャンとしておいでになる約束でしたが……

クラリツセ (啜泣き乍ら) 餘りくるしいものですから……

醫長 靜かにして下さる條件でお入れ致したんですよ。



クラリツセ 私本當にどうにも……みんな失つてしまふなんて、一度に、だしぬけに……

醫長 旅行にでられるのが一番好うございませう。

クラリツセ 私は行つた方が――

醫長 勿論ですとも――早ければ早いだけ良いんです――出来れば今夜邊りにでも！

クラリツセ イエ、イエ――妾には出来ません――

醫長 しかし何故です？

クラリツセ 妾、あの人がなほる希望を今でももつてをりますの――ネエ、さう思つて居てよろしいんで御座いませう？

醫長 さうですとも――良い方へ向ふのも――



クラリツセ ネエ、先生、妾にはあの人が再び正氣に返る様な恵まれた瞬間がある

様に思へますの。あの怖ろしい妄想があの人から離れてしまふ——ネエ、さう云ふ事が幾度も御座いましたんでせう……ネエ先生？

醫長 エ、エ、——我々にしたつて、さうなつて貰へれば……

クラリツセ ア、あの人、妾が分つて下さればいゝんですけど！

醫長 一寸でも患者を昂奮さしたらいけないんですよ。

クラリツセ でも妾こちらへ來なければなりません——遠くへなんぞ參れませんか

——そんな事したら、妾餘計に苦しまなければなりませんもの……

醫長 それは現在の考へにすぎませんよ！ あなたが此處で受ける昂奮が……

クラリツセ もし此方へ參れない様でしたら、それこそ妾死んだも同様ですわ！

此方へ參るのが妾には唯一の慰安で御座いますもの……



醫長 昂奮なすつちや不可ません、それに……

クラリツセ 放つておいて下さい。先生こゝへ參れさへしましたら、ほんの一眼でもあの人を見る事が出来ましたら、それが妾の樂みです……

醫長 でも、さう氣儘になすつちや困ります、自制して下さい——あなたはまるで御自分の蔭と同じに見えますよ！ 自分で自分を駄目にしてしまひますよ！

クラリツセ 妾なんぞ、どうならうと構ひませんわ！

醫長 生きてなきあ不可んです——それがあなたの義務です！

クラリツセ 妾もう義務なんてもの存じませんわ！（シヤクリ上げる）ア、ゲオル

ク、妾の可愛想な、良い、たつた一人のゲオルク！

醫長 いらつしやい奥さん、私の云ふ事をお聴き入れにならないなら、許可を取消します。



クラリツセ イヤです、イヤです、追ひ出しちやいやです——妾もう落着きました！  
醫長 あなたが昂奮すれば、患者も氣が立つて來ます。それだのに追出す！ だなんて、大げさにしないで下さい！ 私だつてあなたの爲を思へばこそ、かうやつてゐるのはお分りでせうに。

クラリツセ 御怒りにならないで、先生——他に妾誰アれも——

醫長 別に怒つては居ませんよ——たゞ私の言ふ通りにして下さい。

クラリツセ 畏りました——よく分つて居ります……一寸御尋ねてよろしいでせうか。

醫長 エ、どうぞ、喜んでお答へしますよ……たゞ昂奮だけはしてはいけませんよ。誰の役に立つ譯でもなし、その上貴女御自身を傷める許りですからね——  
クラリツセ アノウ、妾もうこんなに落着いてゐるんですよ、こんなに……（間）



醫長　ヂヤア——仰言つて下さい。

クラリツセ　ネエ、先生、本當の事を仰言つて戴きたいんですの……ゲオルクはまだく……あのまゝなんでせうかしら？

醫長　そのことについては確答は申上げられません。(間)

クラリツセ　……でもあなた……御存じの筈ぢや御庭いませんか、お醫者様ですもの。(短い間)

醫長　自然の歩みは迫も人間には推測は出来ません。(間)

クラリツセ　(涙に曇つた聲で) 妾が參りました時——あの人を見ましたわ……庭の中を……アチコチ歩いて居らつしやるのを——

醫長　エ、運動が楽しみなだけまた良いんです……此頃ぢやよくこの邊へもやつて來ますよ……



クラリツセ 顔色が逆も悪う御座いましたわ……！ たまらない程でございますわ……

醫長 エ、——エ、——お氣の毒に！ 精神的にも肉體的にも……まるで始終大きな重い荷を引ずつて歩いてる様です——

クラリツセ おそろしい事ですわね！

醫長 健康なガツチリした男がね——逆も有能な人だつたが！……云はゞ謎ですなア！

クラリツセ ……どんなに妾の夫に好意を持つて居たかは、今になつてやつと人に分るんです……

醫長 まるで奇妙な小説が事實になつた様なものですなア。お友達の輕卒な死——そのためにあんな獨特な妄想に捕はれるなんて。



クラリツセ 恐ろしい！

醫長 それにあの自殺——人間なんて、そんな事するもんぢやありませんがね。

クラリツセ 何一つ理由が御座いませんの——可哀想な夫！

醫長 うはさでは、あなたの御夫君は財産全部を……

クラリツセ ゲオルク・セルバンの友人がおちぶれることは絶対にございません。

醫長 御尤も——分つてますよ。セルバンの支配人が翌日の午前にライナーさんの

背負ひ込みを支拂つたんですよ。

クラリツセ ゲオルクの最後の仕事でしたわ！（短い間）

醫長 あの不幸な人は自分を滅した許りでなしに——一番の友達まで連れて行つ

てしまつたんですよ！

クラリツセ そして妾はこの限りない不幸を背負つて行かねばなりませんの……運



命といふものはつれないものですわ！

醫長 フム……どうしてあんなしつこい觀念があの人頭の頭に巢喰つたのか——どうも分らないですなア……

クラリツセ もと／＼不可解なものなのでせう。

醫長 囚人の服を着て囚人の仕事をし、自分の部屋を獄屋の様にしなけりや承知しないんです。そこから彼を引出すのが一骨なんです。そして牢獄にゐると確く信じてゐる時だけは落着いてゐます。

クラリツセ まあ悲惨な！

醫長 私の事を典獄だと云ふし、自分の事を宣告された殺人犯人だと云つて聽かないんです——自分の唯一人の友人を陰險なやり方で殺したんだから、終身懲役に服してゐるのだと云ふのです。（短い間）



クラリツセ　ではあの人を救つてはやれないんでせうか？　——あの妄想から救ひ

出してやれないんでせうか？

醫長　ソリヤ奥さん、私等にしても必ずやれるだけの事はやりますよ……誰かしつかりした看護人をつけて旅行に出すのが一番でせう——

クラリツセ　ハア——さうで御座いませう。

醫長　環境の變化が、多分良い影響を與へませうと思ひます……

クラリツセ　では——何故旅行させないんですの——？

醫長　當人が承知しないんです——頭を横に振つて、こゝで刑期をすごさねばならんて言ふんです。それなり黙つたきりで身動きもしませんよ！

クラリツセ　マア、怖ろしい！

醫長　エ、怖ろしいもんですよ……何とかこの解決法さへ分れば……



クラリツセ あの方が來なすつた！……

醫長 ア、——落着いて、奥さん——

クラリツセ 妾——落着いて居りますわ！

醫長 ア、來ました！

セルバン （登場、囚人の服をまといつてゐる。顔色は死人の様に青白い。頭髮は灰色、モヂヤ／＼な手入れのしてない灰色の鬚が頭の輪廓を構成して居る。眼がくぼんでゐる——眼付きンハッハしてゐる。看守に装つた看護人一人従ふ）



### 第三場

#### 前景の人々、セルバン

セルバン (醫長を見て立止る、暫くして小聲で丁寧)これに控へて居ります。

醫長 セルバン君、もつとこつちへ來なさい。

セルバン 御用ならば。(クラリツセを熟視するが彼女であることを認めず、御辭儀してごくあつさりと言ふ)私は大罪人です。下等な犯罪人です。私は無二の友人を殺したんです。

クラリツセ イ、エ! 違ひます!



セルバン エ、！ 本當ですとも！ 私を信じ、盲目的で私を頼りにして居た無二の友人を殺してしまつたんです。

クラリツセ ゲオルク、ゲオルク、何を言つてゐるんですよ！ そりや嘘です！

セルバン (頭を深く垂れて) 本當です！ 私は罪滅しにかうして素直に刑を受けてゐるんです。

クラリツセ 誰があなたを處刑したんですの？ 誰もありませわ！

セルバン 裁判官——偉大なる裁判官がです！ 彼が宣告を下して私を處刑したの

です。エ、エ、よく知つてゐますとも——それに知つてゐるのは僕だけです！ 彼は私を終身懲役に宣告しました。

クラリツセ (ギョツとして) マアッおそろしい！

醫長 (小聲でクラリツセに) 落着いて！



セルバン (前を見詰める、點頭く) 賢明な裁判官——公平な裁判官!

クラリツセ (セルバンの方へ歩寄つて、片手を掴む) ゲオルク!——妾が分つて?

ネエ、私のゲオルク!

セルバン 私は囚人二十七號です。あなたは存じません。(短い間)

クラリツセ (ベンチに身を沈める)

醫長 僕が誰だか分るかね?

セルバン 所長さんです。

醫長 何處の?

セルバン 刑務所の所長さんです。

醫長 何か望みがありますか。

セルバン はい。



醫長 何です？

クラリツセ (嬉し氣に、生き／＼と) サア、言つて御覽なさい！

セルバン 私、獨りで居たいんです。(短い間)

醫長 (看護人に) 病人を部屋へつれてつてくれ給へ。

看護人 (セルバンの腕をとつて、連れて行く)

クラリツセ (急に立上つてセルバンの後から呼ぶ) ゲオルク——待つて——明日又

來ますわ！ (ベンチに身を沈めて、ハンカチで顔を覆ふ)

醫長 お泣きにならないで——しつかりして下さい……

クラリツセ (無調子で) 泣いては居りません——もう妾には、涙が御座いません

わ……(間)

醫長 サア、奥さん參りませう。明日は多分、今日よりもつと……



クラリツセ　アツ、先生、かうしておいて下さいましな……もうほんの二三分……  
醫長　エ、、よございます。しつかり落着いて下さい！——すぐ戻つて參ります  
から！（退場）

## 第四場

クラリツセ、ダニエーリ

（クラリツセ坐つたまゝ沈思熟考してゐる。時々軽く首を振る）

ダニエーリ　（登場、四邊を見廻す。それからクラリツセの前に立止つて囁く）お聞



きなさい——我輩が裁判長ですぞ！

クラリツセ (ビツクリして) マアわたし！

ダニエーリ 驚かんでもよろしい——我輩は裁判長ぢやが——一寸話さねばならぬ  
事がありますのでな。

クラリツセ 何ですの？

ダニエーリ 我輩は永い事、貴女を待つて居たのだが——あなたは到頭やつて來ま  
した。

クラリツセ あなたなんかまるで存じません！

ダニエーリ 所が我輩の方では貴女を存じてゐる——貴女は黒い服の女ぢや。我輩  
を救ひ出しに來たんぢや！

クラリツセ 妾が貴方を救出しにですつて？



ダニエーリ 左様！ 裁判長である我輩はこゝに捕はれの身になつてゐますのぢや、と言ふわけは世界中の人間が我輩を怖れて居る。我輩の事を思ひ、我輩の持つて居る超人的法律を考へると、怖ろしさに身震ひするからぢや……貴女を待つてをりましたぞ——そして貴女は來て下すつた！——今貴女は、我輩が此處からにげだす手傳ひをしてくれねばならぬ。我々はにげねばならぬ。急いで急いで！ 爲る事はうんとある……アツ、敵が來る！ 貴女が獨りつきりの時に、又來ますぢや！（急ぎ去る）



## 第五場

### 醫長、クラリツセ

醫長（クラリツセの方へ急ぐ）ビツクリなさいましたか？

クラリツセ あの人誰ですの？

醫長 精神病者です——ドクトル・ダニエーリ、哲學者です。餘り頭を使ひすぎたんで、こゝへ連れて來られちやつたんです。

クラリツセ 氣味の悪い人ですわ！

醫長 亂暴はしませんから、怖がる事はないんです。でもビツクリなすつて本當



に御氣の毒でした。

クラリツセ (疲れた様子でニツコリする) ビツクリするなんて、妾馬鹿でしたわ、

……可愛想にね!——ゲオルクは何をして居まして?

醫長 逆も落着いてます。部屋に座つて仕事をして居ます。小さい紙袋を作つてゐますよ。

クラリツセ 可愛想なゲオルク!

醫長 併し、あんな事して居るのは、まだ良いんですよ!……サア、もう御歸りになつて御休みになる時刻でせう。

クラリツセ すぐ参りますわ、先生……少し申上げたい事が御座いますの。

醫長 何です、奥さん!

クラリツセ アノウ、セルバンは貴方を典獄と思ひ込んでゐますのね?



醫長 エ、あなたも最前、御自分で御きゝになつたでせう……

クラリツセ ですから……かうしたら如何うかと思ひますの。貴方からあの人に、  
恩赦があつて自由の身體になつたと仰言つて戴けましたら……

醫長 フム——そりや良い考へですなア——左様！——何故もつと早く私がこれに  
氣がつかかなかつたかしら？

クラリツセ ネエ、先生、やつて見て戴けます——？

醫長 エ、確かに、頗る良い考です——一つやつて見ませう。

クラリツセ あのいゝえ——今日の中にやつてゐたゞけたらと思つてますの。

醫長 今日の中に——？

クラリツセ エ、——そうすりや、すぐに旅行にも出られますわ——さうぢや御座  
いません——？



醫長 今日の中にネ——フム！

クラリツセ でも——先生御自分で仰言つたぢや御座いませんの？ 今、デツと部屋でおとなしくして居るつて——駄目でせうか——？

醫長 駄目な事はありませんまいがね——

クラリツセ では先生……

醫長 貴女はまた昂奮なさつてゐますね、奥さん——

クラリツセ イ、エ——イ、エ——妾ちつとも昂奮しては居りませんわ——それとも妾が餘りあの人を思ひすぎるんで、變にお思ひになつてゐるんぢや御座いませんの——？

醫長 そんな事はありません！

クラリツセ あの方が良い方に向いてくれたらと思つてゐる氣持も分つて下さいま



す？

醫長 エ、そりや當然の事ですもの！ 私共にしたつて……

クラリツセ それなら——やれるだけはやつて見ようぢや御座いませんか……

醫長 そりや、私共の義務でもあり、責任でもあります！

クラリツセ 一分間一分間が私達には大切です！

醫長 さうですとも——では如何いふ風にしたら良いと御考へですな？

クラリツセ あの人の部屋へ行つて、恩赦があつたから、と貴方が仰言ればよろしいでせう。貴方を一も二もなく典獄だと思ひ込んで居るんですから、貴方の言ふ事なら信するでせうし、職掌柄命令すれば、承知致しませう。それから自分の服を着てね、いゝですか、看護人と一緒に旅に出るんです。さうなれば、次第に病的な觀念を克服しませうし、おそらく全快するでせう——いかゞで



す、先生？

醫長　フム、ちやア……向ふへ行くのは止めて、こつちへ呼びにやりませう。で私は書類を見乍ら、恩赦の件を讀んできかせてやりませう……どうですな？

## 第六場

ミヒエル、醫長、クラリツセ

ミヒエル　御免なすつて、先生。患者セルバンが庭に出たいと言つとりますが——看護人が言ふには、患者は急に部屋にあるのが嫌になつたさうでござえますんで……



醫長　ヂヤア、外に出してやれ！

ミヒエル　畏りました、醫長様！（急ぎ去る）

醫長　それから——ミヒエル！——看護人にさう言つて下さい、セルバン君をこゝへつれてきてくれつて——一寸話があるから！

ミヒエル　（叫び返す）畏りました、醫長様！

## 第七場

醫長、クラリツセ

醫長　（クラリツセに）さあ、運命の神の仰せに従つて、貴女の計畫をやつてみる



事になりましたよ。

クラリツセ どうぞ、うまく行きます様に。

醫長 成功させたいものだ！

クラリツセ そしたら、妾ほんとうに幸福ですわ……逆も逆も口では言へない程、幸福ですわ。

醫長 さうでせうともく——私共皆んなにとつて非常な喜びですよ。（昂奮した間）ウン——それからまだ、書類だ……

クラリツセ （短氣に）なんの書類ですつて？

醫長 恩赦を読み聽かせてやる書類ですよ——

クラリツセ 何か紙が一枚あれば……

醫長 （ポケットを探す）アツ、ひる前の報告書がある——これで間に合ふだらう。



クラリツセ エ、——結構ですわ。(短い間)

醫長 落着いて下さいよ——デツと!

クラリツセ ハイ——デツと……私達は落着いてゐなきやいけませんわね。(間)

醫長 もうやつて來ます——さあ落着いてゐませう、本當に。

クラリツセ 大丈夫です。妾落着いてゐますから、妾溫和しくして居りますから、  
先生! (短い間、黄昏迫る)



## 第八場

セルバン、看護人、醫長、クラリツセ

セルバン (登場、幾分昂奮の體、うやうやしい態度で醫長の前に立止り、短く御辭儀する)

看護人 (その傍に立つてゐる、短い間)

醫長 四人二十七號、申渡す件があつて、君を呼びよせたんだが、わしの言ふ事が分るだらうね?

セルバン ハイ、所長様。



警長

嬉しい話だ！ 注意してきゝたまへ。わしは規則通り、君のこの刑務所に居る間の素行について當局へ報告をしておいたが、君については、良い事、賞讃に値する事以外には別に悪い事を書く必要もなかつたので、その報告が今、大變い、結果となつて、こゝにある様な書面を受取つたが、それといふのは、本所における君の非難の餘地なき素行及び君の精勵格勤の故に……(書類を見る) 左様——で——君の刑期の残りは今日から消失してしまつたと言ふ譯だ。分つたかね、ゲオルク・セルバン？ 今日から君は囚人二十七號ぢやない——君は自由の體になつたのだ——併し乍ら、やはりまだまだ今までの看護人に附添つて貰はねばならん……詰り看守にね……だが君は釋放されたんだよ——分つたかね？

セルバン (鈍く) イ、エ！

サナトリウム庭園内



醫長 君は恩赦を受けたんだよ——自由になつたんだよ——ここを出てつていゝんだ、分つたかね？

セルバン イ、エ——私には分りません。

醫長 今日からはもう君は二十七號ぢやない——又もとのゲオルク・セルバンなのだ——君の刑期は免除されたんだよ——

セルバン (次第に高まる激情を以て) 違ひます！ 違ひます！ 貴方は私をどうしようかと云ふんです？ こんな馬鹿げた嘘を何故言ふんです？

醫長 マア、聞き給へ——

セルバン 私は囚人二十七號です——そして私はいつまでも囚人二十七號なんです——分りますか！

醫長 君は恩赦を受けたんだよ——



セルバン ヘエ——？ 一體誰が私を赦したんです、誰が？ 私を赦す権力を持つ

た人は一人も居りません——私の犯した罪には恩赦は望まれないのです——私の知つてるのは罪滅しだけ、罪滅しだけ、さうです、無限の罪滅しだけです。

——恩赦なんぞ知りません！（狂暴に）私には恩赦なんかない……私はこゝから出ては行かないんだ……

醫長 それでもわしは云ふぞ。さうした方が、いや君はさうしなければ——

セルバン 違ふ、違ふ、違ふ！ 何處に居る——私を處刑した裁判官は——あの人が居なくちや駄目だ！ あの人が私に自由だ、と言ふのなら、信じます。

醫長 君の裁判官といふのは一體誰だつたね？

セルバン 私は知つてます。そして全ての悪い、殘虐な人間共は、彼を知つて居て怖がつて居ます……



醫長 君は病氣だね。ゲオルク・セルバン、熱があるね――

セルバン エ、――併しあの人は私が自由だとはどんな事があつても決して云ひますまい――どんな事があらうと、何時にならうと――(より落着いて)どんな事があらうと、何時にならうと……

醫長 わしは君をどうしたら良いんだ？ 君の爲の席はもう此處にはないんだ。

君は出てゆかなきゃならない。

セルバン そんな事は許されません――できません。

醫長 わしの命令だ。服従せねばならん！ (看護人に)連れて行つてくれ！

看護人 (セルバンの方へ歩み寄る)

セルバン (後退りする)イヤだ――イヤだつたら……刑罰を充分に受けるんだ……

看護人 典獄さんの言ひつけです。反對したらいけません！ サア行きませう。



(腕を掴む)

醫長 サア、行き給へ。

セルバン イヤ——イヤ——苦しめないで下さい！ (身を振切つて、木にとびつき  
幹にからみつく)

看護人 サア、行きませう——

セルバン 放つといて——放つといて——弄めないで下さい。罪滅しをさせないな  
んて、私が一體あなた方に何をしたと云ふんです……？

醫長 コレコレ、ゲオルク・セルバン——

セルバン 私は囚人二十七號です……

クラリツセ (聲高に呼ぶ) ゲオルク、ゲオルク、私と一緒にいらつしやい。

セルバン 幽霊だ——幽霊だ……アツチへ行け——アツチへ——。



クラリツセ 妾よ……クラリツセよ！ 妾と一緒に行きませう。

セルバン うるさくしないで下さい——何故、皆して私を苦しめるんです？

醫長 マア、氣を落付け給へ……

看護人 何にもする譯ぢやありませんよ……

クラリツセ もう何時までもこのまゝなんでせうか。

醫長 私たちは行つた方がよささうですな。

クラリツセ エ、エ、妾もう歸りますわ——ゲオルク——

セルバン あの幽霊を追拂つて下さいよ。

醫長 さあ行かないといけません。

クラリツセ 可愛想なゲオルク。

醫長 (看護人に)患者に氣をつけてくれ給へ。



看護人 畏りました、醫長様。

醫長（クラリツセの腕を取る）今は落着かせないといけません——参りませう。  
クラリツセ マア、怖ろしい——

（退場）

## 第九場

看護人、セルバン

看護人（一寸間をおいて、セルバンに）さあ……気分はどうですね？（間）少しはようなつた？ エ、？（短い間）又部屋へ歸りやせうか？（間）みんな去つ

サナトリウム庭園内



ちやいましたよ——サア、ともかくベンチへかけやせう。  
あ、ねえ。  
(間)二十七號……

セルバン 放つといて……邪魔しないで下さい。

看護人 邪魔するんぢやないでがすよ……サア、こゝへ来てベンチへかけなさい  
……あなた随分奮して居やしたよ……休息しなきやありません……

セルバン (小聲で) エ、……休息と！(身を支へる様にしてゐたが、ガツクリとベ  
ンチに腰を下ろす)

看護人 晩飯はこゝでやりますか、 (間)それとも部屋で？ (間)二十七號——返  
事しなせえ。

セルバン (ユツクリ點頭く——それから) うん。

看護人 これから行つて、食事の支度をして……それから貴方をよびに來ますよ……



…よろしいかね？（間）ぢや行つて直ぐよびに來ますよ……聽いてるのかね…

…それでいゝのかね？（短い間）

セルバン（無調子で）エ、。

看護人　ヂヤ此處に居て待つて、下さいよ……分つた？

セルバン　エ、。

看護人　ヂヤ、サヨナラ、二十七號！（退場）

セルバン　サヨナラ……



## 第十場

### セルバン獨り

セルバン (全く無感覺な様子で坐つて前を見つめる。暫くして頭をケイレンさす——邊りを見廻す——空ろな笑みが表情をかすめる。兩腕を動かす——防ぐ様な恰好で頸を掴む——空が赤くなる) イヤ……おれには出来ない……駄目だ! のけろ……目に見えないいやな手を! あれが彼奴を射殺したんだ! 押へつけないでくれ……さう冷酷に……おれを自由にしてくれ!——放して——(見えぬ手と闘ふ) どうしようてんだい!——オ、サア貴様をやつつけるぞ!——



おれア随分戦つて來たんだぞ——敵對する力と——俺ア……（咽喉をゴロゴロならし、せわしなく頸を擱む）どうしても俺を絞め殺さうてんだな——俺も貴様を——！（地面へ投げつける様な動作をする——地中におし込みでもする様に、躍上つて見えない相手を兩足で踏つける。疲れてベンチに身を沈める——）  
（間）

## 第十一場

ダニエーリ、セルバン

ダニエーリ（黄昏の中に、幽霊の様に木の幹からソツとはなれる、疲れ切つた男

サナトリユウム庭園内



の上から身を屈める）ホウ、こゝに居たか——我輩は君を探してをつたのだ。

セルバン 公平なる裁判官！

ダニエーリ ウン——裁判官！ わしの來るのを知つてゐた筈だ。

セルバン あなたを待つてたんです。

ダニエーリ 大分前から君を探してをつた——百年も前からな。

セルバン ほんの一時ひとときですね。（間）

ダニエーリ （セルバンの側に坐す）君に言はねばならぬ事がある。

セルバン もうみんな伺つてしまひましたよ——もう仰云る事はない筈です。

ダニエーリ いや！ 大きな秘密が！

セルバン （機械的に）へエ、……大きな秘密が！

ダニエーリ 君にそれを言ふ爲にこゝへ出て來たと言ふわけだ。



セルバン 何の御用です？

ダニエーリ それに世間の連中が我輩をこゝへ連れて來たのだ……目先きの見えな  
い連中が……ハツハツハツ……！

セルバン 何の御用です？

ダニエーリ 大きな秘密だ……！ 黙つて居る事ができるかなあ？

セルバン あなたが命令する——なら服従しませう。

ダニエーリ ウン——さうなくちやならん。我輩が何者だか、知つとるな？

セルバン 賢明なる裁判官です。

ダニエーリ ウン、裁判官だ。君を信用して怖ろしい發見を云つて聞かせよう——

君は知る權利を持つとる——又それを聞かなければならん。

セルバン 聞きませう。



ダニエーリ（昂奮して）それは大真理である。冷酷な真理である——君は我輩がこの真理を擔ふのを手助けせねばならん。

セルバン あなたが命令するなら服従しませう。

ダニエーリ その真理は我輩が発見した！——その真理は則ち……さあ聞くが良  
い！

セルバン ハア！

ダニエーリ（嚴かに）凡そ正義なるものは存在せず！

セルバン しかし……

ダニエーリ 分らんかな、凡そ正義なるものは存在せず！ 正義と言ふ司直のマン

トの中にかくれてあるものは偽だ！

セルバン デヤア私は……



ダニエーリ 然り、君も犠牲者の一人である。然るが故に、我輩は君に今釋放を宣言する！

セルバン 私が犠牲者だつて——！

ダニエーリ 然り、正義は存在せざるが故に！

セルバン (恐ろしさうに) そして——あの手は……！

ダニエーリ 笑ひ乍ら) あの手はもう死んだ！

セルバン (聲高に叫ぶ) ちがふ——生きてる！ (重荷から解放されたかの様にゆつくりと身をおこし、「クラリツセ」と囁く、仰向けに倒れる——そして死ぬ)

ダニエーリ (嘲笑的な笑をうかべて見詰める) 耐へ得なかつたのだな——眞理に！ (間、木をゆする、花が死人に落ちかゝる) 我輩は他の弟子を探さなければならん！ …… (四邊を見廻す) やつて來たな！ ——もう遅い——彼はもう釋放の



サナトリウム庭園内

身ぢや！（足音近よる——ダニエーリ急ぎ去る）

——幕——



Novellen

小  
說  
四  
篇

作スユデゲヘ・ンオフ・ルードンヤシ

譯 世 瑞 谷 蘆







## お母さんの手紙

南の國の海岸を美しい婦人が散歩してをりました。彼女は日にてりかややく景色と、立派な庭園にさきむれてゐる花とにうつとり見とれてをりました。しかし時々首を病氣の胸にたれてゐます。彼女はとほい、寒い北國の町に住んでゐる自分の小さな家庭を想つてゐるのでした。この日の光にみち／＼た國で一緒にたのしい散歩をするために、愛する家族のものをみんなできるなら魔の力でひきよせてもみたいとねがつてゐました。そして、病氣がなほつたら自分の夫と長女のリラと二人の小さい子供たちと共に、又此處へ來ようと心の中できめてゐたのであります。

おひる頃、彼女は家に歸つて、もう娘ざかりのリラに美しいながい手紙を書いて



午後の散歩の時に親しく投函しました。それから家に歸つて、自分の部屋の窓から靜に海の中に落ちゆく太陽の美しい光景を心ゆくばかり味つてゐたのであります。そのとき、突然、めまひにおそはれたかと思ふと、彼女はそのまま、卒倒してしまいました。醫師が來た時には已にことされてをりました。温泉の管理者は夫にあて、すぐに電報を打ちました。彼は妻の亡骸をとりに來なければなりません。

不幸な夫があんなに皆を可愛がつてくれたお母さんがもう生きてゐないと子供たちに告げた時は心をかきむしられる様な光景でした。リハはむせびなきながら二人の子供に倒れかかり、お父さんは三人の子供たちをだいて一緒に泣きました。このなげきの沈黙はまづ一番小さい子によつて破られました。

『僕、お母ちゃんを見るんだ。お母ちゃんを見るんだ。』

そして、三人の子供は、又かなしさうに泣き始めました。父は三人にキッスして



言ひました。『おとなしくしておいで。さうすれば、又お母さんに會へるからね。そしてお母さんの手にキツスする事もできるよ。けれども、お母さんに話しかけてはいけない。お母さんはもう返事ができないんだからね。話しかけたりすると、お母さんは悲しむよ。でもお母さんは今でも、あそこでいろ／＼心配してお前たちのことを想つてゐるのだよ。だから、お父さんはこれから行つてお母さんを家につれて來るからね。リラ姉さんが一緒にゐてお前たちの面倒をみてくれるよ。』

さう言つて、彼は子供たちにキツスして、大切な亡骸のある國へと急ぎました。彼は夜中乗りつゞけ、一寸も眠れませんでした。彼はたえずひゞく車輪のゴウ／＼言ふ音や、すれちがつた列車のガタ／＼言ふ響の中に、あの死んだお母さんがリラにあて、出した手紙を運んでゆく列車のひゞきも聽いてゐたのであります。彼は自分の妻の亡骸を見た時には何とも言ひやうのない悲しみにとらはれました。丁度手



折られた薔薇のやうに、彼女は他の花の間に横たはつてをりました。彼は棺にふたをさせ、遠く旅立つてしまつたお母さんを子供たちの所へつれかへるため棺と共に其處を出發致しました。彼がこの悲しい仕事をしてゐる間に、家ではリラが母親に死にわかれた子供たちのために、あれやこれやと優しい心をくだいてゐたのであります。その時突然ドアをたたく音がしました。リラがあげると郵便配達夫が立つてをりました。リラは一通の手紙を受取りました。その手紙は、もう遠く旅立つてしまつた母からのでありました。

娘は小さな弟妹を床に就かせ、子供たちの床の傍にすわつて、蠟燭の光で死んだお母さんの最後の手紙を読みはじめました。あの遠い世界からおくられた手紙を開いた時には、彼女の心臓ははげしくうちふるへ、優しいもうかへつて來ないお母さんの最後の手紙を読んだ時には、涙は止めどなくほろををつたひました。しかし、手



紙の中には、未だ生きてゐるお母さんが、自分の長女にあて、次のやうに書いてゐたのであります。

——私の可愛い——娘よ。

遠い——あまり遠いので、お前には其處がどんな所だか想像もつかないやうな遠いお國から、お母さんはこの手紙をお前に送ります。しかし、身體はどんなに遠くはなれてゐても、私の心はやつぱりお前の所にゐるのです。私は今までお前のお母さんとして小さな娘のお前に手紙を書きおくつてゐましたが、今度はさうではありません。かしこい、いろ——心配してくれる妹に何か頼み事がある時に書くやうなつもりでお前にこの手紙を書きおくるので。私には一つの頼み事が、大事な——頼み事があるのです。私はお前の小さな心がこのお母さんの心持を理解してくれることも、その願ひがどんなに大きくてもお前が確に私の願を充たしてくれると云ふ



事も信じてゐます。私の心はお前を信頼し愛せずにはをられません。この手紙を書く時には、お母さんは眼に涙をためてお前の事を思つてゐるのです。どうか、小さな弟や妹のお母さんになつて下さい。面倒を見、教育して上げて下さい。お母さんはこんなに遠くお前たちからはなれてゐるのですもの。そして此處を立つてお前達の所へもどる事もできないのです。きついひついで、私はかへる事をとめられてゐるのです。私は、このひつきをよくきいて、私達と一緒にゐられ、そして仲よく抱き合ふ事のできる日まで忍耐強くまたなければなりません。その日が何時か來ると云ふ事は私もよく知つてゐます。然し、それまでは私もお前たちもおとなしく、正しく、くらしてまつてゐなければなりません。さうでないと、何もかもおまかせしなければならぬ偉大な主が私達が再び會ふと云ふかぎりのない喜をお許しにはならぬでせう。だから、私の大切な子よ。お前の小さな弟妹をよく面倒みてや



つて下さい。そしてみんなが良い子であるやうに注意して下さい。お前たちが本當に良い子であつたなら、お父さんと一緒にこの私のある國へ來る事ができるのでせう。このお話の國へ。

この國は、花と鳥との國、豊かに水のさゝめいてゐる國、美しい山々の國、何時も太陽の照りかゞやいてゐる國です。この國を一度見たことのあるものは二度と忘れることはできません。不思議な名も知らぬ花が道の傍に咲き亂れ、木々の重なり合つた葉が小道の上にたれ下つてゐます。そして木々の中では鳥が囀つてゐます。この國ではすべてのものがお祭をしてゐるやうです。花も木も鳥もそれに生命がないやうに見える岩さへもさうです。何故と云ふに、此處では鳥も花もみんなが顔を光に向けさへすれば美しい輝きの中に光りだすからです。

私はもうこのかゞやかしい國のどんなすみずみをもたづねてみました。大きな山



があつてその様子はうすぐらく、そしてその頂上の雲におほはれてゐる所も見ました。この國の前方ははてしない水によつて限られ、後方はむくむくとした山の頂にたゞよふ雲によつてかぎられ、その雲が空氣の境をさへもほのぐらく限つてゐるやうに見えます。この二つの景色があるので、この國は益々美しいに違ひない。私は自分が何時も女王様であると思つてゐる位幸福です。花たちは、私に楽しいことを用意してゐてくれるやうにみえます。木々は私に挨拶するために身をかがめてゐるやうにみえます。鳥は私の病氣で惱んでゐる心をよろこびで満たす爲に歌つてゐるやうに思へます。そして、あの黄金色の太陽は、やさしいほゝろみで、私を幸福にするためにかゝやいてくれてゐます。その幸福は今までに決して味つたことのない幸福でした。

この幸福は、いつかみんな一緒に一寸の間でなく、長い間こゝに來て住まうと云



ふ事をはつきり信じさせてくれました。太陽はもつと／＼美しくかどやくでせう。何故なれば、太陽の種々のかゝやきは、きつとお前達の目に反射するでせうから。鳥はもつと／＼楽しく囀るでせう。鳥の歌はお前たちの小さなたましひに反響を呼びおこすでせうから。木々はもつと／＼美しくお辭儀をするでせう。木々はきつとお前達を見てよろこぶでせうから。花たちはもつと／＼優しく匂ふでせう。花たちはお前達を本當によろこばさうと思つてお互に競争するでせうから。魚さへもどろいた顔をして深い海の底から、お前たちを見ようと思つて浮び上つて来るでせう。でも、その日が来るまでは天使のやうに正しく暮してまつてゐなければなりません。さうでないと、その日はきつと来ないでせうから。何時までも光りかゝやう不思議な日、大きな幸福と永久に變らぬ喜びとをもつてきてくれる日は……。

だから、私の大切な／＼子よ、私はお前にお願ひします。どうか善良で、そして



お前の小さな弟妹たちがいつも善い子であるやうに氣をつけて下さい。お母さんの代りになつて、自分の子供のやうに可愛がつて下さい。私はたくさんの祝福とキッスとを遠くはなれてゐる所からお前におくります。しつかりして、私がお母さんとしてまかした事をなしとげて下さい。さうすればきつとみんな一緒にくらす日が来るにちがひないから。きつといつまでも。

お前をキッスして抱く、遠くの母より――

リラは手紙を読み終つて、彼の女の小さな弟妹のベッドの上にはげしく泣き伏しました。そして夜のしらじら明ける頃、父がもう返事もしない唇をもつたお母さんをつれて歸つて来るまで忍耐ぶかく待ちつゝけたのでありました。

お父さんは子供たちと一緒にむせび泣きながら棺の傍にたちました。リラは、涙にくもつた眼で、長いこと婚禮の服につゝまれたお母さんをみつめてをりました。



——そしてあの永遠の太陽の光りかゞやく不思議に美しい國で、もう決して別れることなく、二人の子供たちと父と母と自分とがお互に心より愛し合つて共に抱き合ふ事のできる日が来るに違ひない——彼女はこの事を母親の落著いた幸福さうな顔からはつきりと知つたのであります。

## ごろつきぢいさん

### ——老司祭の語つたこと——

私が未だ神學生レガイトだつた頃、休暇中に三人の仲間と一緒に徒歩旅行をやつたことがありました。村と村との間は非常に距離があるので、ある教區にゆきつくには、随分歩かねばなりませんでした。

ごろつきぢいさん



道はバコニイの森の中をとほつてゐて、ひえびえとしてゐておまけに風がありました。私たちはマントにくるまつて一人づゝあとさきになつて山道を歩いてゆきました。人氣のない森と凍てつく風とは寒さを一層きびしくして、骨の髄に迄しみとほるやうでありました。私たちは深い森で掠奪にでかける三人の追剥ぎのやうにみえました。かうしてまる一日歩いて夕方やつと荒地の真中に立つてゐる屋根が朽ちくづれた居酒屋に行きつきました。居酒屋は恐しく大きな檜の木の下にちゝこまつて立つてゐました。その檜の木はどんなに天候が悪くても居酒屋を保護してゐたのです。そこについた時には、太陽は丁度山の彼方に沈み、ほこりだらけのランプがこの小さな料理屋の中を照らしてゐました。ランプの後には主人が坐つてゐて、けんさうに私たちをジロ／＼とながめました。

彼は穩やかにそして叮嚀に挨拶しました。私たちは、どうしてこゝへやつて來た



かを話し、どうか一晩とめてくれと熱心に頼みました。明朝は早くおきて旅行をついけようと思つてゐたのです。主人は椅子にかけのやうに目くばせし、それから長椅子の上で夜を過す事を許してくれました。私たちは、主人の好意に感謝し、短い祈禱の後、背囊から食料を取りだしました。パンを食べ終つて詩篇の一つをうたひそれからかたい木の長椅子の上にくまづ横たはりました。月が昇り、主人がランプを消すまで、私たちはまるで疲れきつた鳥のやうにちぢこまつて幅の狭い長椅子の上で眠りこんでゐたのです。夜中の十時頃でしたでせうか、居酒屋の窓がガタ／＼とゆれました。

『おい、主人。』

二三分は静でした。私たちは息を殺してゐました。そして耳を傾けてゐました。すると、又窓や戸をたたくガタ／＼云ふ音がきこえます。主人の部屋から足早の歩



みがきこえ、一條の光がきら／＼と輝きだし、そして蠟燭の光にてらされて主人があらはれました。彼は戸の所に急いで行つて、それをあけますと、一つの荒々しい人の姿が部屋の中に現れて主人の肩をゆすぶつて叫びました。

『今晚は、爺さん、また來たよ。ちよつくら話したくつてな。ハムと罐詰と一番上等の葡萄酒とをもつてきてくれ。それから牡鶏の首もしめてな。』

彼は私たちをチラツとながめて、手斧で私たちをさし示しました。

『此奴等は誰だい。』

『神學生レガートだよ。』

『學生か、それならゐてもいい。』

彼は戸の外に呼びかけて、仲間の者を順番に這入らせました。四人の若々しい青年、二人の老人、一人の年老つたごろつき、みんなで七人です。居酒屋の中は急に生き



くとして參りました。石油ランプはユラリく移動椅子の上でもえてゐます。葡萄酒の罎と一緒に蠟燭がはこばれ、陰氣な酒場を赤々とてらします。連中はテールを丸くかこんでたのしさうに飲み食ひ始めます。コップが廻され、だん／＼に酒場はさわがしくなつてまゐります。私たちはち／＼こまつたまゝ、このにぎやかな談話を注意してをりました。私は全身の勇氣を揮ひおこして、椅子の上におきあがり、この酒客たちを観察しだしたのです。彼等の一人は、私がさうしてながめてゐるのに氣がついて、叫びました。

『おい、そこでジロ／＼ながめてゐねえで、こつちへ來い。』

私がすゝみよると、彼等の荒つぱい眼付は一齊に私の方に向けられ、いろ／＼な事をきゝはじめました。

『お前は何と言ふ名だ。』

ごろつきぢいさん



私は自分の名を言ひました。

『どうしてこんなところへ来たんだ。』

私は落ちついて答へました。『私は神學生です。パパ（地名）へゆく所です。そこにゐる年老つた司祭を尋ねようと思つてゐます。』

『うん、そして、そこで何をするんだ。』ごろつきぢいさんがききました。

『日曜日に教會で説教をする筈になつてをります。』

みんなは口では言ひませんでした。目でもつて私に腰をおろすやうにすゝめ、食物や飲物をとつてくれて、あるものをみなわけてくれました。私は彼等の親切を非常に嬉しく感じましたが、友だちをそちのけにしておいては一口だつて旨く食べられはしません。

すると、ごろつきぢいさんが大聲でどなりました。『おい、若い、みんなくるが



いゝ。御馳走はみんなの物だ。食ひたいだけ食ひ、飲みたいだけ飲むがいゝ。俺たちや、えれえ旦那ぢやないけれど、旅人の腹をくちくする位のものはおもつてゐるなあ。お前たちだつてやつぱり放浪者ぢやねえか。お前たちが我々たちがつて何か外の目的をもつてゐるとしてもさ、それやさうきまつたんだから仕方がねえさ。一人はかうやつて生きる、他のものはあゝやつて生きる。さうしてみや、きめられた仕事をやつて満足せにやらんさ。』

さうしてゐる中に、仲間のものも起きだして、この放浪者たちの中にやつてきて、テーブルにつきました。葡萄酒や鶏肉はたくさんあるし、私たちはすつかり上氣嫌になりました。私たちは、異つた地方からやつてきて、たつた一本の木に泊りあはせてつかれをやすめてゐる嵐に出會つた二つの鳥の群のやうに、大きなテーブルを圍んですわりました。お腹が一杯になつて、蠟燭がずつと燃えさがつた頃、丁度真



夜中の一時頃でもあつたでせうか、かのごろつきぢいさんは又私にたづねはじめました。

『なあ、若いのが、一回説教すると司祭様から何ぼ貰ふんだね。』

私は正直に答へました。『さう、それは司祭によつてゐるね。五十クロイツツエル下さる方もあるし、又一グルデンも下さる方もある、中にはもつと澤山下さる方もあります。』

ごろつきぢいさんは糸のやうなひげをねちくりながら言ひました。

『たつたそれつきりかい。』

『さうです。』

『あんまり少なすぎるぢやねえか。仔豚一匹だつてもつとすらあ。』

しばらくだまつてゐたのち、ごろつきぢいさんは又尋ねました。



『そこで、お前はどんな事を説教しようちうんだね。』

『何處へ行つても少しちがふ話をしますけれども、聖書から數行とつて、それに私の考をつけ加へます。』

『それやいゝ考に違ひねえ。だが、パパでは何を説教しようてんだ。』

『パパは良い教區ですね。私は前々からゆきたいと思つてゐました。あすこでは失はれた羊と悔改めて歸つて來た息子とについて説教しようと思ひます。』

ごろつきぢいさんは、糸のやうなひげをいぢくりまはし、それから手斧をもてあそびました。

『もどつて來た羊、それやたしかにいゝや。それについちや、どんなことを説教するかね。』

『教のすゝめることだけ。』

ごろつきぢいさん



『よし、よし。』ごろつきぢいさんは言ひました。『一寸思つたんだが、今此處ですぐに説教できるなら、有難いんだが。こゝにや俺たちだけしかゐないが、説教壇の上で信者に向つて話してるやうにな、こんな旅籠屋の中でなしに、神様の家、教會でやるやうにな、椅子の上には俺たちみてえな浮浪人ぢやなくて、信心ぶかいおとなしい信者がすわつてゐるつもりでな。』

そこで私は答へました。『お望みならやつてもいいです。丁度教會でやるやうに祈禱で始めて祝福で終るやうにしませう。』

ごろつきぢいさんは、手斧を傍に置いて、私の肩をたゝき、私の目をじつと見つめながら言ひました。『さあ真中へ行つて祈つたり、説教したりしてくれ。心配するでねえぞ。金は拂つてやるからな。』

私は立ちあがつて手を合せて、丁度説教壇でやるやうに始めました。



『天に在す我等の父よ……』

先づちいさんが、それからみんなが脱帽し、そして半圓をなして私の周りに集りました。私は祈禱をし、それから一旦失はれて悔改めて歸つて來た息子に就て考をのべました。彼等は、渴望してゐる耳をかたむけて私の話にきゝ入り、一語もきゝのがしませんでした。話の終には私は又祈禱をしました。そして、父と子と聖靈の御名によつて彼等を祝福しました。

深い静けさが居酒屋の中を支配してをりました。外では夜が静まりかへつてをりました。このおごそかな静けさはかの老人によつてやぶられました。彼は眼に涙をためたまゝジーツと私をみつめてゐたのであります。彼は言ひました。

『若い、お前は好い事をしてくれたよ。こゝに俺の財布がある。これはお前にあげよう。お前がきれいな著物をくれたやうに、お前の話は身について本當にうれし



かつたよ。そりや、俺が生きてゐる間、満足を與へるだらう。お前も知つてゐる通り、放浪生活と云ふやつは長く續かねえもんでな。俺を、今まで誰も祝福してくれなかつたんだ。俺の母親さへも俺の戀人さへも俺を呪つたんだ。お前は俺を祝福してくれた、主なる神様につくられた最初の魂だ。ありがたう。だから、俺のもつてゐるものはみんなお前のものだよ。』

さう云つて彼は私の手をとつて力づよくふりました。他の浮浪者たちは、我々神學生同志でわけがよいと云つて、或者は銀貨を、或者は銀行紙幣を、テーブルの上になげました。そしてこのたのしい集ひは終わりました。

ランプと蠟燭とはもえ盡きて、浮浪者達は眠らうとして、長椅子に横たはつたり頭をテーブルにもたせかけたりしました。私たちも朝早く起きて道を急がねばならないので、すみの方に這入りこんで少しの間やすみました。



四時頃でしたでせうか、最初の鶏の聲をきいて私は仲間を起し、急いで旅装を調べました。そして出發の前にもう一度祈りました。ごろうつきぢいさんだけが、ひげの中で何かぶつ／＼言つてゐました——丁度私たちと一緒に祈つてゐるかのやうに。

## 殺人者の相續財産

監獄は、高い山の間に立つてゐて、小さな格子窓からは偉大なそして自由な自然が穀物をもう收穫できるまでにみのらせてゐる谷を覗く事ができた。その監獄の住人はと云へば、重い罰を宣告された囚人たちであつた。彼等の中には一人ならずこの重苦しい壁の中に一生涯とらはれてゐなければならぬ者がゐた。囚人たちの言葉をもつて云へば、この要塞の如き監獄は死の山でもあつた。何故かと云へば、彼等



の中こゝで生涯をとちてしまつたものが一人にとゞまらなかつたからである。

典獄はもう十年あまりガラギイと云ふ男がつとめつゝけてゐた。彼は天才的な刑法家であるばかりでなく、もの事を考へる心理學者でもあつた。彼自身もやはり四人にちがひなかつた。何故なれば、彼は全生涯獄の中でおくつたからである。だが、この四人たることに對しては彼の熱心に罪がある。と云ふのは、彼はあらゆる時間を仕事にさゝげてゐたのだ。娛樂はさつぱりやらないし、町へは時たまにしかでかけないし、時々一寸した旅行をする事があつても、それは自分自身のためにではなく、たつた一人の娘をよろこばせるためであつたのである。彼はやもめだつた。たつた一人の娘を目に入れてもいたくない程に可愛がり、死んだ妻に對していだいてゐた大きな愛は今娘へ移つてゐたのである。愛は不思議な力をもつ、人は時に魔力をもつてゐるとさへ云ふ事がある。こんなわけで、母なし子の小さなミラ



も、父親の愛でまつたく美しい若い娘になつて行つた。娘の外的な容貌とそれに相應しい内的の美しさと温かさは、かゝやかしかつた。で、彼女はたゞ單に住宅の方に住んでゐる者たちからばかりでなく、亦刑務所の全住人からも尊敬され愛されてゐたのである。

美しいミラは、しば／＼勞働をしてゐる囚人たちを訪れ、前掛から出して菓子や果物を御馳走してやつた。彼女を見るだけで、どうにも度しがたいやうな殺人漢のくちびるにも微笑がうかんだ。何故なれば、彼は良いものが自身に近づいてゐると云ふことを感じもし又感じないわけにゆかなかつたからである。

あるこんな様な機會におこつたことであつた。ミラが石の裂目で働いてゐる囚人を訪ねた時、ガラガラゆれさうな岩の間隙から蛇がミラの首におつこつた。ミラはおどろきのあまり叫ぶ事もできず、息がつまつてもう自分でも駄目だと信じてしま



つた。丁度この瞬間、仲間と一緒に近所に働いてゐた背の高い囚人が、この死の危険を見て大いそぎでとんできて、手際よく蛇をなげとばしてしまつたので蛇は少女に何等の危害をも加へるひまがなかつた。

ミラが驚きながら意識を取り戻して彼女の今まで本能的にとびてゐた大きな眼を再び見開いた時、彼女の前には背の高い囚人がたつてゐて、彼女をガラ／＼光る深みのある眼で優しさうに見て、笑ひながらたゞこれだけを言つた。

「なんでもないんですよ。一寸おどろかされたゞけですから。」さう言つて彼は重い靴を引きづつて地の上にごめいてゐる蛇の方に近づいてその頭をふみつぶした。

ミラは自分の状態に氣がつき、そして一體何がおこつたかすつかりはつきりとしたのであつた。彼女はこの救ひ手に對して手をのばしてそして言つた。

「なんでもない」と云ふ事がわかつたわ。あなたがたゝ私の生命を助けて下さつたの



ですもの。」

「それは大げさですよ。」

「大げさなんてないわ、本當の事よ。握れるやうに手を貸して下さいね。」

「私の手はよごれてゐます。さわつてはいけません。」

「あなたが労働してゐらつしやるからと云つて恥づかしがる筈はないわ。労働は誰もきたなくしないものよ。」

「今の労働が私の手をよごすと云ふんぢやありません。」

「私は過去の事なんか氣にしてゐません。たゞ現在のみをみて、それにお禮しよう  
と云ふんぢやありませんか。」

四人は低く腰をかゞめて、ミラの手に接吻した。

「あなた何て云ふの。」

殺人者の相續財産





「私に名前なんかありません。」

「では皆は何て呼ぶの。」

「第十六號囚。」

遠くの方から鐘の音がひびいてきた。囚人たちは勞働をやめて彼等の監房にもどつて行つた。ミラも家路についた。道々彼女はたえずあの興味ある顔した男のことを考へてゐた。「何故、彼はこゝにゐるのだらう。彼は過去の汚れの事を言つてゐたが、自分の魂にどんな罪の重荷を負つてゐるのだらう。」

さうかうしてゐる中に彼女は家についた。一寸着物を着更へると父親の所へ行つた。父親は開いた窓を前にしてゆれ椅子に坐つてシガーをふかしながら、廣い平原の不思議なパノラマを眺めてゐた。ミラは快い笑みをうかべて父親に近づき、そのひたひに接吻し、机の上にある母親の肖像のまはりに花を飾つた。父親はよろこば



しさうに彼女を見やつた。

「なんてお前はきれいなんだ、かわいゝミラや。」

少女は笑つた。

しかし、父はつゞけた。

「ねえ、お前、時々ね、誰かがお前をつれてつてしまつたらお父さんの全生涯は駄目になつてしまふと、する分頭をなやますんだよ。」

「お父さん心配しないで、誰も私をつれてゆきやしないわ。」

「ねえお前、人生と云ふものはなぞだからね。人生の糸がどんな風に織りなされるか、私たちは何にも知らないんだ。」

「よくお父さんはそんな事を仰言るのね、さうして又、人生は偶然のあつまりだなんてね。」



「人生と云ふものをまるはだかにしてしまつて、近くから眺めたならばそれが信ぜられるんだが。私が職業を通してさうやつてゐる様に。もしお前が、どんなに多くのこはされた世界が私たちの部屋のこの足の下にくさりにつながられて監禁されてゐるかを知つたならば、私の言ふ事がわかるのだからなあ。お前は、こゝで私が面倒をみてゐるものみんながごく悪い罪人であるなどとは信じてはいけない。その中には、人生の恐しい渦巻のためにそんな状態におしやられてしまつてゐる者もあるんだ。そんな状態から今こゝで目をさますのだ。」

ミラは生き／＼として叫んだ。

「さう／＼、本當にさうだわ。」

「私の言葉がお前をそんなによろこばすなんて、お前は何て云ふ子供だらうね。」

「私は子供ではないわ。でも私は、それがはつきり正しいとわかりさへすれば、限



りない喜びをあたへてくれる現象を信じてゐるのよ。」

「お前の言葉はどうもわからない。」

「お父さん、でもおわかりになれば、お父さんだつてきつと私の様に言ふわ。お父さんの監獄の中にゐる人は、みんなが罪人ではないのね。あの人たちの中には罪のない人たちもなやんでゐるわ。」

「さうく、時が來ればはつきりするのだ。でも何故それが面白いのだね。」

「だつて、私は外の人たちの苦しみをくるしんでゐる人や、外の人たちのためにつく事ができる人たちが、あの人たちの中にあることをしらべたり見たりしたのですもの。そしてさうなければならぬとすれば、生涯を賭にしたやうなものね。」

「うん、そんな事はよくあるんだ。さう云ふ連中は互に一種獨特な方法で愛しもうするし助け合ひもする。今はみんなの中であつた一人だけゐる。いつも他のものから



はなれて立つてゐて、まったく孤獨なとどされた魂をもつてゐるのだ。あの男は私にとつても一つの謎だ。罪人第十六號囚がそれなんだ。」

「ちがひます、あの人は罪人ではありません。」

「でもね、可愛い、ミラや。お前が何を知るものか。あの男はとてもおそろしい罪でこゝへ來たのだよ。あの男はね、自分の愛人の夫の金をうばひとるために毒をもつたのだ。それから愛人をも惡がしくくんだやり方で殺害しようとしたのだよ。そこで、あの男の愛人がその事を通告したのでこゝに入れられたのだ。」

「優しい聲と青い眼をもつたあの人が、本當の人殺しだなんて筈がないわ。お父さん。」

「でもね、お前、私は裁判所の判決を又判決する權利をもつてゐないのだよ。たゞそれを守るだけだ。」



「そしてこの不幸な人は一生涯こゝにとらはれてゐるのでせうか。」

「可愛い、子や、私は希蹟を行ふことができる救主ではないのだからね。あの人を自由にしてやることはできないのだよ。」

この瞬間典獄の部屋の戸がノックされた。それは執事が小づくりなふとつた男をつれてきたのだつた。男は監獄で働きたいといふのであつた。

「君の名前は。」

きゝなれぬ發音で彼は答へた。

「シユウエルターと申します。」

「給料はあなたの前任者よりも多く差しあげることはできません。それに仕事はもつとしなければならぬのです。何しろ監獄はひどく節約するやうにいひつかつてゐるのでしてね。で、あなたは多分さうしたいでせうが、おかへりになる事ができ



る今、その事を申してをきます。」

シュウエルターはひくゝひざをかゝめて禮をしながらどもつて答へた。

「わるい條件……みづめな生活……私はそれに服ませう。」

新しく來た男が地位を占めてから一箇月の月日がすぎ去つた。彼は新しい仕事をすつかりおぼえこんで、誰も彼も彼が來てくれたことを本當によるこんだ。彼はすつかり信賴されて、この監獄の囚人の間を全く自由にたちまはることができた。九月の日のことであつた。囚人たちが休息してゐる時、シュウエルターは、一人の囚人の助けをかりて、嵐でまがつてしまつた塔の上のにはとりをまつすぐになほしたいと願つた。許しがでたので、彼は囚人の中を見渡し、この目的のために一寸しらべてみてから、第十六號囚をえらんだ。彼は大きな梯子、細引、ハンマー、のこぎりをさがしださせ、この四人に自分についてくるやうに目くばせした。



塔は監獄の裏面にボツネンと立つてゐた。下部の方には武器庫があり、地下室には死體室があり、その外の場合は全く用ゐられてゐなかつた。シュウエルターは、屋根へとみちびく螺旋狀階段へゆく戸を開き、囚人にさきにゆくやうに目くばせした。しかし彼は背後の戸をしめてしまつたのである。彼等が屋根の飾縁の所に來た時、囚人は煙突の銅のにはとりに梯子をかけた。シュウエルターは彼の勞働者に向つて言つた。

「うん、ショレルだ、大きにありがたう。」

囚人はふりむいた。

「私の名を知つてゐるあなたは誰ですか。」

「君の友達ですよ。それに君の救ひ手さ。」

「あなたはこゝで一體何をなさらうと云ふのですか。」



「君に自由をとりもどしてやらうと思つてきたのですよ。」

「私の自由ですつて。」

「さうですとも、それから私は君になほ當然つぐべきあの莫大なお金をもかへしてあげようと思ふ。」

囚人は笑ひだした。

「あなたはまるで空想的な事を仰言る。まぼろしを追つてゐらつしやるんだ。」

「私の云ふ事に注意されないんですか。私は君が信じてゐるよりもずっと／＼考へてゐるんですよ。それに今此時、君が了解できるよりもっと／＼たくさん仕事のできる立場にあるんですよ。あまり時間がありませんから、だまつてきいてゐて下さい。大切な事だけお話しませう。君の場合はこんな風なのです。君は一人の女のために殺人を行ひ、そしてその同じ女についてもう一つの殺人を計畫するに至つ



たと。」

ショレルは手で否定しつつ、うなづいた。

「殺人したのではないと云ふ事を君が言ひたがつてゐることは私にはよくわかる。たしかに君は正しい。私はそれを信じてゐる。君が適法的に判決を下されてしまつたのでは、どうにも仕方がないし、訴訟のやりなほしも又考へられない。と云ふのは我々は君の辯護に役立つ他の事實も證據もみつからないと云ふわけなんでね。この半年と云ふもの、この事件にのみ従事してゐると云ふことは、君も信じられやう。君の判決は法律的なものでもう更へる事はできない。しかし、それは結局本質的な問題ではないし、こゝでは問題にすべきでもないのです。」

「だが一寸ごめんなさい。私が一生涯監獄におくるやうに判決されたと云ふ事は、あなたにとつて本質的なことでないとすれば、何をあなたが本質的なこととするか



私にはわかりません。それに「一體あなたの言葉をどううけとつたかもわからない。」  
「さうせかないで下さい。お互に益々わからなくなりますから。私が本質的なこと  
だけ云ふのだとは前にも言つてをきました。そしてあなたがアメリカで死んだ親類  
から三百萬ドルをうけついだと云ふことは本質的なことなんです。この事に關する  
すべての書類は今こゝにもつてゐます。どうかごらんすつて下さい。」

シヨレルは熱氣を帶んだ手で書類を受けとり、金持のペンシルバニアの鑛山王が  
財産の一部を彼に遺したことを涙ながらに讀んだ。それから彼は書類をたゞんでか  
へした。

「私にとつては價值なきものですよ。」

「どうしてそんな事を仰言るのです。あなたはこの委任狀に署名をするより外の事  
はしなくてもいいのです。その他の事は私に委して下さい。」



「だが、あなた、どうしてこの死の城からでられますか。」

「それは私の仕事ですよ。」さう云つて彼は萬年筆をとりだしてシヨレルに委任狀をとりだして見せた。

委任狀にはかう書いてありました。——シユウエルター則ち有名なる辯護士ユリウス・ドゥンキイは、彼が數百萬金を調達し囚人を恐るべき位置より自由にせる時には、報酬として百萬ドルを受くるものなり。

シヨレルが書類に署名し、辯護士はそれをしまひこむと又云つた。

「我々が大西洋の彼方からあなたの金をうけとりあなたの名で英蘭銀行へ安全に保管したなら、あなたは解放されます。しかし、解放されるには何はともあれ、あなたがこの病院で死ななければなりません。あなたの死は公に證明されるでせう。そしてあなたが死んで二時間してあなたを埋める爲に家族の者がたづねてあると云



ふ口實でこゝからあなたをつれだませう。そして、あらかじめきめた場所で又生きかへらせませうね。おわかりでせうね。あなたの死はたゞみせかけなのですよ。そのみせかけの死は、アメリカの醫者が試験して好結果を得た方法で行ふでせう。私が言はねばならなかつたのはこの事です。どうかおちついて忍耐強くして下さい。今我々は仕事の上の仲間なのですし、あなたの方の一寸した不注意があなた自身のためでなく、私の大金までふいにしてしまふのですからね。ではだまつてゐて下さい。」

さう云つてシユウエルターと第十六號囚は塔から降りて來て、銅のにはとりはこゝにある道具ではなほされぬ、いかけ屋が來なければならぬと典獄に言つた。

四ヶ月がつらい／＼四ヶ月がその時からすぎ去つた。あはれなシヨレルにはあの男がいよ／＼仕事にかゝる日がくるまで、毎日が永遠の如く思はれた。それは春の



初めだつた。第十六號囚が朝九時に死んだと云ふしらせが典獄の所へきた。醫者は彼は全く硬くなつてゐると確言した。この報告が來た時、そばにゐたミラは、彼女の善い友だちのかなしい最後にいたく心をうごかされて、彼女の部屋にあつた花をいつか自分の生命を助けた死者の手ににぎらしてくれるやうにシュウエルターに頼んだ。それは鈴蘭とアネモネであつた。シュウエルターはこのねがひをきいて二つの花をかたくなつた、死人の手に押しこんでやつた。それから彼は自分の仕事にとりかゝつた。彼は監獄の中では完全に信頼されてゐたので、どんな方面に於ても準備することができたのである。彼はショレルを木の棺の中に入れさせ死體室にこばせた。十二時になつて、死者を埋めるために家族が彼をたづねてゐると云ふ速達便を示した。この事について主事者から許可をうけると、彼は百姓車をやつて死者をはこびださせ、死者と共に出發した。丁度一時間も道にあつたと思はれる



頃、駛者の後にゐたシエウエルターは、棺のそばにゐて、シヨレルが眼をさましたし、た氣配をはつきり感じた。彼はそこで、駛者に近所にある村の墓地にゆく様に命じ、からになつてゐる死體置場の前に棺をもつてゆく様に言つた。そして彼は此百姓に金を支拂つて歸らせ、自分で親族を迎へにゆく爲に村にゆく、そしてそれよりさきの運搬はこの人たちがやるからと云つた。駛者が行つてしまふと、彼はさびしい道を通つて、死體置場の所へもどつて來て、棺を開いて友を抱きおこした。シヨレルは除々に意識を回復した。彼の最初の一瞥は、自分の手の中にある花にそゝがれた。

「鈴蘭とアネモネだ。誰がくれたのだらう。」

シエウエルターは説明した。

「これはあのきれいな少女のお別れですよ。」



「何故あれは僕にわかれをつげたんだらう。僕はまだ死にやしないのに。」

「彼女にとつてはあなたは死んでゐる。」と答へがあつた。シヨレルは長いこと花をながめてゐてそしてひとりつぶやいた。

「生命とは何てはかりがたいものだらう。」さう云つて彼は鈴蘭とアネモネを胸にさした。略午後二時頃だつた。この地方には人影がなかつた。野良には人がでゐなかつた。死體置場には使はれてない手斧があつたので、それを使つてシヨレルは棺をこなごなにくだいてしまつて、穴の中にうめて土をかぶせてしまつた。シヨレルはまだ囚人服をきてゐたので、まだそこからでてゆくわけにはゆかなかつた。

夕方近くになつて、彼等は行商が道をやつてくるのをみとめた。シユウエルタは墓地をわざ／＼まはり道して、遠くから來た様に見せかけて、その男に話しかけた。彼は行商に包の中に何があるのか尋ねた。答は「着物」だつた。少しばかりい



ちつて彼は一枚の着物地を除いて、包み布も一緒に包ごと買つてしまつた。そしてすつととほまはりをしてシヨレルの所にもどつて來た。シヨレルは大いそぎで着物を着て、囚人服を包の中にしまひこみ、暗にまぎれかくれ場所をでて、徒歩で町に向つた。シユウエルターは充分金をもつてゐた。町には停車場があつて、半時間の中に出發する事が出來、英國への道は自由だつた。シユウエルターはその日の中に監獄へもどつたが、數週後に同僚と喧嘩してとう／＼位置を捨て、しまつた。

X X X

それから二年の年月がすぎ去つた。シヨレルは、彼の百萬圓を以て、英國の第一階級の人々の中にまぢつて、偉大な役割を演じてゐた。彼は大金持として惜しみなく金をだした。しかし享樂のためばかりでなく、貧乏人のためにもだした。で、ジヨン・ラグリイと云へば——當時人は彼をさう呼んでゐたが——英國の社會の最も



錯々たる群像の一人であつたのである。彼はする分旅行した。殊に大陸に行つた。冬の大部分はリヴィエラで過した。何故かと云ふと、彼は海と日光とを讚美してゐたのだから。丁度、この時のこと、ガラギイは病氣になつて、醫者は嚴しい冬の間、彼を良い氣候の所におくつたのである。ミラは大へん心配して彼の父を介抱しつゝ、リヴィエラまでお伴してきた。ガラギイの好きな仕事はと云へば、娘や知人と一緒に岸邊に坐つてその時々投ぜられる問題を討議する事だつた。ある午前のこと、彼は一人の土地の人と殊に日本人の間にひろまつてゐる信仰、我々は常に靈によつてとりまかれてゐると云ふ信仰は本當かどうかと云ふことを討議してゐた。その靈は通常見る事はできない。が、彼等自ら何か不思議な姿を借りて我々の面前にあらはれる時は別なのである。

ミラはため息をついて考へた。



「みんな不思議なことがたくさんあると云ひますね。それは本當でせうか。」

ガラギイはこの事を馬鹿げた事だと言つて斥けた。彼は自分の意見にしたがへば靈などと云ふものはないのだと説明した。彼は不思議も信じなかつたし、死者が新しい生命に於て誰かに現はれるなどと云ふことを信じてゐなかつた。たかゞそれは神經病者か神經過敏の人間の空想にあらはれる位のものであると言つた。丁度この瞬間彼等の面前に至極優雅な男がとほりすぎた。ガラギイは不思議な撃動にとらはれた様に信じた。彼は全身をわな／＼とふるはしはじめ、第十六號囚！ と叫ばぬためには大きな克己を要したのであつた。

ミラもやはり、今こゝを通りすぎた男は知らない男ではない、どこかで見た事のある男だ、彼の舉動や頭の様子や深く／＼ぼんだ眼はたしかに知つてゐる、彼の顔はいつか囚人服を着てゐた時見たその顔だ、その姿は彼女の生命を救つた姿と寸分ち



がはない、その體付は彼女の面倒を見た人と同じだと云ふ感情をもつたのである。

この事を彼女は誓つてもよかつた。彼女は思はず知らず嘆息をもらし、眼を喜ばしさうに輝かした。

「ほら、不思議ぢやありませんか。」

ガラギイの頭は、今の謎みたいな男は誰だかきゝたゝすまでは、とてもやすまらな程に混亂してゐた。彼はその男が英國の大富豪である事をおどろいてきいた。

三日たつてからカデノは、外國人に敬意を表するため舞踏會を開いた。ガラギイも娘と一緒によろこんででかけた。ミラはばら色の絹の着物を着、頭には眞珠の飾をつけ、胸には鈴蘭の花束をいだいてゐた。舞踏會は贅をつくした輝きの中に浮動してゐた。上品な社會にすむきらびやかな人たちがピカ／＼する床の上にゆらめいてゐた。音樂が奏せられた。音樂は、人間の心を誘惑して電氣にかけた様にしてし



まふ舞踏の曲を奏したので、おどりはねるよろこばしい人たちも、無關心な人をも一緒に誘惑してしまふのであつた。ミラも踊つた。彼女はその美しさをもつて外國人の心さへも征服してしまひ、その優美さをもつて魅してしまつた。彼女は次々に紳士方に紹介され、自分が祝はれてゐる者の様によろこばしく踊つた。突然一人の高い姿があらはれ、彼女の方に眞直に向つて來て、その側にたちどまつた。そして彼女のまはりに立つてゐる一人に紹介してくれるやうに願つた。「ジョン・ラグライ卿」と外國名がひいた。ミラとこの外國人の眼は互に見交した。音楽はワルツを奏しだした。

「ひとつワルツをおねがひしていただけますか。」彼はフランス語でたづねた。ミラは機械的に彼に腕をのばし部屋その他の片隅におどつて行つた。そこには大きなバルコンがあつて、そこからは海をながめる事ができた。海は春の宵の日光の中にひ



たつてゐた。そしてそのひそやかなため息はバルコンにまできこえてくるのであつた。こゝで二人は立ちどまつた。下の方では音楽はなほひきつゞき奏せられてゐたが、彼女はもはやそれをきいてはゐなかつたのである。

ラグリーは最初に話した。

「鈴蘭とアネモネは私の大好きな花です。」

ミラはしづかに答へた。

「あなたがお好きなのですつて。」

「えゝ、それは私の夢の花なのです。いつかふかく眠つた時、この二つの花と一しよに眼をさました事を私はいつも信じてゐます。」

ミラは身によろめきを感じて、本能的に相手の腕の中にからみついた。

「どういたしました。」



「すつかり目まひがして。」

「恐ろしいですか。」

「いゝえ。」

「信じて下さいますか。」

「えゝ。」

「花はあざむきませんでした。」

「花は決してあざむきません。」

ラグリイは少女をバルコンの欄につれて行つて、そこで自分の方にひきよせた。

「もしおよろしかつたら、私と一緒に新世界に来て下さいませんか。そこは鈴蘭とアネモネが咲いてゐるのです。いつしよに来てくれませんか。」

答はなかつた。しかし少女は踊相手の腕の中に身をしづめた。小さな鈴蘭が男の



足もとにおちた。

一週間後、ラグリイは少女に求婚した。ガラギイは、初の中はたつた一人の娘が外國人の妻になることはきかうとしなかつた。が少女は愛する人を捨てるなら、むしろ死んだ方が良いと云つて強い信念をもつて説いたので、娘のえらんだやうにする様に父親も強ひられてしまつた。

父親は、全く瓜二つの男が自分の所にゐたと云ふことをしばらく暗示した。しかしこの暗示に對してラグリイは自分は決して殺人なんかしたことはないと思ふのが常であつた。ガラギイはそれ以上たつて事情に深入りしようとは思はなかつた。

結婚式はロンドンであげられた。若夫婦は、夫の所有地のあるカルフォルニアに旅行した。そこは常春の國であり、鈴蘭とアネモネの永遠にさきむれる國である。ガラギイは、自分の故郷、囚人の城、自分の職業にもどつて行つた。彼は病氣だつ



たにも拘はらず、隠退しようとは思はなかつた。ミラがゐない今となつては、仕事より外には何の慰めものこつてゐなかつたからである。

ガラギイが事務室に入ると机上に一通の電報が來てゐた。それは何處か大洋の真中からうたれた無線電信でこれだけが書いてあつた。

「私は殺人なんか決してしない。しかし第十六號囚は私。」

ガラギイは泣いた。

「あの男は私をだました。殺人なんかしないと云つたのはうそだ。あの男は俺を殺してしまつた。俺からミラを、たつた一つのたからを、大切な子をもつて行つてしまつたのではないか。」



## 魔の車輪

修道女ヘレーネは、二十年といふ年月を精神病患者の看護にさゝげてきた。彼女  
はみがかれた溫雅な心を以て破壊された精神系統のもつ狂的觀念、歪んだ思想連鎖  
又、脱線などに應じてゆくことができた。そして病人の精神生活に適應しつゝ、病  
める精神系統を再び健康な、常軌な、又日常生活をつゞけてゆける状態にしてやら  
うと試みてゐたのである。

姉妹ヘレーネは、心のよい人で、本當の天使の様な人であつた。そして、彼女に  
とつては、病人の面倒を見、此を救ひ、そして病人の健康を回復してやることが、  
たゞ一つの目的であり、生涯の仕事なのである。彼女は彼女の保護してゐる者を愛  
するが故に、その生涯のために献身して、希望をすて、困難な事にしたがひ、自分



の本來の生活におさらばをつげ得たのである。精神病治療の範圍では、彼女は信ぜられぬ程多くの經驗をつんでゐたので、肩書のついた醫者よりもずっと多くの事を知つてゐた。醫者たちは、患者を時折、それも數分間みるだけであつたが、彼女はたえず病人のそばにゐたし、すべての事に氣をくばり、すべての事を注意し、病人の周圍におこること、又病人の内心に生じつゝあるすべての事柄をみな知つてゐたのである。

彼女は面白い女性であつた。自身の存在の利害をば、全く理想と仕事に従屬させてゐるかの「超人」の一人であつた。良い氣分であまりいそがしくない時には、彼女は好んで醫學全集よりも面白い彼女の經驗を語つてくれた。その一語一語は童話的轉回をもつてゐて、そこには小説よりもはるかに面白い實生活がちみでてゐる。



——姉妹ヘレーネの想ひ出の一つ——

あなたの方の様に平坦な規則正しい生活をおくつてゐらつしやる方々は、精神病に如何に多くの型、如何に多くの陰影があるかを想像してごらんになることはできません。精神病患者の空想の花は、春の牧場の輝かしい色よりも、美しく豊かなものでございます。私の面倒見た人の中に、面白い経歴をもつた一人の大商人がをりました。彼の生活はさんざんにはしるくせに、いつも初めに出發した個所にもどつて行つてしまふ本當の魔の車輪のえがく圓の様なものでありました。この人は陶器業に従事してゐて、利巧者として通つてをりました。彼は結局目まひをおこす様な経歴をたどるために、非常に早くから仕事を初めました。最初のころ、彼はお客に直接接したり、品物を自分で註文者の住居へもつて行つたりしたのですが、それについて決して恥づかしがる様なことはございませんでした。彼は商人でしたが、人の所



に仕へてゐる雇人であつたのでした。彼が賣手をやとふことが出来る様になり、それから従僕をやとひ得るやうになり、それからもつと大きな店をもち、又女勘定係をやとひ、それから頗る大きな店をもち、帳簿係をやとひ、一つの支店をもち、又一つ支店をもち、それから更にそんな風にして次第／＼に遂に彼の力づよい事業が全く擴張せられる様になるまでには、随分長いことかゝつたのです。

彼にとつて一番うれしかつたことは、自分が最初に仕事を始めたあの店を買ひもどして、想ひ出のためにそこに支店を設けたことでありました。こゝまではあたり前な経歴でございます。しかしそれからこのお利巧さんの理性をうばつた激動がやつてまゐつたわけでございます。彼は一人の友人のすゝめにしたがつて、相場に手を出して、たつた一日の中に彼がくるしいつとめをして得た全財産よりもはるかにはるかに莫大な金額を得ました。この事件は、彼を次の様な有様にしてしまつたの



でございます。彼は眠ることもできなければ、坐つてゐることもできず、まる一日部屋の中をあちこちあるきまはり、鏡がありさへすればその前に立つて、丁度「うだ、こんな人間が世界にもう一人あるかね。ほかの奴は比べてみれば小人の様なものさ。此奴は最も偉い人間だ。世界の主人だ。」とでも言ひたさうにして好い氣持になつて、自身をながめてゐるのであります。彼が再び人中にでた時には、全く別人の様に變つてゐたのでございます。もう以前の様な謙遜な男ではなくもつと立派な存在、世界の主人ナポレオンでありました。

小さな實業家は突如として國語を忘れてしまひ、たゞフランス語をのみ語る様になりました。人を壓する様な格好をして彼は人々の間を歩きまはり、命令的に事をさせました。そして殿様の様な生活をはじめ、彼と語りたいと思ふ者は誰でも、まづ最初に謁見に就て伺はねばならないと云ふわけだつたのでございます。



親族たちが彼を私達の療養院につれてきた時には、丁度こんな調子でございました。一人の従兄が大へん適切に彼の特徴をのべました。「あの人は突然自分の上におちかゝつてきた大財産をもちこたへてゆくことができなかったのです。その財産は彼を投げたほしてしまつたのです。」彼は私の看護に委され、私は彼をみとることになりました。私が彼に自己紹介した時に、彼は威儀を正した身振で私の言ふことはわかつたと目でしめし、それから退く様に命令しました。彼は不思議な現象で全く變つてしまつて、彼の本來の我と云ふものをぬぎすてゝをりました。彼は自分がナポレオンであると云ふことを全く岩の様に固く信じてをりました。そしてその事のために氣嫌がよくて私にめぐみをたれようと欲してゐた時には、セント・ヘレナにゐる自分の所へ私をよびよせ、私に恩恵を保證したりしました。しばしば、彼はサナトリウムの大社交室にやつてきて他の病人と共にサークルをもちました。そこで



病人たちを自分の臣下であると想像して、大形な殿様の様な身振と注意を以て召し使つたのでございます。

そのうちに、社交室で彼が一人の若い英國人と出會す様なことになつたのでございます。この英國人と云ふのは、底なしの浪費癖によつて全家族を殆んど破滅におとし入れたために、こゝにつれてこられたのでありました。この人は、自分はプリンス・オブ・ウエールスだと思つてゐたのです。そこで悲喜劇がおこりました。ナポレオンは談話室でプリンス・オブ・ウエールスに、自分に對して適當な挨拶をかき、あまつさへサークルに加はらなかつたと言つてえらい權幕で衝突しました。そこで大さわぎがまきおこりました。ナポレオンはプリンス・オブ・ウエールスをもう見ようとしません。「おまけに英國人が俺にどんなことをしたか、俺はちつとも忘れないぞ」と彼は申しました。そしてしばらく謁見を中止いたしました。



醫者は彼の狂的觀念をなほすために、あらゆる應用し得る限りの方法にしたがつて種々雑多な試みをなしたのでございました。しかし、すべての努力は何の甲斐もありませんでした。なぜならこのお利巧さんは、自分がナボレオンであると云ふ腦髓の中に集くつてゐる牢固たる觀念に頑固にしがみついてゐたからです。そしてこのことのために彼はすべてのもの、彼の財産さへも犠牲にしました。診断は、異論なく、數日間に全くおとぎ噺的な財産を得たために、このお利巧さんの精神的均衡が失はれ、このよろこび、この突然の精神的熱中は、この人を他の極端へとおとし入れてしまつたと云ふことに確定致しました。最も簡単な治療方法は、もし可能であるとすれば、病人に一つの新しい、しかも全く力強い精神的危機を経験させ、所謂病人の腦髓を再び「ゆりもどす」ことであつたのでせうが、現代醫學はまだそれをするまでになつてをりません。



あらゆる醫學上の相談と試みがつとも不可能だと思はれる手段をもつてさへもなされましたが、それは益なくをはり、お利巧さんは狂的觀念から一分たりともはなれませんでした。しかし人間がとても成就し得ないことを生活自身が自分でなしとげるものでございます。この生活と云ふものは、彼の秘密な能力にしたがつて、すべてのものゝ上に權力を及ぼします。そして生活がこのお利巧さんをいやしたのです。生活は彼に想像でつくりあげたナポレオンのからをぬがせ、自分の方に彼をひきもどしたのでした。それは、全くドイツが戦争に敗れ、ドイツのマルクが突如として下りはじめたことに外ならなかつたのでございます。彼が現金で貯蓄してゐた財産は日々にとける様に減つて行つて、とうとう彼は銀行から次の様な書付を受けとる様になつたのです。

「拜啓、御通知申しあげ候。貴下が一九一三年本銀行に拂込まれたる五億マルク



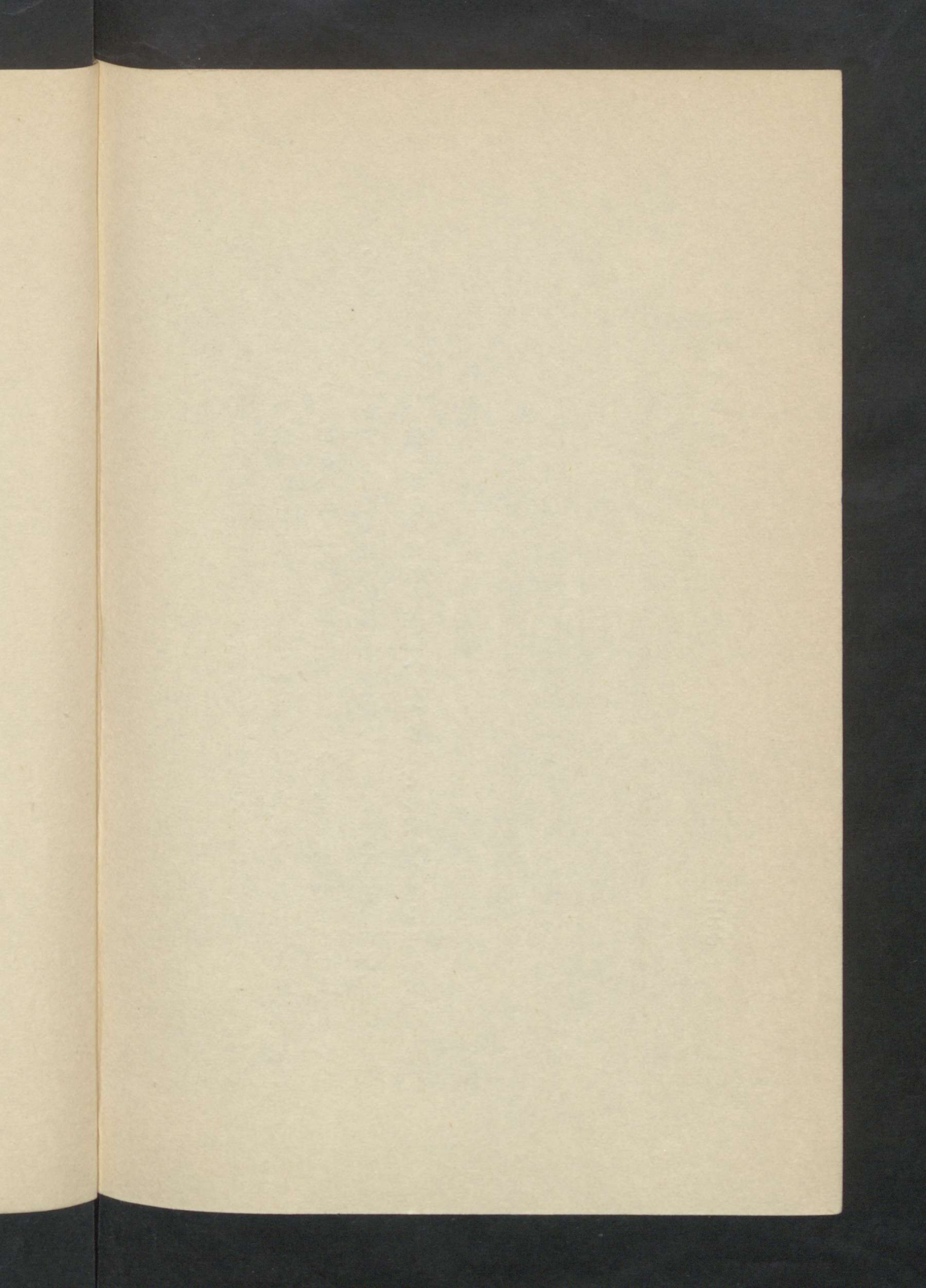
は、もはや取扱手数料を支拂ふにたらず、よつてやむなく、貴下の貯金簿を廢棄し清算のため同封の郵券をもつて残れる二千萬マルクを計上致し候。」

手紙にはだいたいこんな事が書いてありました。このお利巧さんは、いまだにナポレオンの様な姿勢で手紙を受けとりました。しかし手紙をしまひまでよみ終つた時、彼は再び小さなこせ／＼した實務家になつてゐたのでございます。やはり心持ちのよい安樂椅子にこしかけてはをりましたが、この安樂椅子が彼の下でもえてゐると云ふこともこの椅子の上にはもはや何一つとしてもとめることができないと云ふ事も感じたのでございます。彼の精神系統は生活からして健康を回復するため、彼の病氣のオルガニスムが必要としてゐるかの激動を受けたのでした。彼は健康になりましたが、それと同時に、乞食の様な身分になつたのでした。彼はもつてゐるものをみな賣つて、その賣上高であの最初の小さな陶器の店を買ひもどしまし



た。その家で彼は自分の經歷をはじめたのでしたが、その當時彼は本當に幸福でした。何故なれば、彼はほこらしげな生活の喜びや愛や未來への希望によつて、充たされてゐたからでございました。それ故彼は其處へもどつたのでございます。かういでゆくことのできぬ財産は彼を駄目にし氣違ひにしまひましたが、貧乏は再び彼に翼を貸し、彼を救ひ、又彼を生活へとつれもどしたのであります。







— 散文詩 —

ロクサン

ヘゲデユス 作  
蘆谷瑞世 譯

彼女はかはい、少女だった。髪はディアボロ型で、額の上で左右にわけて耳のところでまげを結つてゐた。彼女は、パツチリしたすゞしい眼、高い額、弓形の眉毛、深い眼差、朗かな氣質、人の氣持を知るすぐれた力の持主だった。

ロクサン、それが彼女の少女時代の名であつた。行き會つた時によく私は彼女をからかつた。

——ロクサンはかあい、別びんさんだね。大へんお行儀がよくて愛嬌者だね。すると罪のない顔をして彼女はたづねた。

ロクサン



——ほんとうにさう思つてて？

——さうともさ、お前さんは朝露にぬれた春の花、眠りからめさめた春だものね。  
彼女は笑つた。

——あなたに好かれてうれしいわ。

——お黙り——私は言つた——そんな事言へば話が眞面目になるかも知れないよ。  
笑みを浮べて彼女は答へる。

——さうなつても悪くはないわ。

そのうち彼女は私の眼界から消え失せた。彼女がどうなつたかさっぱり聞かなくなつたが、外國に行つた事だけは知つてゐた。時が漸々に彼女の姿を拭ひ去つて、歲月は流れて行つた。

ある日のこと突然の夕立に電車待合所にかげこむと、氣品のある美しい婦人が電



車を待つてゐた。私は彼女が注意を集中させてヂツと私を観察してゐるのに氣がついた。それから彼女はほゝえんだ様にも思はれた。私もたえずたかまる興味を持つて彼女を観察し始めたが、彼女がいつたい誰であるのかわからなかつた。それでゐながらその全存在は私に既知のもの、様であり、特にそのあたゝかい眼差にはおぼえがある様な氣がした。突然、眼と眼がバツタリ見合つた時、秘密の扉が開かれた様に私の内心は激しい感動を感じた。

——ロクサン！

と叫んで彼女の側に歩みよれば、少しキツとなつて彼女は言つた。

——わたしとお判りになる迄に、そんなにながいことおかゝりになつたのね？

——わるく思ひなされるな、愛するロクサンよ。あれから随分たつてゐるではありませんか。



——私そんなに變つて！

——變りましたとも。それも大變綺麗にかはりましたね！ 何て言つたら良いかな！ 淑女にそれも外國の淑女に、すっかりリファインされたフランスの淑女になりました。

——それがあなたのお好みですか？

——フランスの淑女達があなたの様に美しい場合に限ります。

——おゝ又始まつた！ あなたは七八年前にゐらした場所にまだゐらつしやる！  
——謝ります、ロクサンよ。又始めるのではない。たゞ續けるだけです。それも七八年前に止めた所から續けるのです。

その間に夕立は漸々に和らいでとうとう止んだ。電車には乗らないで、私達は街に散歩に出た。あれやこれや話し合ひながら、お互に顔を覗き合つたり、眼差を互



に捕へようとしたり、眼と眼で心を察したりした。

——ロクサンよ。私に氣がありますか？

——それは前からさうですわ。何故あの時さう訊いて下さらなかったの？

——あの時はまだ早すぎました。あなたはそんな年頃ではなかった。時が熟するのが何よりでしてね。

とうとう彼女の家に着いた。彼女は別れを告げたが、次の日に公園に來ようと約束した。そして彼女は來た。私たちは山にのぼつて、森を逍遙<sup>さまよ</sup>ひ、秘密に充ちた静けさを享樂<sup>たのし</sup>んだ。花の間を縫つて、草地の縁をたどつて、森の繁みを分けて、牧場に沿つて、山腹をわたつて歩くと、どこへ行つても嚴かな静寂が私たちを取りかこんだ。

私が始めてお茶によばれて彼女の家に行つた時、私は彼女と並んでソファにこし



かけた。彼女を抱くには一寸腕を伸ばせばよかつた。私は彼女の眼に、口に、額に接吻した。

彼女は小聲で訊いた。

——あなたは幸福ですの！

——何だか夢みてゐる様です。——私は言つた——おわかりですか。私達は部屋の中にあるのではなくて、森の鈴蘭の間を歩んでゐる様です。今はもう私たちだけではない。第三者のフェアリイが私達と一緒にゐます。フェアリイは私たちに先立つて歩いてゆきます。そして魔法の杖をもつて導いてくれます。『私についておいで！』私はあなたの手を取つて、そして黙つてフェアリイのあとに續く。葉の冠をいくつもいくつもくゞつてゆくと、陽に照らされた氣持の良い明るい場所につく。私たちの眼の前には王座がある。雁來紅が切株にからみついてゐる。その上に常春藤



の天蓋があつて、榆の枝をひつばるので、榆の葉は王座を覆ふ様になる。四本のポ  
プラが番兵の様に側に立つてゐる。その葉の中では快い秘密が囁かれてゐる。風の  
言葉は私だけが理解する。快い言葉で、優しく心に向つて話しかける。そこへ二人  
の可愛い小鬼がでてきて王座にみちびいてくれるので、私たちは王座にすわる。愛  
の女神がお供をたくさん従へてあらはれる。お供は木々の間から姿をあらはして、  
私たちの周囲まわりをぐるりと取圍む。音楽が森の深みにひびく。鳥が一齊にそれにあは  
せて唱ふ。花のかはい、頭かみはふるへて、その鐘が鳴りわたる。音楽が響きわたると  
森の一族はダンスを始める。啄木鳥きつぽが幹を三度つゝく。すると愛の女神が魔法の杖  
を上げる。

ひっそりとする。おそろしく莊おごそかな静けさ。秘密に充ちた森の沈黙。彼女のくち  
びるからメロディの様にひびく言葉だけがきこえる。さあロクサンよ、彼女の言葉



をおき。

『そなたは王座に座してゐる。大なる所有の中に。何故なればそなたの心は愛に充たされてゐるから。そなたの唇は黙して、たゞ眼だけが語つてゐる。』

接吻の封印は如何なる行にも適ふ。その封印は唇の秘密をかくし持ち、眼の炎を燃えあがらせる。そなたの秘密はすべての秘密の中の秘密であり、その中にそなたは生き又死ぬ。そなたは霧の中に戦ひ、ある夢を夢み、欲求の中に生き、現實へと目覺める。眞理に、愛の織りなした眞理へと目覺める。

鈴蘭の花で、すみれの花で、又複郁たる草の露で、私はそなたの頭をかざる。ダイヤモンドの輝きはそなたの眼から照り出づるし、ルビイの炎はそなたの唇を生々とさせる。地上最大の國がそなたに屬してゐる？ 凡ての境界のはじまりとをはり！ それは人間の魂の大きなたのしみです。私の家來たちよ！ 喜べ、新しい王に忠



義をつくせ。王國の入口で、最初に接吻した感情の高まりに。』

すつかり静かになる。幸なこゝろよい沈黙。——もつとさきを。……ロクサンは囁いた……それから何を見たの。

——かはいらしい青い花が私たちのまはりに咲きむれてゐる。愛の幸福をあらはす花。虹が私たちの上に橋を架ける。それは私たちの涙の反射した幸福の光線です。幸福をもたらす太陽が私たちに戯れる。それは私たちの愛の太陽で萬物を照らす。私を、あなたを、全世界を。

——では夢ではないのかしら！　もし夢ならば、あなただけが見たでせうに、けれども私もそれを見た。そして全く同じものを見てゐる……

それでは魔法が私たちに戯れてゐるのだ、その魔法は現實！

私にちは王座に座してゐる。私たちは人生の王冠を得たものだ。世界は私たちに



ロクサン

事へ、存在も、生活も、創造も、愛も、私たちのものだ。



昭和十年八月五日印刷  
昭和十年八月九日發行

殺人犯

非賣品

譯者 角岡知良

發行者 西見茂

印刷者 東京市小石川區大塚仲町四一  
生方正男



發行所

東京・小石川・大塚仲町四一  
振替東京八二四九八番  
電話大塚三六八九番

言海書房

印刷所 印刷 木行  
本製所 本製 嘉小



丸山 幹治	溜飲を下ぐ	四六判美本 三五〇頁	定価 一・五〇	送料 〇・一〇
丸山 幹治	黒頭布を脱ぐ	四六判美本 四〇〇頁	一・八〇	〇・一二
豊島與志雄	創作集 道 化 役	四六判美本 三五〇頁	一・八〇	〇・一二
大井 廣	歌集 悲 心 抄	四六判上製 三〇〇頁	一・五〇	〇・一〇
齋藤 直幹	財政政 中 國 防 論	四六判上製 三五〇頁	一・五〇	〇・一〇
北村 佳逸	儒教哲學解説	三菊版 〇〇上製	二・〇〇	〇・一二
安藤 徳器	陸海軍今昔物語	四六判美本 三五〇頁	一・五〇	〇・一〇
安藤 徳器	歴代内閣物語	四六判美本 三五〇頁	一・五〇	〇・一〇
口村 靈山	幸開運 拓 運命の創造	四六判美本 三〇〇頁	一・〇〇	〇・一〇
並河 亮譯	アプトン・シンクレア 原作 聖 林 爆 撃	前篇 續篇	一・二〇 〇・〇〇	〇・二〇 〇・〇〇



800430

ORSZ. SZÉCHÉNYI-KÖNYVTÁR	
B	Növedéknapló
1958 év	10.561 sz.







## Nachwort

Vor zwei Jahren zeigte mir Herr Tomoyoshi Sumioka die Novellen von Sandor von Hegedues und bat mich sie zu uebersetzen. Ich sagte freudig zu; denn Sandor von Hegedues ist ein ungarischer Dichter, und ich hatte mich schon als Kind nach seinem Vaterlande gesehnt. Aber wie gross war mein Erstaunen, als ich hoerte, dass Sandor von Hegedues der Neffe Yokais, einer meiner Lieblingsdichter, waere. Mit doppelter Freude habe ich dann zwoelf Novellen uebersetzt und sie in Zeitungen und Zeitschriften veroeffentlicht. Unter diesen Novellen wurden „Der Brief der Mutter“ und „Wir Zwoelf“ besonders gelobt und mit nicht geringer Begeisterung gelesen.

Wie das Madjarische aus dem Deutschen herauszulesen und schoen ins Japanische zu uebersetzen sei; das war nicht leicht. Denn der Unterschied des Empfindens in beiden Sprachen ist gross. Aber etwas, was ich bei Sandor von Hegedues fand, war japanische Stimmung und japanische Empfindung. Jeder Japaner, der seine Werke mit Begeisterung liest, wird bestimmt die japanische Note anerkennen.

Dass diese Sammluug herauskommt, ist ganz und gar das Verdienst von Herrn Tomoyoshi Sumioka.



Er hat nicht nur seine wertvolle Zeit fuer die Uebersetzung „des Moerders“ geopfert, sondern auch fuer das Erscheinen des Buches sich selbstlos bemueht. Manche juenge Maenner haben ihm dabei geholfen. So ist diese Sammluug die Kristallisation all der freundlichen Gesinnung, die die Japaner mit Sandor von Hegedues und dem ungarischen Volk verbindet. Mit dem balderscheinenden Buche kann ich Sandor von Hegedues, der seine schoenen Werke seinen japanischen Blutsverwandten sandte, und Herrn Tomoyoshi Sumioka, der mich an dieser bedeutenden Arbeit teilnehmen liess, meine herzliche Dankbarkeit bezeigen.

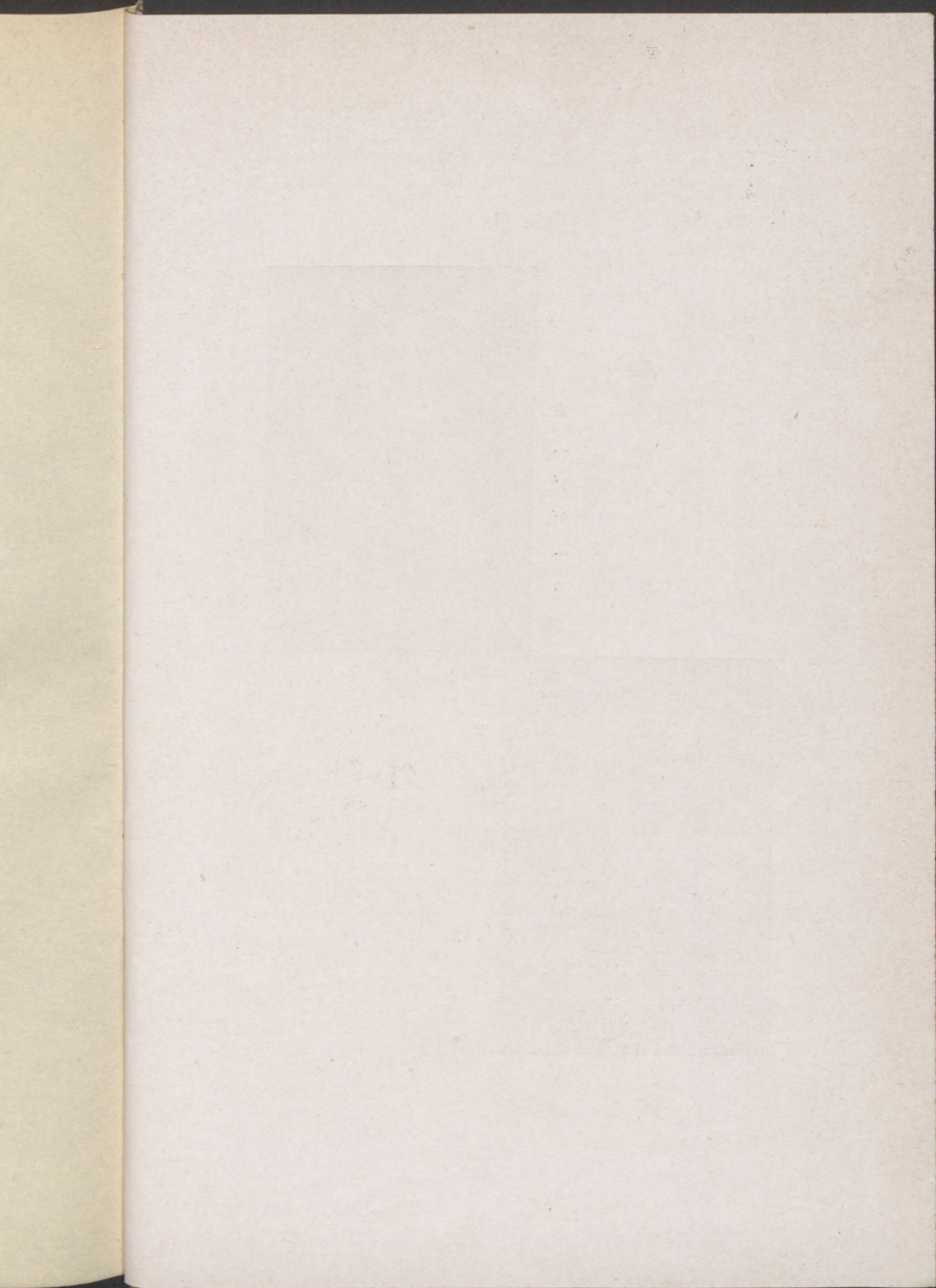
Tokio, 23. Juli 1935.

Mizuyo Ashiya

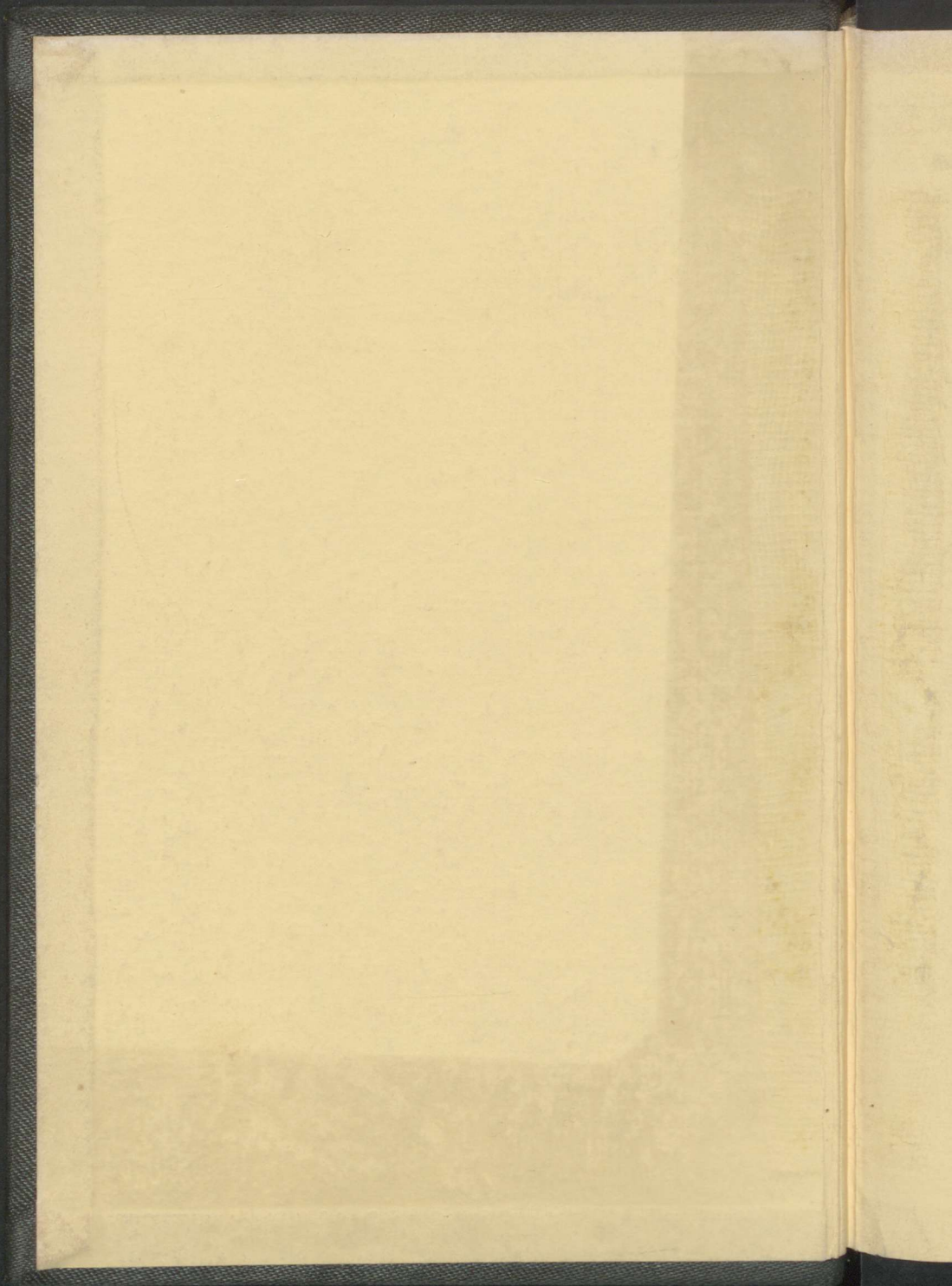
---

Mitarbeiter fuer die japanische Ausgabe der  
Sammlung von Sandor von Hegedues  
Uebersetzung: Tomoyoshi Sumioka, Mizuyo Ashiya,  
Hermann Heuvers, Ryunosuke Ajikawa,  
Hiroo Suga, Toyokichi Imanari  
Einband: Takenosuke Kurosawa  
Verlag: Shigeru Nishimi  
Druck: Masao Ubukata











36—

Mint tisztelt példányt  
kaptam  
Samioka Tomoyoshi  
barátomtól  
1935. augusztusában

Móricz Béla

M.



